

令和4年度

川崎市立小学校

学習状況調査

報告書

川崎市教育委員会・川崎市立小学校校長会

はじめに

川崎市教育委員会
教育長 小田嶋 満

令和時代も4年目を迎え、全世界的に、社会状況は変化の大きさをさらに増してきています。新しい学習指導要領の実施が、今年度より高校でも始まり、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちにとって必要な資質・能力を、確実に育てていくために、学校教育のますますの充実が求められています。

教育委員会では、平成27年3月に第2次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン」を策定し、川崎の教育施策を推進してきておりますが、本年度からは、令和7年度までを計画期間とする「第3期実施計画」に基づき、本教育プランの基本理念や目標を踏まえ、教育の諸課題解決に向けて教育施策の着実な実施に努めております。本教育プランの「基本政策Ⅱ 学ぶ意欲を育て、『生きる力』を伸ばす」における「確かな学力の育成」では、すべての子どもが「分かる」ことをめざして、1人1台端末を最大限に活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的にした学習活動の充実を図っていくこととしています。また、学習指導要領に対応した総合的な学力向上とともに、市学習状況調査の結果の活用推進を、主な取組の重点として位置付けています。

学習指導要領では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力をバランスよく育成し、知・徳・体にわたる「生きる力」を育成することが求められています。各学校では、育成を目指す資質・能力を明らかにし、一人一人の学習状況等を適切に評価し、学習指導上の課題を明確にしながらい指導の改善につなげていくことがより一層必要になってきます。

川崎市学習状況調査は、全市的な規模で学習状況等を調査し、川崎市の子どもたちの学びや生活の全体的な傾向や、子どもたち一人一人の状況を把握することで、保護者や本人に調査結果を踏まえた家庭学習・自主学習の支援をしたり、教師の学習指導上の課題や改善点を明らかにしてより充実した授業改善に活用したりすることを目的として実施しています。調査データを適切に、有効に活用することで、教育活動の質を向上させ、子どもたち一人一人の学びを継続的に捉え、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの改善・充実に役立てることが重要です。

各学校におかれましては、本報告書を積極的に御活用いただき、自校の学習状況を客観的に分析し、把握することで、子どもたちにとって「どのような力が必要なのか」、授業者にとって「どのような指導改善が必要なのか」、「主体的・対話的で深い学びの視点からどのように授業改善を推進していくか」等について考え、教育課程全体の改善に取り組んでいただきますようお願いいたします。

むすびに、川崎市学習状況調査の運営・実施に当たって御尽力いただいた「小学校学習状況調査研究会議」をはじめとする川崎市立小学校長会の皆様に、厚く御礼申し上げます。

学習状況調査の実施にあたって

川崎市立小学校長会

会長 松岡 広記

各学校におかれましては、新型コロナウイルス感染症拡大防止への様々な対応に取り組まれながら、本調査の実施にご協力いただいたことに感謝申し上げます。

川崎市立小学校学習状況調査は、平成17年3月に策定された第1次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン」に基づき、平成17年度から全市立小学校5年生を対象に始まりました。続く平成27年3月に策定された第2次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン」基本政策Ⅱ「学ぶ意欲を育て、『生きる力』を伸ばす」の「確かな学力の育成」にもこの調査が位置付けられ、今年度で18回目の実施となりました。

学習指導要領の着実な実施を目指す中で、各学校では、これまでとは異なる様々な現実や状況の中で生きていく子どもたちに育成すべき「資質・能力」を明確にし、子どもたち一人ひとりのよさや可能性を伸ばしながら、指導する計画と内容を「カリキュラム・マネジメント」し、教育活動の質の向上を図っています。また「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るためには、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」へのプロセスをさらに豊かなものにしていくGIGA端末等の活用が期待されています。

本調査は、児童の学習状況等を調査することにより、学習指導上の問題点及び改善点を明らかにし、充実した授業づくりのためにその結果を活用することを目的の一つとしています。また、調査結果を自校の教育課程編成に生かし、確かな学力の向上のため、PDCAサイクルを機能させることは、学習指導要領で示されている「カリキュラム・マネジメント」の充実につながります。

調査問題の作成につきましては、基礎的・基本的な事項についての定着状況を把握できるようにするとともに、過去の問題と関連した出題をすることによって、解答傾向の推移を把握できるようにしています。報告書では、各設問を分析、考察し、今後の指導にあたっての改善点等をまとめております。

各学校におかれましては、これまで取り組んでこられた自校の教育活動を検証する際に本報告書をご活用いただき、さらなる充実した授業づくりに努めていただきますようお願い申し上げます。

最後に、調査問題の作成及び結果の分析に取り組んでいただきました川崎市小学校教育研究会国語教育研究会並びに算数教育研究会の皆様には厚くお礼申し上げます。また、本調査実施にご尽力いただきました川崎市教育委員会・川崎市総合教育センターの皆様には深く感謝申し上げます。

目次

I 調査の概要	
1. 調査の目的	5
2. 調査の内容	5
3. 調査の対象	5
4. 調査実施日及び調査対象教科・人数	5
(1) 調査実施日	5
(2) 調査対象教科・人数	5
II 調査結果の概要	
1. 国語	6
(1) 作問にあたって	6
(2) 領域等ごとの結果	6
(3) 出題・観点等一覧	7
(4) 大問ごとの分析と考察	8
(5) 今後の指導にあたって	22
2. 算数	24
(1) 作問にあたって	24
(2) 領域ごとの結果	24
(3) 出題・観点等一覧	25
(4) 大問ごとの分析と考察	26
(5) 今後の指導にあたって	49
3. 生活や学習についてのアンケート	54
調査の概要	54
調査結果と分析	56
単純集計	56
クロス集計	77
資料 調査結果集計表	87
III 資料編	99
国語（問題用紙・聞き取り問題原稿・解答用紙）	
算数（問題用紙・解答用紙）	
生活や学習についてのアンケート（質問用紙・回答用紙）	

I 調査の概要

1. 調査の目的

全市的な規模で児童の学習状況を調査することにより、学習指導上の問題点及び改善点を明らかにする。その結果を、各学校においては、今後の学習指導法の改善や教育課程編成の工夫等、児童の資質・能力の向上に役立てる。

2. 調査の内容

○ 国語・算数

調査の目的に基づき、学習指導要領に定める第4学年までの内容のうち、ペーパーテストで調査を行うことが適当な項目について調査を実施した。

○ 学習意識調査(生活や学習についてのアンケート)

児童の学習や生活に対する意識等について明らかにするために、児童を対象とする意識調査を実施した。

3. 調査の対象

市内全市立小学校の第5学年の児童

4. 調査実施日及び調査対象教科・人数

(1) 調査実施日 令和4年5月10日(火)

(2) 調査対象教科・人数 小学校第5学年

国語	11,625 人
算数	11,625 人
生活や学習についてのアンケート	11,637 人

II 調査結果の概要

1. 国 語

(1) 作問にあたって

- ① 本調査の目的に鑑み、主に4年生までの国語科の目標及び内容の基礎的・基本的な事項についての定着状況の把握に資する出題となるように努めた。
- ② 国語科の学習指導要領においては、各学年の目標及び内容などが2学年ずつまとめて示されている。したがって本調査では主に、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項の中から出題している。
- ③ 国語科の内容は〔知識及び技能〕と〔思考力, 判断力, 表現力等〕に含まれる、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」の領域からなっている。本調査の作問にあたっては、児童の学力の状況をなるべく広い範囲において把握していくために、各領域から出題することとした。しかし、本調査によって測定できる学力は、特定の一部であることを踏まえて調査結果を活用していきたい。
- ④ 〔知識及び技能〕については〔思考力, 判断力, 表現力等〕に示す事項の指導を通して行うことを基本としている。しかしながら、本調査では学力の状況を把握するため、大問2及び大問3において、特定の事項を取り上げて出題をしている。

(2) 領域等ごとの結果

領域等	該当する問題番号	正答率(%)
① 話すこと・聞くこと	[大問1](1)(2)(3)(4)	72.4
② 書くこと	[大問6](1)(2) [大問7]1, 2	70.1
③ 読むこと	[大問4](1)(2)(3)(4) [大問5](1)(2)(3)(4)①②③	73.2
④ 伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	[大問2](1)①②③④⑤⑥(2) [大問3](1)(2)(3)(4)①②(5)(6)	82.6

(3) 出題・観点等一覧

教科平均正答率 76.8

出題・観点等一覧

通し番号	大問番号	中間番号	小問番号	解答形式		正答			知識・技能	観点			問題の内容	領域	出題のねらい	学習指導要領	平均正答率(%)
				選択	記述	(選択式・番号 記述式一言業)	思考・判断・表現(書くこと・聞くこと)	思考・判断・表現(書くこと)		思考・判断・表現(読むこと)							
1	(1)		☆	☆		2	◎					話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができる。	話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができる。	【思判表】A(1)エ		81.3	
2	(2)		☆			1	◎					話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	【思判表】A(1)エ		66.9	
3	1	(3)	☆			4	◎					話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	【思判表】A(1)エ		70.8	
4	(4)		☆			1	◎					話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができる。	【思判表】A(1)エ		70.6	
5			☆	★	職業		◎					漢字を書く		【知技】(1)エ		51.0	
6	(2)		☆	★	畑		◎					漢字を書く		【知技】(1)エ		91.7	
7	(1)	(4)	☆	★	えいよう		◎					漢字を詠む	言葉の特徴	【知技】(1)エ		95.3	
8	2	(5)	☆	★	温めて		◎					漢字を書く	言葉の特徴	【知技】(1)エ		71.4	
9		(6)	☆	★	や		◎					漢字を詠む	言葉の特徴	【知技】(1)エ		96.8	
10	(2)		☆	★	この		◎					漢字を詠む	言葉の特徴	【知技】(1)エ		94.3	
11	(2)		☆	★	十二(12)		◎					漢字の書き順	言葉の特徴	【知技】(1)エ		70.2	
12	(1)		☆			3	◎						接続語を理解している。	【知技】(1)カ		89.3	
13	(2)		☆			2	◎						主題について理解している。	【知技】(1)カ		69.7	
14	(3)		☆	★	うつくしい		◎						国語辞典を利用して調べることができる。	【知技】(2)イ		80.1	
15	3	(4)	①	★	だるま		◎					言葉の学習	言葉の特徴	【知技】(1)ウ		84.5	
16	(2)		☆			4	◎						ローマ字で書かれた身近な単語を詠むことができる。	【知技】(1)ウ		91.4	
17	(5)		☆			1	◎						身近な単語をローマ字で書くことができる。	【知技】(1)ウ		80.6	
18	(6)		☆			3	◎						伝えたい気持ちを適切に使うことができる。	【知技】(3)イ		90.2	
19	(1)		☆			1	◎						場面や状況に合わせて注意して、動作の主体をとらえることができる。	【思判表】C(1)イ		80.0	
20	(2)		☆			2	◎						叙述をもとに登場人物の様子や気持ちを読み取ることができる。	【思判表】C(1)イ		90.6	
21	4	(3)	☆			4	◎						叙述をもとに登場人物の性格を読み取ることができる。	【思判表】C(1)イ		94.8	
22	(4)		☆			3	◎						叙述をもとに登場人物の気持ちの変化を読み取ることができる。	【思判表】C(1)イ		78.7	
23	(1)		☆			3	◎						文と文の意味のつながりを理解して文章を読み取ることができる。	【思判表】C(1)ア		89.5	
24	(2)		☆			3	◎						指示語の内容をとらえて文章を読み取ることができる。	【思判表】C(1)ア		78.6	
25	(3)		☆			2	◎						段落相互の関係に注意して文章を読み取ることができる。	【思判表】C(1)ア		64.5	
26	5	(1)	☆	★	にがて		◎						文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を要約することができる。	【思判表】C(1)ウ		48.1	
27	(4)	(2)	☆		(例) 細長い葉をほる		◎						文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を要約することができる。	【思判表】C(1)ウ		55.4	
28	(3)		☆		ためこむ		◎						文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を要約することができる。	【思判表】C(1)ウ		51.4	
29	(1)		☆			4	◎						文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりできる。	【思判表】B(1)エ		88.3	
30	(2)		☆			2	◎						手紙の後付けを書くことができる。	【思判表】B(2)イ		56.3	
31	1	(1)	☆		A・Bのどちらかを選択している		◎						経験したことや想像したことなどから書くことを選ぶことができる。	【思判表】B(1)ア		86.2	
32	2	(2)	☆		理由がわかるように、自分の考えを書いている		◎						自分の考えとそれを支える理由との関係性を明確にして書くことができる。	【思判表】B(1)ウ		49.7	

※いずれも3・4年

※解答形式について、問題が「選択問題」のいずれであるかを★で表しています。

II 調査結果の概要

(4) 大問ごとの分析と考察

大問 1

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率 (%)		
	大問	中間	小問							
1	1		(1)	選択	○ 2		0		81.3	
					1		1		5.3	
					3		2		8.8	
					4		3		3.4	
					上記以外の解答		8		0.2	
					無解答		9		1.0	
					選択	○ 1		0		66.9
						2		1		13.6
						3		2		3.6
						4		3		14.6
				上記以外の解答			8		0.2	
				無解答			9		1.1	
				選択		○ 4		0		70.8
						1		1		2.4
						2		2		8.7
						3		3		16.6
					上記以外の解答		8		0.2	
					無解答		9		1.2	
				選択	○ 1		0		70.6	
					2		1		12.4	
3		2			7.2					
4		3			8.1					
上記以外の解答		8			0.1					
無解答		9			1.6					

[2] 出題のねらい

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「A 話すこと・聞くこと」の内容は、以下の通りである。

ア「目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。」

イ「相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えると。」

ウ「話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。」

エ「必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉え、自分の考えをもつこと。」

オ「目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。」

この問題は、稲作農家としてお米を作っている上原さんにインタビューをしてわかったことについて発表する場面を想定した問題である。稲作農家の上原さんのインタビューの内容ばかりに注目してしまうことがないように、本編が始まる前にナレーターから気をつけて聞くポイントを伝えている。目的に応じて、発表の内容や発表の仕方、質問者とのやりとりに気をつけて聞く能力を問うこととした。

(1)は、話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができたのかを問う問題である。発表の内容を

的確に聞き取り、話し手が伝えたいことを聞き取ることができたかを問うている。

(2)も、話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができたかを問う問題である。稲作農家の上原さんの話そのものではなく、発表者が話を聞いて心に残っていることについて正しく聞き取ることができたかを問うている。

(3)は、話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができたかを問う問題である。インタビューしてわかったことから話の構成を考え、「一つ目は……」「二つ目は……」と整理して伝えることを「発表の工夫」と捉えることができたかを問うている。

(4)も、話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができたのかを問う問題である。質問者とのやりとりを取り上げた問題であるが、質問に答えただけでなく、必要な情報を加えて話をすることの大切さに気付くことができたかを問うている。

[3] 解説

「話すこと・聞くこと」の平均正答率は72.4%であり、(1)は正答率が81.3%とおおむね良好であった。しかし、(2)は66.9%、(3)は70.8%、(4)は70.6%であった。

(1)は、話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができたかを問う問題である。正答率は、81.3%とおおむね良好であった。「上原さんが、お米を作るときに、食べてくれる人のことを思いうかべている理由」について、話の意図を理解して聞き取れていたことが分かる。

(2)も、話の中心に気をつけて、発表を聞き取ることができたかを問う問題である。正答率は、66.9%であった。発表者が質問者に対して答えている内容と混同して、自分で想像して答えてしまう傾向が見られた。話の内容の中心を正確に聞き取る力を付ける必要がある。

(3)は、話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができたのかを問う問題である。正答率は、70.8%であった。インタビューしてわかったことから話の構成を考え、「一つ目は……」「二つ目は……」と整理して伝える話し方の工夫に気付かせたい。日頃から聞き手を意識した話し方の工夫について意図的に取り上げ、継続して指導するとよい。

(4)も、話の中心に気をつけて聞き、話し方の工夫を聞き取ることができたのかを問う問題である。正答率は70.6%であった。例示を使うことで言葉を具体的にするなど、情報を付け足す指導が必要である。情報を付け足す際にポイントとなるのが接続詞「たとえば」である。説明文等を読む学習でも、具体的な例示を表す接続詞等に注目することで、文章の内容を補いながら理解して読むことができるようになると考えられる。そのため、普段の学習の中でも、例示を使って言葉を具体的にするなど、具体例を意識させることが大切である。

今回は、聞く視点をしっかりとめさせるため、本編の前に気をつけて聞くポイントを伝えた。普段の学習の際にも、聞く視点を明確に示すことで、大事なことを落とさずに聞く練習になると考えられる。また、どの学習でも「話す・聞く」場面は多くあるので、常に相手意識、目的意識をもたせるよう心がけたい。相手の立場や背景を考え、目的をもった話し手になれるように、様々な伝え方を日常の活動でも取り上げていくことが大切である。

大問 2

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
5	2	(1)	①	記述	○ 農業	0		51.0	
					「農」だけが○だった場合	1		8.3	
					「業」だけが○だった場合	2		20.2	
					上記以外の解答	8		12.4	
					無解答	9		8.0	
6			②	記述	○ 畑	0		91.7	
					上記以外の解答	8		5.3	
					無解答	9		3.0	
7			③	記述	○ えいよう	0		95.3	
					上記以外の解答	8		2.6	
					無解答	9		2.1	
8	④	記述	○ 温めて	0		71.4			
			温	1		2.4			
			温て	2		0.2			
			温ためて	3		4.9			
			温たためて	4		0.5			
			上記以外の解答	8		14.0			
			無解答	9		6.6			
9	⑤	記述	○ や	0		96.8			
			送り仮名の重複	1		0.4			
			上記以外の解答	8		1.4			
			無解答	9		1.4			
10	⑥	記述	○ この	0		94.3			
			送り仮名の重複	1		1.2			
			上記以外の解答	8		3.0			
			無解答	9		1.4			
11	(2)	記述	○ 十二 (12)	0		70.2			
			上記以外の解答	8		27.9			
			無解答	9		1.9			

[2] 出題のねらい

学習指導要領における漢字に関する事項は、「第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。」と示されている。

そこで「読み」については第4学年まで、「書き」については第3学年までに配当された漢字の範囲から出題した。また、今年度も日常の生活の中で使うことを意識できるように、文章の中からの出題とした。

①農業(ノウギョウ)は、音読みの熟語を書く力、②畑(はたけ)は、送り仮名のない訓読みの漢字を書く力、④温めて(あたためて)は送り仮名のある訓読みの漢字を書く力、③栄養(エイヨウ)は音読みの熟語を読む力、⑤焼いた(やいた)、⑥好み(このみ)は送り仮名のある訓読みの漢字を読む力を問うている。送り仮名の有無も含め、音読み・訓読みのバランスを考慮して出題した。また、漢字の書き順を理解しているかを問う問題も出題した。

[3] 解説

「読み」の正答率は、③95.3%、⑤96.8%、⑥94.3%で、平均正答率は95.5%と良好であった。その要因としては、出題された語句が日常生活や学校生活で親しみのある語句であり、児童が日記や作文などで慣れ親しんでいたため、読み方を想起しやすかったことが挙げられる。また、「栄養」「焼いた」「好み」は、文章中の語句同士のつながりから意味を捉え、それぞれの読み方を想起しやすかったことも良好な正答率であったことに関係していると考えられる。

「書き」の正答率は、①51.0%、②91.7%、④71.4%で、平均正答率は71.4%であった。漢字の習得の際に、正しい字形を捉えることや熟語としての理解、送り仮名の正しい理解が不十分であることがうかがえる。①の「農業」については51.0%の正答率であった。熟語としての意味は理解しているものの、どちらか一方の漢字しか書けていないことから、熟語として2文字の字形を正確に覚えていないことが要因として挙げられる。中でも「農」の正答率が低いことから、画数が多く字形がとりにくい漢字についての理解が不十分であると考えられる。④の「温めて」のように、漢字の字形を理解していても、送り仮名を理解していない場合があるため、文や文章の中で漢字を活用する経験を増やす必要がある。筆順を問う問題の正答率は70.2%であった。漢字の筆順が字形と深く関係していることを捉えて理解できるよう、筆順について丁寧に指導していくことが大切である。

学習指導要領の「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、漢字を「文や文章の中で使うこと」が示されていることから、日常的に文や文章の中で適切に使うことができるように指導を積み重ねることが大切である。国語科での漢字の学習の場面だけでなく、他教科等の学習や日常で文章を書く様々な場面において意識的に漢字を使うように指導し、学習した漢字を使う習慣を身に付けさせたい。

また、熟語の使用が増える高学年においては、同音異義語に注意するなど、漢字のもつ意味を考えて文や文章で使えるようにすることも大切である。国語辞典や漢字辞典を利用して熟語や漢字の意味等を自分で調べる活動を通して漢字への興味や関心を高め、語彙力を高めていくことも重要である。

その他、字形や読み方を正確に理解することはもちろん、漢字がへんやつくりなどから構成されていることから漢字の意味を推測すること、漢字がどのように形成されているのかなどの知識の定着を図ることも大切になる。そうすることで、文脈に沿って適切に漢字を使い、自分の思いに適した表現ができる力にもつながると考える。

大問 3

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
12		(1)		選択	○ 3		0		89.3
					1		1		1.0
					2		2		1.1
					4		3		0.5
					上記以外の解答		8		6.8
					無解答		9		1.2
					○ 2		0		69.7
1		1		16.9					
13		(2)		選択	3		2		3.9
					4		3		3.5
					上記以外の解答		8		4.0
					無解答		9		1.9
					○ 2		0		80.1
					美しい、ウツクシイなど		1		0.3
14		(3)		記述	上記以外の解答		8		12.4
					無解答		9		7.3
					○ だるま		0		84.5
					ダルマ、達磨など		1		0.8
15	3	(4)	①	記述	上記以外の解答		8		6.8
					無解答		9		8.0
					○ 4		0		91.4
					1		1		2.2
					2		2		1.9
16		(4)	②	選択	3		3		2.1
					上記以外の解答		8		0.3
					無解答		9		2.2
					○ 1		0		80.6
					2		1		3.1
					3		2		1.6
17		(5)		選択	4		3		11.9
					上記以外の解答		8		0.6
					無解答		9		2.1
					○ 3		0		90.2
					1		1		3.9
					2		2		1.3
18		(6)		選択	4		3		2.4
					上記以外の解答		8		0.4
					無解答		9		1.9

[2] 出題のねらい

学習指導要領の(1)「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、中学年(1)カ「主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解すること」や、低学年のカ「文の中における主語と述語との関係に気付くこと」、中学年ウ「日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと」、(2)「情報の扱い方に関する事項」の中学年(2)イ「辞書や事典の使い方を理解し使うこと」、「我が国の言語文化に関する事項」の中学年(3)イ「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」について学習の定着度を測る問題である。

(1)は接続する語句の役割を理解できているかを問う問題である。文の意味を正しく捉えて、適切な接続する語句を使うことができるかを問うている。

(2)は主語を問う問題である。昨年までも正答率が低く、主語と述語との関係を正しく捉えられていない児童が多い現状を踏まえ、今回も引き続き出題した。

(3)は、国語辞典を利用して調べる問題である。辞書の使い方を理解して使うことは、情報化社会において必要な情報を収集したり、語彙を豊かにしたりするために必要な知識及び技能であり、第3学年及び第4学年で学習する。国語辞典を利用して文中の言葉を調べることを想定し、調べたい言葉を適切な形に変える問題とした。

(4)は日常で使われている簡単な単語について、ローマ字を読むことや書くことができるかを問う問題である。

(5)は、ことわざの意味を知り、日常生活で適切に活用できるかを問う問題である。

(6)は、伝えたい気持ちを適切に言葉で表すことができるかを問う問題である。

[3] 解説

(1)は接続する語句を問う問題である。正答率は89.3%と良好であった。正答率が高かった理由としては、一つ目の文の「～わくわくしながら近所の書店に行きました。」に対して、「～がっかりしました。」という二つの文との関係を理解していること、接続助詞の「～のですが」の後に予想とは逆の意味となる結果が記されていることを理解していることが考えられる。今後も全ての領域の学習で、文相互の関係や段落相互の関係を捉え、接続する語句の意味を正しく理解して適切な使い方ができるように丁寧に指導していきたい。指示する語句や接続する語句を適切に活用する力を育てることで、伝えたいことをより明確にしたり端的に示したりすることができる。学習や日常生活の中で意識的に使うことを促し、そのような表現を適切に使う場面が見られた時には価値づけをし、全体で共有することで表現力を育てていきたい。

(2)は、主語を問う問題である。正答率は69.7%であった。主語は文頭にくるものと捉えていることや、主語と述語がそれぞれどのようなものかを理解していないことが考えられる。

「主語・述語の関係」については、書き言葉としての文章だけでなく、話し言葉として話される文においてもその関係に気づかせることが大切である。日常会話の中でも、主語に対する述語が示されないことや述語に対する主語が示されないことによって話の内容が伝わりにくくなることに気づき、そういったことが起こらないようにするために主語と述語の適切な係り受けについて意識できるようにしていきたい。低学年では、「何が」「どうした」の形から、読みの学習などの様々な言語活動で主語や述語に着目できるようにしていく。また、中学年では、主語と述語の関係に加え、修飾と被修飾との関係を捉えることも身に付け、「だれが」「いつ」「どこで」「なにを」「どのように」「なぜ」等の文の構成について、基本的な理解ができるようにしたい。

(3)は国語辞典を利用して、言葉の意味を調べる活動を想定した問題である。正答率は80.1%とおおむね良好であった。その要因としては、「美しかった」を「美しい」という「見出し語」の形に置き換えやすかったことが挙げられる。しかし、言葉自体や言い切りの形には馴染みがあっても、国語辞典にどのような形で記載されるのかということへの理解が不十分な場合もある。今後も、国語科に限らず各教科等の授業や調べる学習などにおいて国語辞典を日常的に活用できるよう指導していきたい。国語辞典の使い方を理解するとともに、国語辞典をいつでも開くことができるよう手元に置き、必要な時に児童が主体的に調べることができるような環境をつくっておくことも重要である。

(4)はローマ字で書かれた単語について読み方や書き方が定着しているかを問う問題である。正答率は①84.5%、②91.4%で平均正答率は88.0%であった。①の答えである「だるま」は児童にとって

II 調査結果の概要

読みやすかったと考えられ、結果はおおむね良好であった。②のローマ字を書くことについては、正答率が高かった。GIGA端末の普及により、ローマ字は児童の生活により身近なものになってきている。国語科でローマ字を学習する時だけでなく、外国語活動を含めた様々な学習でローマ字を扱うように工夫して指導していきたい。また、調べ学習等では、ローマ字入力を推奨し、個に応じてローマ字表を用意するなどして児童が困難なくローマ字に触れることができるようにすることで定着を図りたい。

(5)は、ことわざの意味を正しく理解しているかを問う問題である。正答率は80.6%であり、昨年度より高かった。引き続き、ことわざや慣用句、故事成語などに触れる機会を意識的に設けていきたい。ことわざを学習する際には、知っていることわざを紹介し合ったり、辞書で意味を調べたりするなどして楽しみ、関心を高めながら学習できるようにしていきたい。ことわざや慣用句の意味を理解し活用することで児童の表現力も豊かになると考える。ことわざや慣用句の意味を知り、先人の知恵や教訓、機知に触れるとともに、実際の言語生活で用いることができるようにしていくことが大切である。

(6)は、伝えたい気持ちを適切に言葉で表すことができるかを問う問題である。90.2%と高い正答率であった。日常的に耳にすることの多い表現であるだけでなく、その意味を正しく理解していたためだと考えられる。気持ちを表現する言葉に多く出会い、意味を理解して活用する力を育てるためには、言語環境として、教師の言語感覚や、言葉に触れることができる教室環境が必要だと考える。日常から児童が言葉に出会うことができる手立てをとり、言葉の力を育てていきたい。

大問 4

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
19	4	(1)	選択	○	1	0		80.0	
					2	1		8.5	
					3	2		6.3	
					4	3		1.0	
					上記以外の解答	8		2.9	
					無解答	9		1.4	
20	(2)	選択	○	2	0		90.6		
				1	1		0.7		
				3	2		5.2		
				4	3		1.7		
				上記以外の解答	8		0.2		
				無解答	9		1.5		
21	(3)	選択	○	4	0		94.8		
				1	1		1.3		
				2	2		1.0		
				3	3		0.7		
				上記以外の解答	8		0.4		
				無解答	9		2.0		
22	(4)	選択	○	3	0		78.7		
				1	1		6.4		
				2	2		1.2		
				4	3		11.3		
				上記以外の解答	8		0.2		
				無解答	9		2.2		

[2] 出題のねらい

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「C 読むこと」では、指導事項、特に文学的な文章に関連するものとして、低学年の「場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること」や「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること」を受けて、「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること」や「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」が求められている。

このように文学的な文章では、物語の内容、登場人物の様子や気持ち及びその変化を読み取る力を身に付けさせたい。これらを踏まえ、次の問題を設定した。

- (1)は、場面の移り変わりに注意して、動作の主体を捉える問題である。
- (2)は、叙述をもとに登場人物の様子や気持ちを読み取る問題である。
- (3)は、叙述をもとに登場人物の性格を読み取る問題である。
- (4)は、叙述をもとに登場人物の気持ちの変化を読み取る問題である。

[3] 解説

(1)は、場面の移り変わりに注意して、動作の主体を捉えることができるかを問う問題である。正答率は80.0%とおおむね良好であった。誤答として、選択肢2の「たくと」が8.5%、選択肢3の「センター長」が6.3%であった。正答である主人公の壮太(ぼく)の名前は、本文中には出てきておらず、前書きに書いてあるだけであった。「たくと」「センター長」がそれまでの本文に出てきているため、解答として選択してしまったと考えられる。一部分の叙述だけではなく、傍線部より前に書かれている内容や場面

II 調査結果の概要

の設定を関連させて読むなど、文章全体から内容や構成を読み取る力をつけていきたい。

登場人物の行動や気持ちなどを共有する際には、動作主体が誰なのかを確認することも大切である。そのため物語文の学習では、初めに登場人物をおさえたり簡単なあらすじを確認したりする活動が大切となる。

(2)は、叙述をもとに登場人物の様子や気持ちを読み取ることができるかを問う問題である。正答率は90.6%と良好であった。令和2年度は80.6%、令和3年度は84.5%の正答率であり、文章全体から読み取る力を育てるような指導の工夫について、年々成果が出ていると考えられる。誤答として多かったのは選択肢3の「アゲハチョウを心配する気持ち。」で、5.2%あった。「②大丈夫だ、このくらい。心配するな。…」と、傍線部の後に心配という言葉が出てきていたために、そのまま選んでしまったと考えられる。一部分の叙述だけではなく、傍線部より前に書かれている内容や場面の設定を関連させて読むなど、文章全体から内容や構成を読み取る力をつけていきたい。

また、学習指導要領における第3学年及び第4学年の〔知識及び技能〕における「音読,朗読」の指導事項として「文章全体の構成や内容の大体を意識しながら音読すること」が求められている。一場面だけを切り取って音読の仕方を考えるのではなく、文章全体として何が書かれているのかを大体に捉えたり、登場人物の行動や気持ちの変化などを大筋で捉えたりしながら音読の仕方を考えるように指導していきたい。また、文字だけでは、場面と場面とを関係付けながら登場人物の様子や気持ちを読み取るのが難しい児童もいる。そのような児童にとっては、挿絵が考える際の助けになることがある。話の順に沿って挿絵を手がかりにしながら、物語の構造や内容を確認していくことも考えられる。

(3)は、叙述をもとに、登場人物の性格を読み取ることができるかを問う問題である。正答率は94.8%と良好であった。登場人物の性格・関係・役割などを考えながら読むことができていた。物語文で登場人物の行動や気持ちなどを考える時は、問題文にもあるように叙述をもとにした発言が出るよう指導をしていきたい。

(4)は、叙述をもとに登場人物の気持ちの変化を読み取ることができるかを問う問題である。正答率は78.7%とおおむね良好であった。3つある誤答の中では、選択肢4の「アゲハチョウを手放すことをさびしく思っている」を選んだ児童が11.3%で最も多かった。文章前半の「涙声になったのが…」という記述や、児童自身の経験からこの誤答選択肢を選択したと思われる。文章の最後の行には「生き物ってすごい。弱いけど強い。」と、生命力に感動していることが分かる文がある。文章全体の地の文や行動、会話などから関連づけて読む力をつけていきたい。

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「C 読むこと」(1)エの指導事項では「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること」が求められている。登場人物の気持ちは、場面の移り変わりの中で揺れ動いて描かれることが多い。そのため、複数の場面の叙述を結び付けながら、気持ちの変化を見いだして想像していく必要がある。主人公がどのような人物なのか、どのように成長していったのかなど、物語全体を読んで考える必要がある学習問題を立てたり、物語全体を見通すことができるように板書を工夫したり、それぞれの場面を関連させながら読むことができるように指導を工夫することが大切である。

大問 5

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率 (%)	
	大問	中間	小問						
23	5	(1)	選択	○	3	0	0	89.5	
					1	1	1	1.0	
					2	2	2	3.3	
					4	3	3	3.3	
					上記以外の解答	8	8	0.8	
					無解答	9	9	2.0	
					24	(2)	選択	○	3
1	1	1	5.2						
2	2	2	7.2						
4	3	3	6.4						
上記以外の解答	8	8	0.1						
無解答	9	9	2.6						
25	(3)	選択	○	2	0	0	64.5		
				1	1	1	12.2		
				3	2	2	12.0		
				4	3	3	4.7		
				上記以外の解答	8	8	0.5		
				無解答	9	9	6.2		
26	①	記述	○	にがて	0	0	48.1		
				上記以外の解答	8	8	40.0		
				無解答	9	9	11.9		
27	(4)	②	記述	○	【解答例】 ・細長い巣をほる ・巣をほる ※誤字・脱字は問わない。 ※敬体で書いたものも許容する。 ※句点をつけているものも許容する。	0	0	55.4	
					巣をつくる など (「ほる」という要素が入っていない)	1	1	5.1	
					穴をほる など (「巣を」という要素が入っていない)	2	2	0.6	
					上記以外の解答	8	8	25.0	
					無解答	9	9	13.9	
					28	③	記述	○	ためこむ(溜めこむ など)
上記以外の解答	8	8	33.1						
無解答	9	9	15.5						

[2] 出題のねらい

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「C 読むこと」では、指導事項、特に説明的な文章に関連するものとして、低学年の「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること」や「文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと」を受けて、「段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること」や「目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること」が求められている。

このように説明的な文章では、説明文に書かれていることを目的に応じて読み、その内容の要点や段落相互の関係を的確に捉える力を身に付けさせたい。また、中心を捉えるためには、接続語、指示語、文末表現に注意しながら、文相互の関係や段落相互の関係を理解し、内容や要点を的確に把握することが必要である。これらを踏まえ、次の問題を設定した。

(1)は、文と文との意味のつながりを理解して文章を読み取る問題である。

(2)は、指示語の内容を捉えて文章を読み取る問題である。

II 調査結果の概要

(3)は、段落相互の関係に注意して文章を読み取る問題である。

(4)は、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を要約する問題である。

[3] 解説

(1)は、文と文との意味のつながりを理解して文章を読むことができるかを問う問題である。正答率は89.5%と良好であった。文や文章における接続語の働きについて、理解できていると言える。ただ、接続語には「順接」「逆説」「転換」「対比」など、他にも様々な種類がある。接続語を適切に使うことで、文や文章などが、相互にどのように関わるのかを明確にし、文相互の関係や段落相互の関係などをつかんだり、端的に示したりすることができるという意味を理解し、適切に使うことができるように継続的に指導していく必要がある。接続語や指示語については、「話すこと」「書くこと」の学習とも関連させながら指導していきたいものである。

(2)は、指示語の内容を捉えて文章を読むことができるかを問う問題である。正答率は78.6%とおおむね良好であった。指示語の内容を適切に捉え「海に向かってとびおり」、そのときに「風をじょうずにとらえ」「飛んでいく」という叙述のつながりをつかむことができている。今後も、文と文との内容のつながりを考えながら読む力をつけていきたい。誤答の中では、選択肢2の「オオミズナギドリがよちよちと前に進むとき。」を選んだ児童が7.2%で最も多かった。この誤答を選択した児童は、直後の「そこから海に向かってとびおります」という叙述により、指示語の内容を適切に捉えることができなかったと考えられる。文と文との内容のつながりを考えながら読む力をつけていきたい。

(3)は、段落相互の関係に注意して文章を読むことができるかを問う問題である。正答率は64.5%であった。「数百羽が集まって」という叙述と「多くの鳥が同時に」という叙述のつながりを捉えられると、正答選択肢を選択できる。誤答の中では、選択肢1を選んだ児童が12.2%で最も多く、次いで選択肢3を選んだ児童が12.0%であった。これらの誤答を選択した児童は、段落ごとの内容の大体を十分に捉えることができていなかったと考えられる。学習指導要領では「段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること」が求められている。書き手の考えとその事例及び、結論とその理由といった関係に着目することが大切である。これらの関係に着目しながら、書き手の考えがどのような理由によって説明されているか、どのような事例によって具体化されているかなどを、叙述を基に正確に捉えていくことが求められる。

(4)は、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を要約することができるかを問う問題である。正答率は①48.1%、②55.4%、③51.4%であり、(4)全体の平均正答率は51.6%であった。

正答率は、令和2年度が73.7%であり、令和3年度は64.9%であった。過去2年間の正答率を下回る結果となり、各段落を短くまとめたり全文を要約したりするような指導を意識的、継続的に行っていく必要がある。また、①、②、③の平均無解答率は13.8%であったことから、まだ、文章全体を正しく読み取って要約することに苦手意識をもつ児童が多いと考えられる。目的に応じて、文章全体の内容を正確に把握し、自分の考えを明確にしながら読むことができるようにしたい。そのためには、「何のために」「何を知りたいのか」「どのような情報が必要なのか」などを明確にした上で、文章に書かれている話題や書き手の考えとその理由、及び、事例となっている内容や構成の仕方などについて注意しながら読んでいくことが大切である。目的に照らして、自分にとって必要な内容であるかどうかを、文章全体から大まかに捉えていくことができるようにしたい。本設問の場合、「体の特徴を知りたい」「子育ての特徴を知りたい」という目的をもって文章を読むことで、必要な情報を見つけることができる。日々の学習においても、目的を明確にした上で書かれている話題や理由、事例などを読む習慣を身に付けさせていきたい。

大問 6

〔1〕 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
29	6	(1)		選択	○	4	0		88.3
						1	1		3.4
						2	2		0.8
						3	3		1.5
						上記以外の解答	8		0.2
						無解答	9		5.8
30		(2)		選択	○	2	0		56.3
						1	1		18.0
						3	2		18.4
						上記以外の解答	8		0.3
						無解答	9		7.1

〔2〕 出題のねらい

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「B 書くこと」の指導事項には、ア「相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること」とある。ここでは、言語活動例「行事の案内やお礼の文章を書くなど、伝えたいことを手紙に書く活動」から、実用的な文章を書く力の定着度を把握する意図で、お礼の手紙の書き方や後付けにおける署名と宛名位置関係を問うている。

(1)は、文章の間違いを正したり、よりよい表現を考えたりする問題である。

(2)は、後付けにおける日付や署名、宛名の位置関係を問う問題である。

〔3〕 解説

大問6は、例年通り、お礼の手紙の書き方や後付けにおける署名と宛名の位置関係といった基本的な形式を理解しているかを問う問題である。平均正答率は、72.3%であった。

(1)は、文章の間違いを正したり、よりよい表現を考えたりする問題である。正答率は88.3%と良好であった。相手の立場を意識し、どのような文末表現にすればよいのかを考えることができていた。

(2)は、後付けにおける日付や署名、宛名の位置関係を問う問題である。正答率は56.3%であり、昨年度までと比べると正答率は若干上昇したものの、これからも継続的な指導が必要である。日常生活の中で、子どもたちが手紙やはがきを書く経験が少ないこと、書く機会があっても日付、署名、宛名の正式な位置関係を意識していないため、誤った位置関係で書いていることが今回の正答率につながったと考えられる。

昨今、情報機器の発達により、手紙を書く機会は少なくなってきたが、言語活動例にもあるように、手紙やはがきの表書きを正しく書くことや後付けにおける署名や宛名の位置関係といった基本的な形式を押さえることが求められている。今後、国語科の授業に限らず、学校行事や、地域行事、講師を招いての学習等と関連付けて指導していきたい。子どもたちが目的と相手意識をもち、礼状や依頼状、招待状等を書けるようにすることが大切である。子どもの思いを大切にしながら教師が計画的に書く活動を設定していくことで、手紙やはがきの書き方の定着につながっていくと考える。また、手紙を書く際、日付、署名、宛名等を入れた用紙を用意するのではなく、児童自身が実際に書くことで正しい位置関係を定着できるようにすることが重要である。手紙や案内等を書くことに必要感をもたせながら、基本的な形式が理解できるようにしていきたい。

大問 7

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
31		1		選択	○	A・Bのどちらかの記号を書いている。	0		86.2
						上記以外の解答	8		2.3
						無解答	9		11.4
32	7	2		論述	○	<ul style="list-style-type: none"> ・選んだA・Bにつながる内容を書いている。 ・選んだ活動によって交通安全に気をつけて登下校ができるようになる理由がわかるように、自分の考えを具体的に書いている。 ・「なぜなら、」につながるように書いている。 ・30字以上、50字以内で書いている。 	0		49.7
						自分の考えを書いているが、交通安全に気をつけた登下校をうながす活動として、選んだ活動のよさが伝わるように書いていない。	1		9.5
						自分の考えを書いていない。	2		0.4
						「なぜなら、」にスムーズに接続しておらず、「～から」「～ため」のような、理由を表す表現を用いていない。	3		5.8
						30字未満で書いている。	4		2.3
						51字以上で書いている。	5		1.6
						上記以外の解答	8		16.4
						無解答	9		14.2

[2] 出題のねらい

学習指導要領における第3学年及び第4学年の「B 書くこと」におけるウ「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること」に基づいて出題している。

記述問題へ抵抗なく取り組めるように、委員会活動での話し合いを題材として取り上げた。

[3] 解説

記述部分の正答率は49.7%であった。生活委員会で、みんなが交通安全に気をつけて登下校するにはどのような活動を行えばよいか話し合い、出てきた2つの意見に対してどちらの意見に賛成するか、理由を書いて投票するという場面を設定した。選んだ理由を書いたり、字数を制限したりという条件を設定し、採点基準としている。

①の条件は、2つの意見から1つを選ぶものである。正答率は86.2%と良好であった。しかし、選択式だったにもかかわらず、無解答率は11.4%だった。「書くこと」や記述の問題に苦手意識や抵抗感をもつ児童や、限られた時間で解くために、大問7までたどり着けなかった児童がいた可能性が考えられる。

②の条件は、定められた文字数で理由や事例をあげて自分の考えを書くというものである。選んだことの良さが伝わるように書いていない解答が9.5%、自分の考えを書いていない解答が0.4%であった。これらの誤答の要因としては、選択した活動が、どのようによいか理由の記述ができなかったり、自分の考えや思いを記述することに慣れていなかったりすることが考えられる。また、「なぜなら、」にスムーズに接続していない解答が5.8%あった。これらの誤答の要因としては、設問の条件を読み落としていることや、理由を表す表現を理解していないことが考えられる。指定の文字数に満たない解答は2.3%、文字数以上に書いている解答は1.6%であった。このことから、定められた文字数や時間の中

で、自分の考えを伝える言葉を知らなかったり、適切な言葉を使えなかったりすることが考えられる。自分の考えを明確にして伝えるためには、文章を書いたら構成や書き表し方を推敲する習慣をつけることが大切である。そのためにも、日常的に書く活動を取り入れて指導していきたい。

大問7の記述部分の無解答は14.2%であり、①の選択式の問題でも無解答が11.4%であった。自分の考えを書き表す力は、国語科の学習に限らず、各教科等の学習や日常生活においても必要な力である。観察記録、調べたことをまとめた報告文、紹介文等、分かったことや自分の考えを書く活動をより一層重視して行いたい。また、前後の文脈や、指示された文字数で書くという条件を設定する等、指導を工夫することで、目的に応じて自分の考えを適切にまとめて書き表せるようにしていきたい。

相手から感想が返ってきたり、手紙の返信がきたりすることによって、人との関わりを感じるができる。「書いてよかった」と実感できる場を設定することで書く意欲も高まるであろう。このように、目的に応じて自分の考えを書く活動を積み重ね、書き慣れることによって、子どもたちの書く力を伸ばしていきたい。

Ⅱ 調査結果の概要

(5) 今後の指導にあたって

○ 話すこと・聞くこと【大問1】

学習指導要領における中学年の「話すこと・聞くこと」の内容では、「聞くこと」について、「話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉えること」を示している。

「話の中心に気をつけて聞き取ること」については(1)の正答率が81.3%とおおむね良好であったことから、話の意図を理解して聞き取れていたと考えられる。一方で同じ「話の中心に気をつけて聞き取ること」について問うた(2)の正答率は66.9%であり、発表者が質問者に対して答えている内容と混同して、自分で想像して答えてしまう傾向が見られた。これは、相手意識が不十分であることが原因の一つとして考えられる。話を聞く際には、常に相手を意識しながら聞き、相手がどのような考えをもっていいのか聞き取れる力を身に付けさせたい。そのことが、高学年の内容である、自分の考えと比較しながら聞く力の育成につながっていくと考える。

○ 書くこと【大問6・7】

手紙の基本的な形式を問う問題と、与えられた条件のもとに自分の考えを記述する問題を出題した。手紙を書く際の後付けにおける日付と宛名の位置関係を理解しているかを問う問題の正答率は56.3%であった。昨年度が51.6%、一昨年度が39.0%であり、年々、正答率が上昇している。しかし、約半数の児童は理解しているとは言えない状況であり、その原因としては、日常生活において基本的な形式を意識せずに手紙を書いていることが考えられる。今後も、基本的な形式の手紙を書く場面を意図的に設定し、繰り返し書き方を学習していく必要がある。

与えられた条件のもとに自分の考えを記述する問題では、正答率は49.7%であり、昨年度(59.9%)同様、書くことへの苦手意識が見られる。

書く目的として、伝える、報告する、説明する、依頼する、案内する等、生活の中で必要となるものを取り上げ、目的意識を明確にして、書く力の向上を図りたい。また、無解答の割合が少なくないことから、書くことに対する意欲が低い児童や、書くことを苦手とする児童がいることが分かる。書いたものが生活で生かされたり、感想や返事が返ってきたりするような場面を設定し、「書いてよかった。」という充実感を味わうことができるような体験も大切である。

○ 読むこと【大問4・5】

「読むこと」については、文学的な文章、説明的な文章のいずれにおいても、目的に応じて内容の中心を捉えたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を育てていきたい。

文学的な文章からの出題では、平均正答率は86.0%であった。登場人物の行動や気持ちなどについて叙述をもとに捉えるためには、物語全体を見通して、複数の叙述をもとに行動や気持ちなどを捉えることができるように指導していきたい。

説明的な文章からの出題では、平均正答率は64.6%であった。中でも、(4)の目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約することの問題では平均正答率が51.6%と低かった。目的に応じて、文章全体の内容を正確に把握し、自分の考えを明確にしながらかくことができるようにしたい。そのためには「何のために」「何を知りたいのか」「どのような情報が必要なのか」などを明確にした上で、文章

に書かれている話題や書き手の考えとその理由、及び、事例となっている内容や構成の仕方などについて注意しながら読んでいくことが大切である。

文学的な文章、説明的な文章のいずれにおいても、目的意識、課題意識を明確にし、児童が主体的に読むことのできる課題を設定することが大切である。また、読みを深める際に着目した叙述とその理由を友達と交流することで、文章中の言葉の働きに気付くこともできる。主体的・対話的で深い学びの実現が求められている。

○ 知識及び技能【大問2・3】

漢字の「書き」については、平均正答率は71.4%であった。漢字の習得の際に正しい字形を捉えることや熟語としての理解、送り仮名の正しい理解が不十分であることがうかがえる。学習指導要領では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」において漢字を「文や文章の中で使うこと」が示されている。このことから、日常的に文や文章の中で適切に使うことができるように指導を積み重ねることが大切である。漢字の学習場面だけでなく、他教科・領域の学習や日常の様々な場面で意識的に漢字を使うことができるように指導し、学習した漢字を進んで使う習慣を身に付けることができるようにしたい。

また、主語を問う問題では、正答率が69.7%であった。主語や述語の意味を正確に理解していないことや、「主語は必ず文頭にくるものだ」という誤った捉えが児童の中に存在していることが原因として考えられる。主語や述語の関係は、書き言葉としての文章だけではなく、話し言葉の中にも存在していることに気付くことができるようにし、意識化していくことも大切である。例えば、日常的な会話の中では、主語に対する述語が示されないことや、述語に対する主語が示されないことがある。しかし、そのことによって伝えたい内容が相手に正確に伝わっているのかという点において、主語と述語の適切な係り受けについて常に意識できるようにしていきたい。

◎ 全体を通して

この調査は指導に生かすことを目的としており、各学校、各学級において児童の学習状況を捉え、成果や課題を整理すること、各大問の「出題のねらい」や「解説」を参考にして、明日からの国語科の授業改善に生かしていくことが望まれる。

学習指導要領における国語科の教科目標には、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」とある。そこで、日常生活に必要な国語の力を適切に使うことができるようにしていくことが求められる。また、人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養っていくことも重要である。そこには、言葉のもつよさを認識したり、言語感覚を養ったりするといったことも大切になってくる。

そのためには、国語科の内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としていることを認識し、他教科等とともに教育活動全体を通して指導するとともに、その力を児童自身が日常生活で活用できるようにすることが大切である。

II 調査結果の概要

2. 算数

(1) 作問にあたって

- ① 川崎市全体における第5学年の学習状況を把握するため、より客観的なデータが得られるように作問を行った。したがって、出題範囲を第4学年までとし、基礎・基本の定着及び活用の様子を見ることができる問題を作成した。また、過去の問題と関連したものも継続して出題することによって、解答傾向の推移も把握できるように配慮した。
- ② 学習指導要領において、第4学年以上の算数科は「数と計算」「図形」「変化と関係」「データの活用」の4領域で構成されている。そこで、幅広い範囲において学習状況を把握していくために、4領域の項目についてすべて網羅するように出題した。
- ③ 主たる評価観点を考えた上で問題を作成したが、「主体的に学習に取り組む態度」については、ペーパーテストで見るとは難しいと考え、評価の観点としては取り上げないことにした。他の「知識・技能」「思考・判断・表現」の2観点については網羅するようにした。
- ④ 本調査は、児童の学習の実態状況を把握するとともに、各校の教育課程や指導法の検証・改善に生かすことなどをねらいとして行われるものである。したがって、作問にあたっては、解答類型を分析し、調査後どのような点に気を付けて指導していけばよいのかが分かるようにした。
- ⑤ 本調査は、正答率の低い問題を継続的に出題し、授業改善に役立てる意図があることに加え、最近の傾向として、全国調査を参考に説明の根拠を求める問題も出題している。したがって、各学校においては、経年変化よりも、例えば短答式と記述式の正答率の違いといった点に注目し、分析してほしいと考えている。

(2) 領域ごとの結果

領域		該当する問題番号	正答率(%)	
A	数と計算	[大問1](1) ㉔㉕㉖ (2) ㉗㉘ [大問2](1)(2)(3)(4) [大問3] [大問4](1)(2)(3) [大問6] [大問7]		67.7
B	図形	[大問8] [大問9](1)(2) [大問10](1)(2) [大問11] [大問12](1)(2) [大問13](1)(2) [大問14]		56.9
C	変化と関係	[大問5](1)(2) [大問15](1)(2)		58.3
D	データの活用	[大問16](1)(2)		73.3

II 調査結果の概要

(4) 大問ごとの分析と考察

大問 1

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
1	1	(1)	㉞	短答	○ 570		0		75.8
					57		1		15.9
					5700		2		0.2
					上記以外の解答		8		6.5
					無解答		9		1.5
2	1	(1)	㉟	短答	○ 23		0		92.4
					230		1		0.7
					上記以外の解答		8		5.5
					無解答		9		1.4
3	1	(1)	㉡	短答	○ 593		0		72.9
					5.93		1		6.1
					59.3		2		0.3
					80		3		6.4
					上記以外の解答		8		12.0
					無解答		9		2.4
4	1	(2)	㉢	短答	○ 0.46		0		80.7
					1		1		0.4
					0.51		2		0.0
					0.406		3		0.7
					上記以外の解答		8		12.9
					無解答		9		5.3
5	1	(2)	㉣	短答	○ 0.508		0		65.7
					0.58		1		13.2
					0.63		2		0.0
					0.513		3		1.1
					上記以外の解答		8		14.3
					無解答		9		5.7

[2] 出題のねらい

大問1は、「数と計算」領域の「小数の仕組み」に関する問題で、計算の基本的な知識・技能が身に付いているかを見るために出題している。

(1)は、「 $5.7 + 0.23$ について、 0.01 をもとにして計算のしかたを考える問題」で、位の違う数値でも 0.01 を何こ集めた数なのかが分かれば解くことができる問題である。小数が「 $\bigcirc\bigcirc$ のいくつ分」で数が構成されていることを理解しているかを見るために設定した。

(2)は、数直線上の示された数(1目盛りが 0.001 のとき)を読み取ることができるかどうかを見るために設定した。昨年度も同様の問題を出題している。

[3] 解説

(1)は、「 $5.7 + 0.23$ について、 0.01 をもとにして計算のしかたを考える問題」で、小問㉞の「足される数の 5.7 は 0.01 を何こ集めた数かを考える問題」では、正答率が 75.8% であった。小問㉟の「足す数の 0.23 は 0.01 を何こ集めた数かを考える問題」では、正答率が 92.4% であった。小数第2位に数があるかないかで正答率に 16.6 ポイントの違いがあった。昨年度の「 7.3 は 0.01 を何こ集めた数かを考える問題」の正答率は 72.8% で、「 0.15 は 0.01 を何こ集めた数かを考える問題」の正答率は

92.5%だった。昨年度も今年度同様20ポイント近くの正答率の差があった。このことから数の相対的な大きさについての理解が十分でないことが分かる。よって、小問㉔の正答率が72.9%と、小問㉕に近い正答率であると考えられる。

小数は、整数と同じように十進位取り記数法をもとにしているため、ある位の右の位は $1/10$ の大きさを単位にしており、ある位の左の位は10倍の大きさを単位にしている。このことを理解するとともに、単位の考えから〇〇のいくつ分という見方をすれば、小数の計算も整数と同じ考え方でできることに気付くようにしていくことが大切である。また、小数の仕組みを確認しながら数を読ませていく指導や「5.7は1が5と0.1が7こ」「5.7は0.1が57こ」などのように、数の相対的な大きさについて理解を深めていくことが大切である。

(2)数直線上の㉖、㉗にあてはまる数を求めるという問題では、㉖の正答率が80.7%、㉗の正答率が65.7%であった。昨年度は㉖と同様の問題の正答率が79.3%、㉗と同様の問題の正答率が64.6%だった。㉗の正答率が低い理由として、空位のある小数の読み取りが難しいことが考えられる。

今後は、数の相対的な大きさについて理解を深めていくことが大切である。相対的な大きさは、ある位の単位に着目してそのいくつ分と見る見方である。このような見方を養っておくことは、小数の意味についての理解を深めるだけでなく、小数の乗法や除法の計算の仕方を考えるときに役立つ。また、「1をいくつと0.1をいくつ集めた数」「〇〇より0.1小さい数」といった数の加法的な見方と減法的な見方など、多様な見方ができるように、系統的に指導することが大切である。

大問2

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
6		(1)		短答	○	37.09	0		62.9
						3.709	1		0.4
						8	2		0.3
						45.51	3		0.8
						834	4		0.0
						上記以外の解答	8		31.3
						無解答	9		4.4
7		(2)		短答	○	6.75	0		63.5
						675	1		10.4
						6あまり6	2		1.5
						上記以外の解答	8		17.7
						無解答	9		6.8
8	2	(3)		短答	○	55	0		80.9
						480	1		10.3
						上記以外の解答	8		6.2
						無解答	9		2.7
9		(4)		短答	○	$4\frac{2}{5}$ または $\frac{22}{5}$	0		71.3
						$3\frac{7}{5}$	1		18.7
						$3\frac{7}{10}$	2		0.3
						$\frac{22}{10}$ または $2\frac{2}{10}$, $\frac{11}{5}$, $2\frac{1}{5}$	3		0.0
						上記以外の解答	8		7.7
						無解答	9		2.0

[2] 出題のねらい

大問2は、第4学年で学習する計算問題をまとめて出題している。いずれも「数と計算」領域の問題となっており、数量についての知識・技能を見る問題である。

(1)は、小数第2位までの小数の減法の問題である。被減数は小数第1位までの小数、減数は小数第2位までの小数にして、位取りを意識して計算できているかを見るために設定した。

(2)は、わり進みの除法の問題で、わり進む場合の除法ができているかを見るために設定した。

(3)は、四則混合の問題で、四則計算の順番について加減乗除が混合している場合は、乗除から先に計算できているかを見るために設定した。

(4)は、帯分数を含む同分母分数の加法の問題で、同分母分数の加法の仕方に加え、分数部分が仮分数の形になったときの、帯分数の整数部分の処理ができているかを見るために設定した。

[3] 解説

(1) $41.3 - 4.21$ の正答率は62.9%だった。昨年度の $37.9 - 8.43$ の正答率67.2%と同程度の正答率だった。学習指導要領では、小数点をそろえて位ごとに計算するなど、小数の仕組みの理解の上に立って行うようにすると示されている。位の単位を意識し位をそろえて計算できるように引き続き指導していくことが必要である。また、解答類型以外の誤答が31.3%あるため、小数同士の繰り下がり

のある減法については、引き続き分析していくことが必要である。

(2) $54 \div 8$ の正答率は63.5%だった。昨年度の $37 \div 4$ の正答率69.0%より5.5ポイント下がった。小数点を付け忘れてしまう誤答が10.4%あり、商の小数点の処理の仕方について、指導を積み重ねていくことが大切である。また、解答類型以外の誤答が17.7%あることから、わり進みの除法についても、引き続き分析をしていくことが必要である。

(3) $85 - 5 \times 6$ の正答率は80.9%だった。四則混合計算では、乗法、除法を先に計算することは概ね理解できていることが分かる。加法・減法より乗法・除法を先に計算するという四則混合計算のきまりについての指導が充実していると考えられる。一方で「 $85 - 5 = 80$ $80 \times 6 = 480$ 」と、左から順に計算してしまった誤答が10.3%見られることから、今後も継続して、四則混合計算のきまりにしたがって計算できるように、指導を積み重ねていくことが大切である。

(4) 帯分数を含む同分母分数の加法「 2 と $\frac{3}{5} + 1$ と $\frac{4}{5}$ 」の正答率は71.3%であった。昨年度の同様の問題の正答率は74.6%、一昨年度の正答率は71.7%と例年70%前後である。 3 と $\frac{7}{5}$ と答えた児童が18.7%いることから、帯分数は整数と真分数の和から成り立つ数ということを理解させていく必要がある。

II 調査結果の概要

大問 3

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
10	3			短答	○	5(本できて、) 1.2(cmあまる。)	0		56.5
						5(本できて、) 12(cmあまる。)	1		3.3
						5.3(本できて、) △△(cmあまる。) ※残りの内容は問わない(空欄を含む)	2		2.6
						53(本できて、) △△(cmあまる。) ※残りの内容は問わない(空欄を含む)	3		4.0
						5(本できて、) 0.3(cmあまる。)	4		8.1
						5(本できて、) 3(cmあまる。)	5		7.5
						類型4、5以外で、 5(本できて、) △△(cmあまる。) と解答しているもの	6		3.5
						上記以外の解答	8		7.4
						無解答	9		6.9

[2] 出題のねらい

大問3は、「数と計算」領域の「小数と整数のわり算」の文章問題である。わり切れる場合、わり進む場合、あまりを出す場合など、問題場面の把握、立式、計算、解といった一連の思考につながりが見られるか確認するために設定した。

[3] 解説

文章を読んで、 $21.2 \div 4$ の包含除の場面を捉え、処理するこの問題は、正答率が56.5%であり、昨年度の正答率は52.4%であった。児童の誤答を見ると、「5本できて、12cmあまる」と解答した児童は3.3%で昨年度と同程度である。それに比べ、「5.3本できて△△cmあまる」「53本できて△△cmあまる」「5本できて0.3cmあまる」「5本できて3cmあまる」などの、わり進めて計算している児童は22.2%いる。そこから、除法ではとりあえずわり切れるまでわっている児童が多くいると考えられる。つまり、問題場面の意味を十分に捉えられず、わり進む場合とあまりを出す場合を区別できていないという児童が多いということが分かる。

「小数と整数のわり算」の問題場面には、わり進む(わり切れず商を概数で求める場合も含む)場面(等分除)とあまりを出す場面(包含除)とがある。場面の意味を捉え、何の位まで計算すればよいのかを考えることを大切にされた指導を行う必要がある。その指導法として、例えば、問題場面を半具体物や図を用いて表現する活動が考えられる。これらの活動を重視することで、等分除の場面と包含除の場面の違いが捉えやすくなる。また、場面の意味を考える活動を行うことで、単位に意識が向けられ、商とあまりの関係も明確になる。そのような経験を重ねることで、わり進めるべき場面なのか、商は整数まで求めあまりを出す場面なのかの判断を、児童ができるようにしていくことが大切である。

また、問題を読んだときに「答えがどれくらいになりそうか」「どんな数になりそうか」と見積もることや、「出てきた答えが本当に問題場面と結びついているのか」を振り返ることの必要性を、改めて指導していくことが大切である。

大問 4

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
11		(1)		短答	○	10	0		74.3
						3	1		4.3
						13	2		7.2
						1	3		0.7
						上記以外の解答	8		9.9
						無解答	9		3.6
12		(2)		短答	○	$1\frac{1}{6}$ または $\frac{7}{6}$	0		55.1
						$\frac{7}{12}$	1		9.5
						$\frac{1}{6}$	2		1.2
						$\frac{7}{7}$	3		0.1
						小数で解答しているもの	4		9.4
						上記以外の解答	8		18.8
						無解答	9		5.9
13	4	(3)		短答	○	$3 (\rightarrow) \frac{13}{5} (\rightarrow) 2\frac{2}{5} (\rightarrow) 1\frac{4}{5} (\rightarrow) \frac{6}{5}$ ※仮分数を帯分数、帯分数や整数を仮分数にしても、並び順があていれば正解とする。	0		71.1
						類型0以外で3を最も大きいとしているもの	1		13.9
						$\frac{13}{5}$ を最も大きいとしているもの	2		7.3
						$2\frac{2}{5}$ を最も大きいとしているもの	3		3.1
						$1\frac{4}{5}$ を最も大きいとしているもの	4		0.5
						$\frac{6}{5}$ を最も大きいとしているもの	5		0.5
						小さい順に解答しているもの	6		1.4
						上記以外の解答	8		0.6
						無解答	9		1.6

[2] 出題のねらい

大問4は、「数と計算」領域の「分数」に関する問題で、分数の基礎的・基本的な理解ができているかを見ることを目的として設定した。

(1)は、分数が単位分数のいくつ分で表されていることが分かっているかどうかを見るために設定した。

(2)は、テープ図に表された分数を読み取る問題である。量としての分数の理解の定着を見るために設定した。

(3)は、分数と整数を大きい順に並べる問題である。整数一つ、仮分数二つ、帯分数二つを扱い、帯分数か仮分数のどちらかにそろえて比較する必要性が生まれるような問題を設定した。

Ⅱ 調査結果の概要

[3] 解説

(1)は、「1と $\frac{3}{7}$ は、 $\frac{1}{7}$ を□こ集めた数です。」と□に当てはまる数を問う問題である。正答率は74.3%であった。昨年度、同様の問題を出題したところ、72.5%であった。一昨年度は63.0%であったことから指導の成果が出ているといえる。しかし、過去に真分数だけで考える「 $\frac{7}{9}$ は、 $\frac{1}{9}$ を何こ集めた数ですか。」という問題を提示したところ、正答率は95.9%と、より高い傾向であった。真分数については、単位分数のいくつ分という見方はできていても、整数が単位分数のいくつ分であるかという点での理解がまだ不足していることが分かる。今後も、「単位分数が○こ集まるといくつになるか」「整数や分数が単位分数のいくつ分か」など、さまざまな角度から分数を考察する問題に触れる機会を増やし、分数や整数を単位分数のいくつ分であるかと考える見方を育てていく必要がある。

(2)は、テープ図に示された大きさを「1と $\frac{1}{6}$ (または $\frac{7}{6}$)」と分数で表す問題である。正答率は55.1%であった。昨年度は、56.0%であり同等の正答率といえる。また、見た目から「 $\frac{7}{12}$ 」と答えた児童は昨年度と同程度の9.5%であった。長さ(m)を分数で表す場合、「1mを○等分したうちのいくつ分を表す」という量分数の意味がしっかり押さえられていないことが分かる。「もとの大きさに着目して何を何等分したのか考えること」「1を○等分したうちの一つが単位分数であること」「単位分数がいくつ集まって整数になるのか」を意識させるために、数直線を用いる際には、整数部分が「1」で終わりでなく、その先にも続いていくことを理解させるような提示の仕方を工夫する必要がある。また、類型以外の解答をした児童が18.8%いたことから、さらなる分析が必要である。

(3)は、「2と $\frac{2}{5}$ 、 $\frac{6}{5}$ 、1と $\frac{4}{5}$ 、3、 $\frac{13}{5}$ 」を大きい順に並べるといふ問題である。整数、帯分数、仮分数の三つの数の大小比較を問う問題で、今年度の正答率は71.1%であった。昨年度は64.0%であり上昇している。授業で、表し方の異なる分数同士をどのようにして比べればよいかを児童に考えさせたり、どのように直すと比べやすいかを検討したりする活動を取り入れた指導の成果が表れてきているといえる。形式的に比較の仕方を定着させるだけでなく、ある分数を単位分数のいくつ分と見て、同じ形でそろえてみて大きさを比べたり、帯分数、仮分数といろいろな形で表したりする活動を重視することが大切である。

大問5

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
14		(1)		短答	○	値段の()に左から40, 120, 割合の()に□と解答しているもの ※□の中に「3」と書いていても可。	0		29.2
						値段の()に左から120, 40, 割合の()に□と解答しているもの	1		0.2
						値段の()に左から□, 40, 割合の()に120と解答しているもの	2		0.1
						値段の()に左から40, □, 割合の()に120と解答しているもの	3		0.2
						値段の()に左から□, 120, 割合の()に40と解答しているもの	4		0.1
						値段の()に左から120, □, 割合の()に40と解答しているもの	5		0.1
						類型0で, □ではなく3と解答しているもの	6		49.4
						類型1~5で, □ではなく3と解答しているもの	7		0.1
						上記以外の解答	8		14.5
				無解答	9		6.1		
15	5	(2)		記述	○	【大問5(2) 採点基準】 (正答の条件) 次の①, ②の両方を正しく書いている。 ①きゅうりは3倍の値上がりであることを説明している。 ②レタスは2倍の値上がりであることを説明している。 (正答例) きゅうりは(120÷40=3で)3倍の値上がりで, レタスは(200÷100=2で)2倍の値上がりだから, きゅうりのほうがより値上がりしたと考えました。 ※()は不問	0		62.2
						①のみ正しく書いている。	1		3.6
						②のみ正しく書いている。	2		2.0
						レタスが200円, きゅうりが120円でレタスのほうが値段が高い。	3		0.1
						レタスは100円値上がりして, きゅうりは80円値上がりしている。	4		2.3
						上記以外の解答	8		13.9
						無解答	9		15.8

[2] 出題のねらい

大問5は、「変化と関係」領域で、一昨年度から比較量と基準量から割合を求める除法の場面を数直線に表したり、その根拠を記述したりする問題に変更している。

(1)は、問題文から数量関係を読み取り、数直線に表せるかを見る問題である。

(2)は、一昨年度から、2組の数量の値上がりの根拠を記述にして問う問題に変更している。この問題では、値上がりを差ではなく割合を用いて比べることができるかを見るとともに、値上がりの判断について根拠を明確にして表現できるかを見るために設定した。

[3] 解説

(1)の正答率は29.2%であり、昨年度の32.3%と同程度であった。また、数量関係は正しく把握できてはいるものの、本来未知の数「□」と書き表すところを「3」と解答した児童が49.4%いる。このことから、数量関係を正しく把握している児童は78.6%いることが分かる。これは、授業の中で、立式の根拠を考える際に数直線に数量の関係を整理したり、数直線で表された場面を読み取ったりする活動を大切にされた指導を継続した結果だといえる。今後は、立式の根拠を考える際に、問題文の中で明らか

II 調査結果の概要

になっていない数は「□」で表すことを確認し、どのように解答すればよいかを、問題文をよく読んで考える必要がある。

(2)の正答率は62.2%であり、昨年度の60.8%と同等の結果であった。解答を見ると、差で見ている児童は2.3%で、多くの児童は値上がりのときには割合で見ようとしていることが分かる。

昨年の問題文から、「きゅうり」「レタス」という言葉や数を使って説明しましょう。という文を加えたことで、「きゅうり」と「レタス」両方の値上がり率を説明しようとした児童が増え、正答につながっているのではないかと考えられる。しかし、きゅうりとレタスのどちらかの値上がりだけを書くような、二つの数量の関係を比較する説明としては不十分な解答や、無解答の割合もまだ多く見られる。値上がりの判断はできているものの、説明に必要な条件を捉えられていない児童や、自分の言葉で表現することに苦手意識をもっている児童が一定数いることが分かる。

このことから今後も授業では、二つの数量関係をテープ図や数直線に表して捉えたり、判断の根拠を説明したりする活動をよりいっそう大切にしていきたい。自分の考えを図や式、言葉を用いて発表するような場面では、学級全体で行うとどうしても経験できる人数が限られてしまうため、ペアや小グループでの交流なども活用して多くの児童が行えるような手立ての工夫も考えられる。また、自分の考えを説明するときや、まとめ、振り返りなどの場面で、考えたことを自分の言葉で書いて表現するような経験も大切にしたい。

数直線にかくのが難しい児童や、数量関係が捉えにくい場面では、絵や簡単な図を活用して、どんな場面なのかを考えることも必要である。どのような場面で、どんなことが分かかっていて、何を求めるのかをはっきりすることで数量関係を正しく把握できるようになっていくと考える。

なお、学習指導要領では、具体物、言葉、数、式、図、数直線を用いて表したり、考えたり、説明したりする活動を通して指導することが掲げられている。低学年から、具体物や半具体物を1列に並べたり、図に表したりするなどの活動を充実させることが大切である。第2学年のかけ算の学習や、第3学年のわり算の学習でも、数直線を意識したテープ図が教科書などで明示されている。具体から徐々に、より抽象化されたテープ図や数直線を読み取ったり、かいたりする力を育てていきたい。引き続き、低学年より課題場面から立式して計算処理をするだけでなく、テープ図や数直線などで数量関係をまとめるような授業展開が必要である。

大問 6

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
16	6			短答	○	83+17 または 17+83	0		31.2
					○	100	1		5.3
					○	(83+17) または (17+83)	2		1.4
						83×17	3		2.6
						17×83	4		0.1
						2600	5		2.0
						$83 \times 26 + 17$ または 2175	6		7.0
						上記以外で和が100になるもの	7		0.0
						上記以外の解答	8		38.8
						無解答	9		11.5

[2] 出題のねらい

大問6は、「数と計算」領域で、加減乗除に関する計算のきまりを理解し、分配法則を用いて、工夫して計算できるかを見るために設定した。

[3] 解説

正答率は37.9%であった。昨年度は42.9%、一昨年度は53.4%で、年々下がっている。計算のきまり(分配法則)の意味や使い方を指導してきたが、やはり十分な正答率とは言い難い。数値が変わっても計算のきまりが使えるように、分配法則が表す意味について理解し、二つのかけ算を一つの式にまとめたり、逆に一つの式から二つのかけ算を見出したりしていく経験を重ねる必要がある。

指導においては、加減乗除に関して成り立つ性質を使いたくなるような課題設定が大切である。これを使うと計算が簡単にできるという経験を積み重ね、加減乗除に関して成り立つ性質のよさを感じることができれば、計算の仕方を自ら工夫しようとする態度が育つと考えられる。また、83と17という数字を見たときに合わせると100になることや、式のかける数が共通であることに気付くことができるような見方も大切である。数の合成、分解できりのいい数を見つけられる豊かな数感覚が育つよう、低学年のころからの積み重ねも重要である。分配法則の意味理解については、アレイ図や面積図を用いて、図と式が結びつくような指導を大切にしたい。

3年の「かけ算のきまり」や4年の「式と計算」だけでなく、3年の「かけ算の筆算」や4年の「小数と整数のかけ算、わり算」などでも意図的に取り上げることができる。様々な場面で繰り返し学習することで、分配法則を用いるよさを感じたり、理解の充実を図ったりすることが大切である。

大問 7

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率 (%)	
No.	大問	中間	小問					出現率 (%)	出現率 (%)
17	7			短答	○	①500+300+200と解答しているもの ②1000と解答しているもの	0		43.7
						①500+300+200と解答しているもの ②1000以外を解答しているもの(無解答を含む)	1		1.9
						①470+250+200と解答しているもの ②920と解答しているもの	2		5.8
						①470+250+200と解答しているもの ②920以外を解答しているもの(無解答を含む)	3		0.6
						①類型番号0~3以外の組み合わせで、462を470または500に、246を250または300に、198を200に切り上げた式を解答しているもの ②和が式と一致しているもの	4		5.1
						①類型番号0~3以外の組み合わせで、462を470または500に、246を250または300に、198を200に切り上げた式を解答しているもの ②和が式と一致していないもの(無解答を含む)	5		0.4
						①462+246+198と解答しているもの	6		1.2
						①500+200+200と解答しているもの	7		28.5
						上記以外の解答	8		9.3
						無解答	9		3.6

[2] 出題のねらい

大問7は、「数と計算」領域であり、買い物の場面を取り上げ、1000円で買い物ができるかどうかを判断するために、切り上げて計算する日常場面を想定した問題である。切り上げの意味やそのやり方を理解しているかを確認したり、目的に合った数の処理の仕方を考えることができるかを見たりするために設定した。出題にあたっては、四捨五入の例を示し、三つの品物の代金のおよその代金を提示している。その後、日常生活の場面に合うよう代金を切り上げる問題を出題した。

[3] 解説

正答率は54.6%であった。昨年度は54.7%だった。誤答を見ると、切り上げの問題にも関わらず、「500+200+200」と四捨五入をしているものが28.5%であった。四捨五入の仕方は理解しているが、1000円で買い物できるかどうかを判断するという問題場面をイメージできず、切り上げの目的を捉えられていない児童が約3割いたことが結果から分かる。

指導の面では「どの位までの概数にするのか」「四捨五入するのか、切り上げるのか」ということを、児童自らが判断する場面を意図的に作り、「なぜそうしたのか」を問い返す中で、場面にふさわしい端数の処理の仕方を検討する活動を取り入れていくことが大切である。

大問 8

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
18	8			短答	○	1, 3, 4に○ 2, 5に× と解答しているもの	0		55.4
						1, 3, 1に○ 2, 4, 5に× と解答しているもの	1		12.7
						1, 4に○ 2, 3, 5に× と解答しているもの	2		5.6
						3, 4に○ 1, 2, 5に× と解答しているもの	3		0.6
						1, 3, 4のいずれか1つに○ 他に×と解答しているもの	4		1.3
						2または5に○と解答しているもの	5		20.8
						1, 3, 4に○と解答し, 2, 5が空欄のもの	6		0.0
						上記以外の解答	8		1.3
						無解答	9		2.3

[2] 出題のねらい

大問8は、「図形」領域であり、図形を構成する要素に着目し、図形を組み合わせてできる形を考察する問題で、今年度より新たに出題した。5つの図形について、合同な二つの台形を組み合わせてできるかどうかを一つずつ考察・判断できるように、それぞれ○×で解答する形式をとっている。

[3] 解説

正答率は55.4%であった。誤答を見ると、4の平行四辺形を選べていない誤りが12.7%、組み合わせて作ることができない形を選択している誤りが20.8%であった。図形を組み合わせてできる形を考察する際、等しい長さの辺や等しい大きさの角など、図形の構成要素に着目できていない児童が多いことがうかがえる結果となった。

念頭で図形の構成を考えることができるようになるためにも、低学年から具体物を用いた操作活動を充実させ、構成要素に着目していく指導が大切となる。具体的には、1年の「かたちづくり」での色板を用いた図形を構成する活動や、3年の「三角形」での、正三角形や二等辺三角形を構成する活動などが挙げられる。色板を用いた図形を構成する活動では、「ずらす」「まわす」「裏返す」といった操作を充実させながら、辺や角を合わせて図形を分けたり組み合わせたりすることを大切にしたい。また、三角形を構成する活動では、実際にストローや折り紙を用いて三角形を構成する中で、等しい長さの辺に着目しながら正三角形や二等辺三角形の意味や性質を見童と共に見出していく指導を充実させたい。

大問 9

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
19	9	(1)		選択	○	3	0		69.5
						1	1		2.4
						2	2		19.5
						4	3		3.6
						上記以外の解答	8		1.9
						無解答	9		3.1
20		(2)		短答	○	220	0		59.2
						140	1		24.5
						40	2		2.4
						320	3		2.1
						上記以外の解答	8		7.2
						無解答	9		4.7

[2] 出題のねらい

大問9は、「図形」領域の「角の大きさ」に関する問題で、角の大きさを正しく測定することができるかどうかを見ることを目的として設定した。

(1)は、180度より大きい角のおよその大きさを、2直角、3直角をもとに捉えることができるかどうかを見るために設定した。

(2)は、180度や360度をもとに分度器を用いて、180度よりも大きい角の大きさを求めることができるかどうかを見るために設定した。

[3] 解説

(1)の正答率は69.5%であった。昨年度の正答率は70.7%であった。「角の開き方が一直線になると180度」であることや、一回転の角の大きさは90度4つ分と見る見方をもとにして、角の大きさの見当をつけることの理解ができている。角の大きさの見当をつけることは、測定の誤りを防ぐ上で大切である。また、直角をもとにして、90度より大きいかどうかを判断するなど、角の大きさの見当をつけることで、角の大きさについての感覚を豊かにすることも大切である。

(2)の正答率は、59.2%であった。昨年度の正答率は52.1%で、7.1ポイント上がった。しかし、(1)で69.5%の児童が角の大きさの見当をつけることができているにもかかわらず、角の大きさを正確に測定することができていない児童が少なからずいることが分かる。誤答では、「140度」と答えた児童が24.5%いた。どの部分を求めようとしているのか、求めたい部分が捉えられていないことや、180度より大きい角の大きさに触れる機会が少なく、経験不足であることが原因と考えられる。

指導にあたっては、分度器の仕組みを十分観察させ、身の回りのいろいろな角の大きさを測定する活動を行いたい。さらに、180度よりも大きい角の大きさを測定したり作図をしたりする活動も十分に経験させておく必要がある。合同な図形や、拡大図と縮図などの関連する内容においても意図的に取り扱うことで、分度器を用いた角の大きさの測定や作図の技能の定着を図るとともに、自分が立てた見積りに合っているかを振り返る活動を充実させることが大切である。

大問 10

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
21	10	(1)		短答	○	5×6(=30) または 6×5(=30)	0		66.9
						3×5×6(=90)	1		4.8
						3×5(=15)	2		0.0
						3×6(=18)	3		0.2
						5×6= (右辺が書かれていないもの)	4		4.2
						60を用いた式を解答しているもの	5		2.3
						上記以外の解答	8		12.1
						無解答	9		9.5
					22		(2)		選択
	1	1		3.8					
	3	2		50.0					
	4	3		12.5					
	上記以外の解答	8		0.4					
	無解答	9		4.3					

[2] 出題のねらい

大問10は、「図形」領域の「面積」について出題した。

(1)は、長方形の面積を求める問題である。面積の求め方が分かっているかを見る問題としているので、主たる観点は知識・技能である。

(2)は、数量から適切な面積のものを選ぶ問題である。これまでの児童の解答としては、実際のものの面積よりも数値をかなり小さく見積もってしまう傾向が見られている。そのため、問う視点を逆にしても同様の傾向が見られるかを検証できるように、一昨年から「はがきの面積」の数値を問う形式を変更し、「約150cm²の面積のもの」を選択肢から選ぶ問題を出題した。量感が身に付いているかを見るために設定した。

また、(1)で解答することにより図から30cm²の面積をつかんだことを、児童が(2)のおよその面積を考える際に生かすことができるかを見るために、(1)、(2)の出題の順序に設定した。

[3] 解説

(1)の正答率は66.9%で、昨年度は66.8%だった。面積を求める長方形を斜めに提示したり、求積に必要な数値を提示したことにより、長方形と判断できなかつたり必要な数値を選ぶことができなかつたりした児童がいたことが分かる。

児童は、生活経験の中から形が安定する視点で図形を判断する傾向が見られる。「四つの角が全て直角」という定義をもとに、提示された図形は長方形であると判断できるようにすることが大切である。また、長方形の面積は、「縦×横」で求められることから2辺の長さのみに着目すればよいことにも気付かせることが必要である。

(2)の正答率は29.0%で昨年度は22.1%だった。誤答を見ると、「算数の教科書の表紙」を選んだ児童が50.0%もいた。今回も児童は実際の面積よりも数値をかなり低く見積もる傾向が見られた。このことから、実際の面積を求める際に、2辺の長さをかけ合わせることによって面積が求められるという考えが活用できないことや、長さや面積についての量感が伴っていないことが分かる。

指導については、身の回りのものの面積を求めるという活動を積極的に取り入れていくことが大切

II 調査結果の概要

である。その際、2辺の長さについて見当をつけた上で測定させたり面積を求めたりするなど、「長さ」や「広さ」について、量の感覚を育てていくような活動をさらに展開していく必要がある。また、量の感覚を育成するには、数種類の大きさの長方形の中から 300cm^2 の図形を選ぶといった活動も有効である。指定された大きさの図形を選ぶ際には、 300cm^2 という面積から $10\text{cm}\times 30\text{cm}$ や $15\text{cm}\times 20\text{cm}$ の長方形をイメージするなど、面積を辺の長さに置き換えて考えられるようにしていきたい。

さらに、導き出した答えが本当に正しいのかを、根拠をもとに振り返る態度も普段から養っていかなくてはならない。例えば、(1)では 30cm^2 の長方形が示されている。これを生かして約5個分と考えると、算数の教科書では大きすぎることは容易に判断できるはずである。普段の授業の中でも、ただ問題演習をして答え合わせをするだけでなく、求めた答えが正しいか自ら確かめたいくなるような課題設定も必要である。

大問 11

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中間	小問						
23	11			選択	○	1	0		60.7
						2	1		16.1
						3	2		10.0
						4	3		5.8
						上記以外の解答	8		1.6
						無解答	9		5.8

[2] 出題のねらい

大問11は、「図形」領域で、平行四辺形の作図の仕方を、性質をもとに考えることができるかどうかを見るために設定した。

[3] 解説

今年度の正答率は60.7%で、昨年度は62.0%であった。これにより、昨年度同様、三角定規を二つ用いて平行線を作図しているのにも関わらず、その操作の意味と図形の性質が結びついていない児童が多くいたと考えられる。

指導にあたっては、用いる用具やその操作が図形のどのような性質をもとにしているかを児童に考えさせることが大切である。「向かい合った2組の辺が平行」という性質をもとに、三角定規を用いて平行線を利用して作図できることや、「向かい合っている辺の長さが等しい」という性質をもとにコンパスを使った作図ができることを関連づけていく必要がある。

図形の性質を利用して、作図をすることを繰り返し各学年で意識づけていくことで、統合的に理解を深めていくことが大切である。

大問 12

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
No.	大問	中問	小問						
24	12	(1)		選択	○	ア, イ, ウ, オ(順不同, 完答)	0		67.1
						ア, イ, ウを含み, オを含まないもの	1		3.1
						ア, イ, オを含み, ウを含まないもの	2		0.4
						ア, ウ, オを含み, イを含まないもの	3		2.2
						イ, ウ, オを含み, アを含まないもの	4		9.4
						正答のうち2つのみを含むもの	5		9.5
						正答のうち1つのみを含むもの	6		2.2
						ア, イ, ウ, エ, オ	7		0.5
						上記以外の解答	8		0.6
						無解答	9		5.0
25		(2)		選択	○	ウ, オ(順不同, 完答)	0		42.0
						ウを含み, オを含まないもの	1		12.6
						オを含み, ウを含まないもの	2		6.9
						ア, ウ, オと解答しているもの	3		2.2
						イ, ウ, オと解答しているもの	4		13.1
						ウ, エ, オと解答しているもの	5		0.2
						ア, イ, ウ, オと解答しているもの	6		5.5
						上記以外の解答	8		8.7
						無解答	9		8.8

[2] 出題のねらい

大問12は、「図形」領域の「いろいろな四角形」について出題した。

(1)は、「向かい合った角の大きさが等しいすべての四角形」を選ぶ問題で、図形についての知識・技能を見るために設定した。

(2)は、「2本の対角線が垂直に交わる四角形」を選ぶ問題で、図形についての知識・技能を見るために設定した。

[3] 解説

(1)の正答率は67.1%であった。昨年度の正答率も67.1%、一昨年度は68.2%であった。誤答では、平行四辺形を選択していない児童が9.4%、ひし形を選択していない児童が3.1%であり、この傾向も昨年度と同様である。

(2)の正答率は42.0%で、昨年度の正答率36.6%から5.4ポイント上がったが、十分な正答率とは言いがたい。ひし形を選ばなかった解答に加えて、長方形を含んでしまった解答も多く見られた。長方形の角が直角であるため、対角線も直角に交わると考えている児童がいると予想される。これも、昨年度までと同様の傾向である。

指導にあたっては、一つひとつの図形の性質をただ学習するのではなく、例えば平行な辺が何組あるか、向かい合う角の大きさが等しいか、といった多面的な視点からそれぞれの四角形を捉え直し統合的に見ることが大切である。また、対角線という視点から図形の特徴を捉えるのは4年生の学習が初めてである。辺や角だけでなく、対角線にも着目して分類整理できるようにしていく。今年度も図形を提示しているため、線をかき加えれば対角線が垂直に交わるかを確認することができた問題である。自ら線をかき加えて判断していこうとする態度や、自分の解答が妥当かどうかを振り返る姿勢を育てる必要がある。

大問 13

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)			
No.	大問	中間	小問								
26		(1)		選択	○	5	0		56.1		
						1	1		24.2		
						2	2		3.2		
						3	3		1.5		
						4	4		3.9		
						上記以外の解答	8		5.6		
						無解答	9		5.5		
					27	13	(2)		短答	【大問13(2) 採点基準】 「辺」がなくても可。	
○	辺アオ, 辺イカ, 辺ウキ, 辺エク (順不同, 完答)	0		58.3							
	辺オカ, 辺カキ, 辺キク, 辺オク	1		3.3							
	辺アイ, 辺イウ, 辺ウエ, 辺アエ	2		3.6							
	辺イカ, 辺ウキのみを解答しているもの	3		0.1							
	辺イカ, 辺ウキ, 辺エクのみを解答しているもの	4		0.1							
	辺の表記を間違えているもの	5		0.2							
	上記以外の解答	8		23.8							
	無解答	9		10.6							

[2] 出題のねらい

大問13は、「図形」領域の「立方体」について出題した。

(1)は、立方体の正しい展開図を選ぶ問題で、図形についての思考・判断・表現を見るために設定した。例年、十字型で面を一つ増やして7面にした誤答を直感的に選んでいる児童が多く見られるため、昨年度同様、十字型の誤答の展開図を1番目の選択肢にして傾向を見た。

(2)は、一つの面に垂直な辺を選択する問題を出題した。学習の傾向として、ある面に対して垂直な辺を答える方が児童の理解が高いのではないかと考え、それを検証するために設定している。

[3] 解説

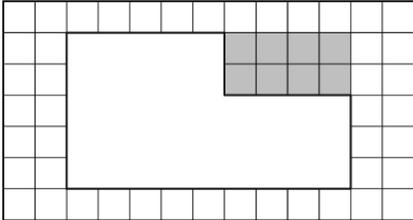
(1)の正答率は56.1%で、昨年度の正答率は58.1%であった。昨年度同様、十字型の誤答の展開図を1番目の選択肢にしてみたが、24.2%、約4人に1人の児童が十字型を選択した。指導にあたっては、十字型だけでなく複数の展開図があることについて、多くの児童が体験を通して理解できるようにする必要がある。実際に展開図をかくて立方体を組み立てたり、一つの立体を開いていくつかの展開図にしたりする活動が大切である。また、立方体や直立方体が六つの面で構成されていることを、展開図と関連づけながら理解を深めるような手立ても重要である。

(2)は、立方体の底面に垂直な辺をすべて選ぶ問題で、正答率は58.3%であった。昨年度の正答率は59.4%であった。

立体の辺や面の位置関係については、立体を観察したり、構成したり、分解したりするなどの数学的活動を通して理解できるように指導することが大切である。面に対して垂直な辺だけでなく、辺に対して垂直な面など、様々な視点で立体を見つめていくことも重要である。また、児童の実態によっては、辺と面の垂直、平行の意味についてそれだけを取り出してスモールステップで指導していくことも考えられる。

大問 14

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率 (%)	
No.	大問	中間	小問						
28	14					【大問14 採点基準】* 複数の類型に該当する解答については、上位の類型に分類する。			
		(正答の条件)							
		① 該当する部分に正しく色をぬっている。							
		(正答例)							
									
		短答	○			①を満たしているもの	0		61.7
						2×4の部分色をぬっているが、場所が間違えているもの	1		3.1
						図形の2×5の部分に色をぬっているもの	2		7.0
						①以外の部分をぬっているもの	3		10.6
	①を含め全体をぬっているもの		4		0.4				
	①を表す補助線がかかっているが、色をぬっていないもの		5		1.1				
	上記以外の解答		8		5.1				
	無解答		9		11.0				

[2] 出題のねらい

大問14は、「図形」領域から「複合図形の面積」を求める問題を出題した。主たる観点は思考・判断・表現である。これまでは、等積変形による面積の求め方を説明する問題を出題していたが、一昨年度より、複合図形の面積の求め方を式から読み取り、図に表す問題に変更した。

変更の理由としては、面積を求めるだけでなく式が何を表しているのかを考える力が身に付いているか、実際にはない長方形を見出すことができるかを見るために設定した。

[3] 解説

実際にはない長方形の部分に正しく色をぬっている児童は、61.7%であった。同様の問題を出題した昨年度は63.6%の正答率で、同程度の結果となっている。令和元年度に出題した文章で説明する問題では、正答率が34.0%だったことから、説明する文章を考えることには難しさを感じていても、式を読み取り、図と結びつけて表現する力は概ね付いていることがうかがえる。これは、これまでの図や式を読み取って説明したり、自分の考えを図や式で説明したりする活動を多く取り入れた授業を行ってきた成果といえる。引き続き、友達の考えを読み取ったり、説明したりする活動を充実させていきたい。その際、一部の児童の説明のみで終わるのではなく、一人ひとりがノートに表現する時間を設けたり、ペアで説明し合う活動を取り入れたりするなど、言語化していく過程をより充実させていく必要がある。

大問 15

[1] 解答類型別の出現率

No.	問題番号			解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)	
	大問	中間	小問						
29		(1)		短答	○	28(こ)	0		79.8
						49(こ)	1		0.4
						32(こ)	2		1.0
						上記以外の解答	8		8.6
						無解答	9		10.1
30	15	(2)		短答	○	$\bigcirc \times 4 (= \Delta)$	0		45.4
					○	$4 \times \bigcirc (= \Delta)$	1		16.3
					○	$\bigcirc + \bigcirc + \bigcirc + \bigcirc (= \Delta)$	2		0.0
						$\bigcirc + 4 (= \Delta)$	3		1.0
						$\bigcirc \times \bigcirc (= \Delta)$	4		0.5
						4×7	5		0.8
						4×7以外で○を使用していないもの	6		1.7
						上記以外の解答	8		18.3
						無解答	9		16.0

[2] 出題のねらい

大問15は、「変化と関係」領域の「変わり方」を取り上げた。図や表から数量の関係を読み、調べる問題である。昨年度と同様に、おはじきを並べて正方形を作る場面で、正方形の大きさ(○番目)とおはじきの数(△こ)の二つの数量の関係を調べる活動を扱った。変わり方がイメージしやすいように図に示し、解決の手立てとして正方形の大きさとおはじきの数をそれぞれ○、△とした表を途中まで示し、問題文にも「おはじきの数は4こ、8こ、12こ…とふえていきます」と明記した。

(1)は、図や表から伴って変わる二つの数量の関係を考え、表の続きの値を求める問題で、主として思考・判断・表現を見るために設定した。

(2)は、伴って変わる二つの数量の関係を式に表す問題で、主として知識・技能を見るために設定した。「関係を式に表す」だけではさまざまな形での正答が存在し、児童が混乱することも考えられるため、関係式の一部を表す問題形式とした。

[3] 解説

(1)の正答率は79.8%であった。昨年度の正答率は81.6%であった。昨年度と同様に、伴って変わる二つの数量の関係を捉え、具体的な数値を求めることについては理解できているといえる。

(2)は、伴って変わる二つの数量の関係を式に表す問題である。正答率は61.8%で、昨年度の正答率64.3%と同等の結果となった。(1)の正答率と比べると、伴って変わる二つの数量の関係を一般化して式に表現することには課題が残る結果となった。

変わり方のきまりを見つけるには、表を縦に見て、「正方形の大きさとおはじきの数にはいつもどんな関係が成り立つのか」など、その規則性を発見しようとする態度が大切になる。そのためには、表の中だけでは考えられない極端な場合を考える場を設定することが有効である。「表をずっと書き続けるのは大変」と児童が感じてこそ、規則性を見出し、式化する必要性を感じられるからである。式に表す目的や有効性を感じられる学習展開を大切にしていきたい。

大問 16

[1] 解答類型別の出現率

問題番号				解答形式	正答	解答類型	類型番号	出現率(%)					
No.	大問	中間	小問										
31	16	(1)		記述	○	【大問16(1) 採点基準】 場所とけがの種類の間が、正しく記述されていないものは誤答とする。							
						(1週間に)ろう下で打ぼくをした人の数 ※同意文可(「ろう下」と「打ぼく」が書かれていれば可)	0	81.4					
						類型0で、「ろう下で打ぼく」以外の3を解答しているもの。 (「教室で打ぼく」「校庭ですりきず」「体育館で打ぼく」「階段の合計」「切りきずの合計」)	1	0.0					
						「ろう下でけがをした人の数」など、 けがの種類について記されていない。	2	0.8					
						「打ぼくをした人の数」など、 場所について記されていない。	3	0.8					
						類型0で、場所やけがの種類に誤りがあるもの。	4	0.4					
						上記以外の解答	8	5.1					
						無解答	9	11.5					
						32	(2)		選択	○	2, 4 (順不同, 完答)	0	65.1
											2のみを解答しているもの	1	6.6
4のみを解答しているもの	2	3.5											
解答に1を含んでいるもの	3	9.5											
解答に3を含んでいるもの	4	3.3											
上記以外の解答	8	0.2											
無解答	9	11.8											

[2] 出題のねらい

大問16は、「データの活用」領域の「整理のしかた」について取り上げた。データを分類整理し、特徴や傾向に着目し、判断したり考察したりする問題である。(1)は、二次元表の中の数値が表していることを読み取る問題、(2)は、表を読み取り、そこから分かるものを選択する問題で、二次元表についての知識・技能や、二次元表を読み取り、その結果を考察する思考力や判断力を見るために設定した。

[3] 解説

(1)は二次元表の中の数値が表している二つの観点を読み取る問題である。正答率は81.4%と、昨年度の81.6%と同程度であり、高い正答率を保っている。これは、資料を二次元表に分類整理したり、二次元表から情報を読み取ったりする際に、二次元表の二つの観点を考え、各欄の意味を明確にすることを大切に学習を積み重ねた成果であると考えられる。今後も二次元表の表す意味を捉えさせる活動を十分に行いたい。

(2)の正答率は65.1%で、昨年度の正答率65.5%と同程度であった。二次元表から分かることを読み取ることはある程度理解しているといえるが、解答に1, 3を含む答え方をしている児童が約12.8%いる。1, 3の解答は一般的に推測できることではあるが、表から読み取れることではない。指導の際には、表から読み取れることと考えられることを整理して学習を進める必要がある。

具体的な指導としては、二次元表から読み取ったことを発表し合う中で、「表のどの部分から、どのように考えたのですか。」などと判断の根拠を問い返し、その都度二次元表の数値と結びつけていく方法が考えられる。その際、ある児童の読み取りの根拠を、他の児童に考えさせることも有効である。こ

のような活動を取り入れながら、「校庭ではどのようなけがが多かったのか。」など、項目を決めて分析的に見る見方や、「どんなけがが一番多かった(少なかった)。」など、全体的な特徴や傾向に着目する見方を育てていくことが大切である。

学習指導要領では、「データの活用」に絞った領域が新設され、5年生では、「多面的に捉え考察すること」、6年生では、「問題の結論について判断するとともに、その妥当性について批判的に考察すること」が重視されている。指導にあたっては、児童にとって身近な興味や気付きなどから、解決すべき問題や調べてみたいことがらに関して適したデータを収集し分類整理するなど、統計的な問題解決の過程を大切に学習を進めていきたい。

II 調査結果の概要

無解答率について

今年度、小問ごとに見た全32問の平均無解答率は6.5%(昨年度5.6%)であり、領域別で見ると、「数と計算」が4.3%(昨年度3.5%)、「図形」が6.4%(昨年度6.1%)、「変化と関係」が12.0%(昨年度11.2%)、「データの活用」が11.6%(昨年度10.3%)だった。

特に無解答率が高かった問題は、大問15(2) 正方形の大きさとおはじきの数の関係を式に表す問題16.0%、大問5(2) 割合を用いた比べ方を記述する問題15.8%、大問16(1) 二次元表の数値が何を表しているかを記述する問題11.5%、(2) 表から分かることを選択する問題11.8%、大問14 複合図形の面積を求める式を理解し、図に表す問題11.0%だった。

理由や求め方を文章で説明する問題、表やグラフから数量の関係を筋道立てて考える問題で、無解答率が高かった。無解答の理由としては、見通しをもつことができなかったもの、後半の大問については時間がなくて答えられなかったもの、はじめから「できない」とあきらめてしまったものなどが考えられる。各校においては、児童の実態を把握するとともに、問題解決型の授業をさらに充実させ、既習の考えをもとにしたり、図に表したり、具体的な場面や数値に置き換えたりすることが、答えに近づくための手立てになると児童が実感することを通して、無解答を減らしていくように努めていく必要がある。

(5) 今後の指導にあたって

○ 数と計算【大問1・2・3・4・6・7】

「数と計算」は、整数、小数、分数などの数の意味と表し方、数の計算などによって構成されている領域で、平均正答率は67.7%であった。

四則計算では、四則混合計算は、高い正答率を示している。一方で、小数同士の減法や、整数同士のわり進む除法は、十分な正答率を得られていない。小数の計算の学習では、処理技能の定着だけでなく、位取り表などを用いて「各位の数字が何を表すのか」「位ごとに計算する意味」といった十進位取り記数法をしっかりと押さえられるような指導が重要である。また、分数の計算の学習でも、分数の意味である「単位分数のいくつ分」という見方をしっかりと身に付けさせることに加え、帯分数における整数部分と分数部分の関係も、数直線やテープ図、面積図などを使って理解させる必要がある。

また、小数と整数の除法の文章問題では、立式はできているものの、文章から「どこまでわり進めていくのか」を判断することが、毎年課題となっている。今年度の正答率は56.5%であった。昨年度から4.1ポイント上がってはいるが、引き続き、場面を把握するために図に表したり、実際に操作したりする活動を取り入れていくことが大切である。また、「問題と照らし合わせて答えを見直す力」を育てていく必要もある。その方法として「見積もる」「確かめの式」「問題場面に戻す」など、見直し・振り返りが考えられる。学習内容や子どもの実態に合わせて取り入れていくことが大切である。

分数について、帯分数を単位分数のいくつ分かで表す問題では、今年度も正答率は7割を超えたが、まだ十分とは言えない。「○○のいくつ分」という見方が育っていないことが、大問2の分数同士の計算の正答率にもつながっていると考えられる。引き続き、「単位分数のいくつ分」という見方ができるように、分数の意味とその表記のつながりを丁寧に指導していく必要がある。また、テープ図に表された分数を読み取る問題は55.1%と低い正答率となっている。テープ図全体を1と見ている誤答が多いことから、1より大きい分数をどのように表すのか、数を数直線図やテープ図などと関係づけて学習を進めて意味を理解していく必要がある。分数の指導にあたっては、「1を○等分したうちの一つ分」という単位分数の意味を押さえるために、「単位分数を○こ集めると」「単位分数のいくつ分」など、いろいろな視点で数を見る力を育てていくことが大切である。

計算のきまりに関する問題は、正答率が37.9%であった。計算のきまり(分配法則)の意味や使い方を丁寧に指導してきているが、まだ十分な正答率とは言えない。引き続き、計算のきまりの意味を理解し、二つのかけ算を一つの式にまとめたり、逆に一つの式から二つのかけ算を見出したりしていく経験を重ねる必要がある。また、数の合成、分解の際に、きりのいい数を見つけることができたり、式の中から共通項を見出したりできる豊かな数感覚が必要である。そのため、低学年の頃から一つの数を「○から1ひいた数」「△と□を合わせた数」というように多様な見方ができる力を育てていきたい。

「買い物場面での概算」の問題の正答率は54.7%だった。「どの位までの概数にするか」「この場面は、四捨五入がいいか、切り上げがいいか」など、目的に合った数の処理の仕方を考えることが大切になる。授業の中で、概数にする処理の仕方を見童自らが判断する場面や、それが適切であるかどうかを振り返る場面を取り入れていくことも重要である。

「数と計算」の内容は、他の領域と深く関わりがあるので、重点を置いて指導していく必要がある。指導にあたっては、数の形式的な処理だけでなく、十進位取り記数法や0.1、単位分数のいくつ分かなどの数の意味もきちんと押さえていくことが大切である。さらに、わり算や分数、倍とわり算などの指導で

II 調査結果の概要

は、図や数直線などを用いて実感を伴って捉えられるようにすることが大切である。

キーワード：図や数直線、十進位取り記数法、意味に着目、見通し・振り返り、単位分数

○ 図形【大問 8・9・10・11・12・13・14】

「図形」は、図形の構成・性質、角、面積・体積によって構成されている領域である。平均正答率は56.9%だった。

図形の構成要素に着目し、図形を組み合わせてできる形を考察する問題の正答率は、55.4%だった。等しい長さの辺や等しい大きさの角などに着目できていないことが分かる。低学年から具体物を用いた操作活動を充実させ、構成要素に着目していく指導が必要である。その際には、等しい長さの辺や等しい大きさの角などに着目させたい。

180度よりも大きな角の求め方については、今年度は、「だいたいどれくらいの大きさになるか」見積もること、分度器の目盛りを読んで角度の大きさを求めることを見る問題である。69.5%の児童が大きさを正しく見積もれたにも関わらず、180度以上の角度について分度器の目盛りを読み取って答えられた児童は59.2%だった。分度器の目盛りの読み方、180度以上の角度の測り方の理解に課題がある。分度器の仕組みを十分観察させ、身の回りのいろいろな角度(左側に開いている角や180度より大きい角など)を測る活動、角をかく活動を十分に行ったり、自分が立てた見積もりに合っているかを振り返る活動を取り入れたりすることで、実感的な理解を図りたい。

長方形の面積を求める問題は、正答率は66.9%だった。長方形が斜めだったり、求積に必要な数値が提示されていたことにより、長方形と判断できなかったり、必要な数値を選ぶことができなかったりした児童が多かったと考えられる。「四つの角がすべて直角」という定義をもとに図形を判断し、面積を求めるには2辺の長さに着目すればよいことに気付けるよう、図形の見方を育てていきたい。

面積の量感に関する問題は、毎年課題が見られ、今年度も29.0%と、同様に低い正答率となっている。引き続き、実測したり体感したり比較したりするなど、量に対する感覚を日頃から育てていくことが大切である。また、量感を身に付けるには、「長さ」から「広さ」だけでなく「広さ」から「長さ」という、自分がイメージできるものに戻って判断する力が必要である。例えば、面積を調べる活動において、「たてが△cm、横が□cmだから…」と根拠をもとに予想をさせることで、面積に対する見方を広げ、量感をつかめるようにする。また、求積するだけでなく、面積から実際の広さをイメージできるような活動を多く取り入れていく必要がある。

三角定規を用いた平行四辺形の作図について、平行四辺形のどのような性質を使っているのかを問う問題の正答率は60.7%であった。平成26年度の、実際に平行四辺形を作図する問題の正答率は74.5%と高かったことを踏まえると、図形の特徴を理解しないまま、形式的に作図の手順を指導してきたことが分かる。作図をする際には、図形のどのような性質をもとにしているのか、なぜその方法で作図することができるのかを考えるように指導する必要がある。

いろいろな四角形から同じ特徴の四角形を選ぶ問題は、「向かい合った角の大きさがすべて等しい四角形」については67.1%の正答率であった。しかし、「2本の対角線が垂直になっている四角形」については、正答率が42.0%と十分理解できていないと言えない。図形の特徴を調べるときに、角の大きさや辺の長さだけでなく、平行な辺や対角線に着目して多面的に図形を捉え直し、新たな視点で分類整理していくことも大切にして授業を行っていきたい。

立方体の展開図の問題では、正答率は56.1%であった。昨年度より、十字型で面を一つ増やして7

面にした誤答の展開図を1番目の選択肢にしているが、24.2%の児童がこれを選択した。指導にあたっては、十字型だけでなく複数の展開図があることについて、多くの児童が体験を通して理解できるようにする必要がある。実際に展開図をかいて立方体を組み立てたり、一つの立体を開いていくつかの展開図にししたりする活動が大切である。

立方体の辺や面の位置関係を問う問題では、面に対して垂直な辺を考える問題の正答率が58.3%であった。過去に面と面の関係、辺と辺の関係を問う問題を出題したときには、6割を超える正答率が得られたことを考えると、辺と面の関係の理解が不十分だといえる。立体の辺や面の位置関係については、立体を観察したり、構成したり、分解したりする活動を通して理解できるように指導することが大切である。

複合図形の面積を求める問題は、大きな長方形から、実際にはない部分の面積を引いて求める方法で、実際にはない長方形を求める式は図のどこの部分にあたるかを問う問題に一昨年度より変更している。今年度の正答率は61.7%であった。令和元年度、文章で説明する問題を出題したときには34.0%だったことから、説明する文章を考えることには難しさを感じていても、式を読み取り、図のどこにあたるか考え、図などで表現する力がついていくことがうかがえる。与えられた図から式を立て面積を求めるだけでなく、普段の授業の中で友達の式や図を読み取って、その意味や考え方を説明するなど、図と式を相互に結びつける活動を今後も積極的に取り入れる必要がある。

図形の学習は、辺、頂点、角、面などの構成要素に着目して図形を分類し、各図形を定義し、理解を深めていくことが大切である。低学年の頃から、構成要素に着目し、いろいろな図形を弁別したり作図したりする活動を通して、図形に親しみ、豊かな感覚を育てる学習を取り入れなければならない。また、実際に長さや角度を測ることで、図形の特徴について実感を伴って理解できるような指導が重要である。

キーワード：図と式の相互関係、量感、操作、図形の構成要素、作図に用いる性質、実測

○ 変化と関係【大問5・15】

「変化と関係」は、一昨年度から新設された領域で単位量当たりの大きさ、速さ、割合、比、比例によって構成される領域である。平均正答率は58.3%だった。

問題文から数量関係を読み取り、数直線に表す問題では、正答率は昨年度の32.3%と大きく変わらず、29.2%と低い結果になった。解答類型から、数量関係は正しく理解できているが、未知数の「□」と書き表すところを「3」と場面の具体的な数を入れている児童が49.4%いた。このことから、数量関係を正しく捉えられている児童は78.6%いることが分かる。授業の中で、数直線で数量の関係を整理したり、数直線から場面の様子を読み取ったりする活動を大切にした指導を継続した結果だといえる。一方で、未知数の「□」は、問題文の中で数が明らかになっていないことを表したり、場面にあった任意の数を用いたりするときに有効であることを、児童自身が感じられるような学習展開が必要である。

どちらがより値上がりしたかの根拠を記述で問う問題の正答率は62.2%であった。この問題は、どちらがより値上がりしたかの根拠を差ではなく割合を用いて比べることを記述で書く問題である。解答を見ると、差で見ている児童は2.3%で、多くの児童は値上がりのときには割合で見ようとしていることが分かった。昨年度より、問題文に「きゅうり」「レタス」という言葉や数を使って説明しましょう。という文を加えたことで、児童は「きゅうり」と「レタス」の値上がり率を比較して説明することができていた。し

II 調査結果の概要

かし、きゅうりの値上がりだけを取り上げて、レタスについては書いていない児童も3.6%見られた。説明に必要な条件を捉えられていない児童が一定数いることが分かる。今後も、数直線やテープ図を、立式の根拠や考え方の筋道を表すことに用いることができるよう、数量関係を図に表したり読み取ったりする指導を続けていく必要がある。また、自分の考えの根拠を説明する際に、何に着目したのかを明確にして説明できるような活動を大切にしていきたい。また、説明、発表をする場面では、ペアや小グループでの交流などを活用し、より多くの児童が自分の言葉で表現できる工夫を行いたい。

伴って変わる二つの数量の関係を、記号を用いて式に表す問題は、毎年高い正答率である。図や表から数量の関係を読み取り、表の続きの値を求める問題は79.8%、伴って変わる二つの数量の関係を式に表す問題は61.8%であった。伴って変わる二つの数量の関係を捉え、具体的な数値を求めることは概ね理解できているといえる。しかしながら、変わり方のきまりを見つけ、一般化して式に表現するには課題が残る結果となった。今後も、表の続きを自分で作ってみたり、表を縦や横に見て規則性を発見したりしていこうとする態度を育てていく必要がある。

キーワード：立式の根拠、考えの根拠、数量関係を数直線に表したり読み取ったりする

○ データの活用【大問16】

「データの活用」も、一昨年度から新設された領域で測定値の平均、表、グラフで構成された領域である。平均正答率は73.3%であった。

二次元表の中の数値が表している二つの観点を読み取る問題では、正答率は81.4%であった。これは、資料を二次元表に分類整理したり、二次元表から情報を読み取ったりする際に、二次元表の二つの観点から見て、各欄の意味を明確にすることを大切にした学習を積み重ねた成果であるといえる。今後も二次元表の表す意味を捉えさせる活動を十分に行いたい。また、各欄の意味を理解できるように、「縦の項目」と「横の項目」の意味を話し合い、確認する活動も行っていくとよい。

表を読み取り、そこから分かるものを選択する問題では、正答率は65.1%であった。二次元表から分かることを読み取ることはある程度できているが、誤答を見ると児童は資料から読み取れること以外に、普段の生活場面を想起し、推測して解答していることが分かる。指導にあたっては、表やグラフから読み取れることと考えられることを整理することが必要である。また、与えられた数値からグラフや表を作って終わるのではなく、身近な興味や気付きなどから解決してみたい問題を考え、データを収集し分類整理するなど、統計的な問題解決の過程を大切に学習を進めていきたい。

キーワード：表やグラフを読む、二次元表の意味、読み取れることと考えられることの整理

◎ 全体を通して

今回の学習指導要領の改訂で「数学的な見方・考え方」については「事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道立てて考え、統合的・発展的に考えること」と示された。

算数科で大切なことは、この「数学的な見方・考え方」を働かせながら、知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して探求したりしていくことである。

今年度の学習状況調査の算数科における平均正答率は63.2%であった。昨年度の平均正答率は64.6%であった。また、領域別に平均正答率を見てみると、「数と計算」は67.7%、「図形」は56.9%、「変化と関係」は58.3%、「データの活用」は73.3%であった。今後も「数学的な見方・考え

方」を育てていく必要がある。

では、どのようにして授業を改善し、「数学的な見方・考え方」を育てていくのか。ポイントを以下にまとめると。

<数学的な見方・考え方を育む授業づくりのポイント>

- 1 問題場面を把握して、解決の方法や解答の見通しをもつ。
- 2 学習したことを用いて筋道立てて考え、言葉・数・式・図・表・グラフなどで表現する。
- 3 自分の解決方法や解答が、問題場面に合っているかを振り返る。
- 4 友達の考え（式、図など）を読み取る。
- 5 自分や友達の考えから相違点を見つけたり、整理したりして、考えと考えを結び付ける。
- 6 友達と一緒に創り上げる。
- 7 どのように考えることが大切だったか振り返る。

数学的な見方・考え方を育むためには、教材研究だけでなく、児童同士が友達の考えを読み取ったり、自分と友達の考えを比べたりすることのできるような場の設定や授業構成、教師の言葉かけが大切である。また、自分の解決までの道筋を振り返り、検証する姿勢も併せて育てていきたい。児童の数学的な見方・考え方を育てるためにも、日々の授業で、何を指導し、どんな力を身に付けさせたいのかというねらいを明確にもって指導にあたっていきたい。

本調査をもとに、授業改善に積極的に取り組まれることを期待している。

3. 生活や学習についてのアンケート

調査の概要

1. 調査の目的

川崎市の公立小学校に在籍する児童の生活や学習についての意識や実態を把握することにより、各学校における教育課程や指導方法等の改善に資するとともに、本市学校教育全体の充実に向けた基礎資料として活用する。

2. 調査の設計

(1) 調査実施校及び対象者

市内公立小学校第5学年に在籍する全児童 *調査当日の欠席者を除く

(2) 調査校数及び回答者数

学校数:114校 回答者数:11,637名

(3) 調査実施日

令和4年5月10日(火)に川崎市学習状況調査の一環として、各教科の調査後に実施

(4) 調査方法

無記名の質問紙法調査による

(5) 調査内容及び設問数

児童の生活と学習に関する意識と実態についての調査 76問

(6) 設問の主な観点及び視点

	観 点	視 点
1	学校生活に対する意識	楽しさ
2	学習全般に対する意識	好感度、必要性、理由、相談相手
3	各教科等に対する意識	好感度、理解度、有用感
4	家庭学習の実態	学習時間、学習内容、通塾
5	家庭生活の実態	睡眠時間、朝食の摂取、学習の準備 テレビ・ビデオ・ゲーム等の視聴・実施時間、 携帯電話等の使用、1ヶ月の読書量、思いや考えの表現
6	自己肯定感、将来に関する意識等	自己肯定感、将来に関する意識、失敗を恐れず挑戦、 他者との協力・協働、郷土への愛着・貢献
7	各教科等に対する意識・実態	学習内容・方法に対する好感度や実施の程度 日常生活への活用や関連 等
8	ICT機器・GIGA端末の使用に関する実態	ICT機器の使用頻度・使用時間 GIGA端末の活用 等

3. 調査結果の集計・分析にあたっての留意事項

(1) 単純集計及び分析

- ① 2の(6)にある「設問の観点」ごとに項立てを行い、分析を行った。
- ② 設問ごとに集計結果をグラフで表し、考察を加えた。
- ③ 一部の設問では昨年度・一昨年度の結果を併記して、経年比較分析を行った。

(2) クロス集計及び分析

いくつかの設問については、クロス集計という手法を用いて分析した。これは、設問Aでの選択肢ごとに設問Bの回答を集計することで、設問Aでの回答選択の違いを設問Bで説明する方法である。このことにより、設問Aと設問Bの二つの設問の間に関連や相関関係などを分析した。なお、クロス集計では、集計の都合上無回答者を除いて集計した。

いくつかの設問については、回答ごとに国語と算数の正答率を算出した。これにより各教科の正答率と各設問の回答との間の相関関係について分析した。なお、本分析においても無回答者を除いて集計した。また、国語と算数の2教科と、生活や学習についてのアンケートの双方に回答した者を集計対象とした。

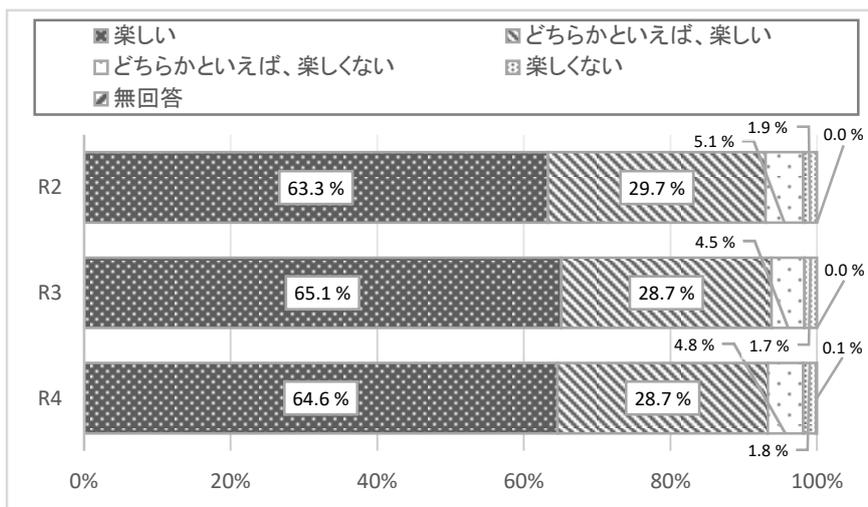
- (3) 各グラフには、見易さを考慮して調査結果の割合の数値を記入しきれていないものがある。単純集計については、「資料 調査結果集計表」の該当設問の数値でご確認願いたい。

調査結果と分析

単純集計

1 学校生活に対する意識

学校生活の楽しさ【問1】

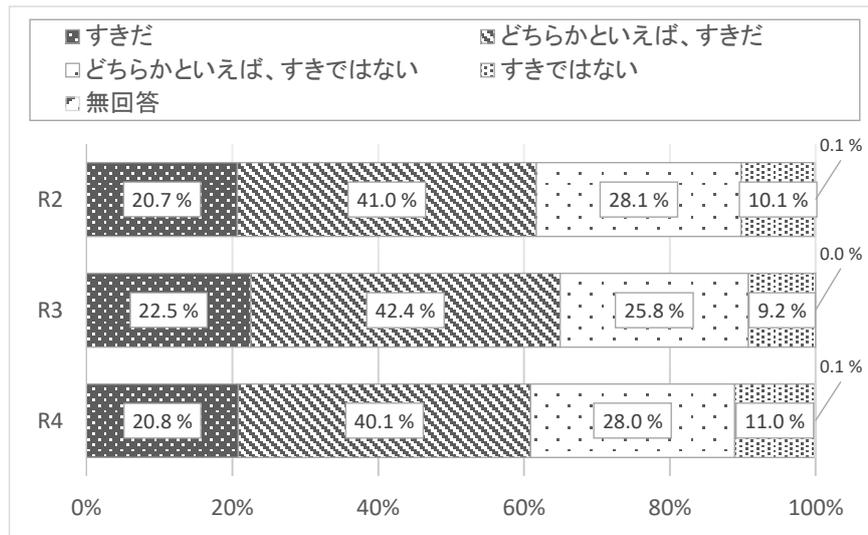


○64.6%の児童が、学校生活は「楽しい」と回答しており、「どちらかといえば、楽しい」を合わせると93.3%である。

○「楽しい」と「どちらかといえば、楽しい」を合わせた回答は過去3年通して9割を超えている。

2 学習全般に対する意識

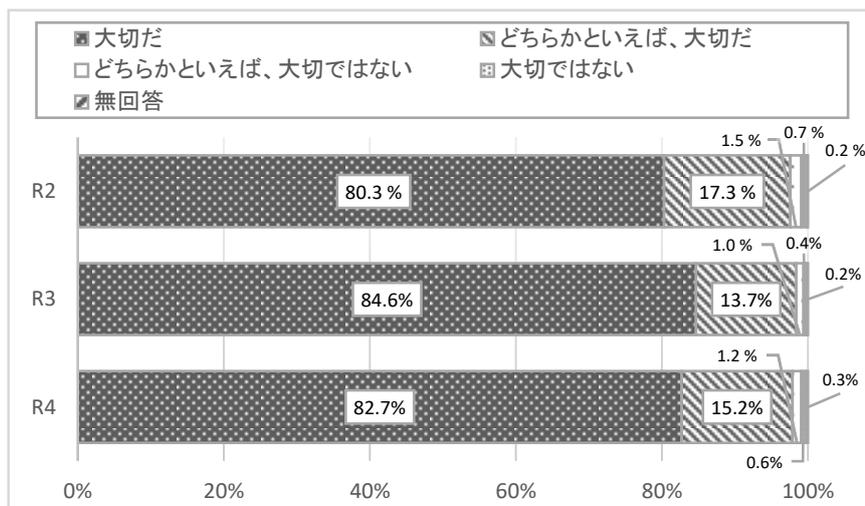
(1) 好感度【問2】



○20.8%の児童が、勉強は「すきだ」と回答しており、「どちらかといえば、すきだ」を合わせると60.9%である。

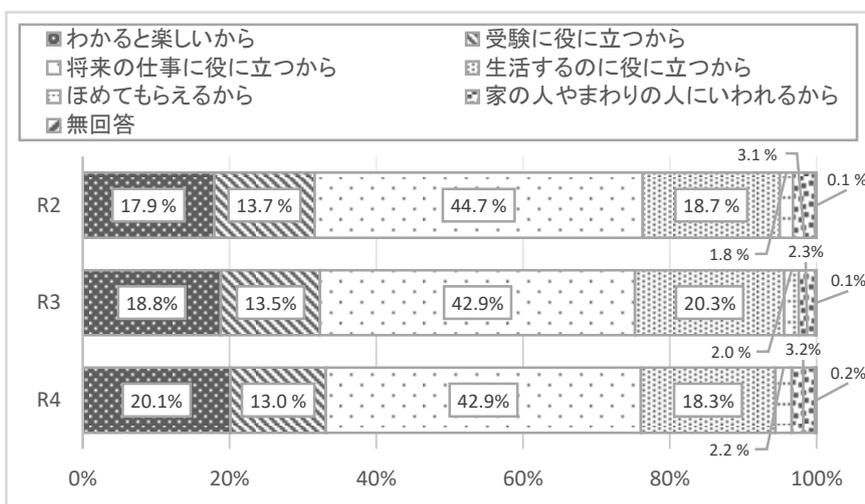
3. 生活や学習についてのアンケート

(2) 必要性【問3】



○82.7%の児童が、勉強は「大切だ」と回答しており、「どちらかといえば、大切だ」を合わせると97.9%である。

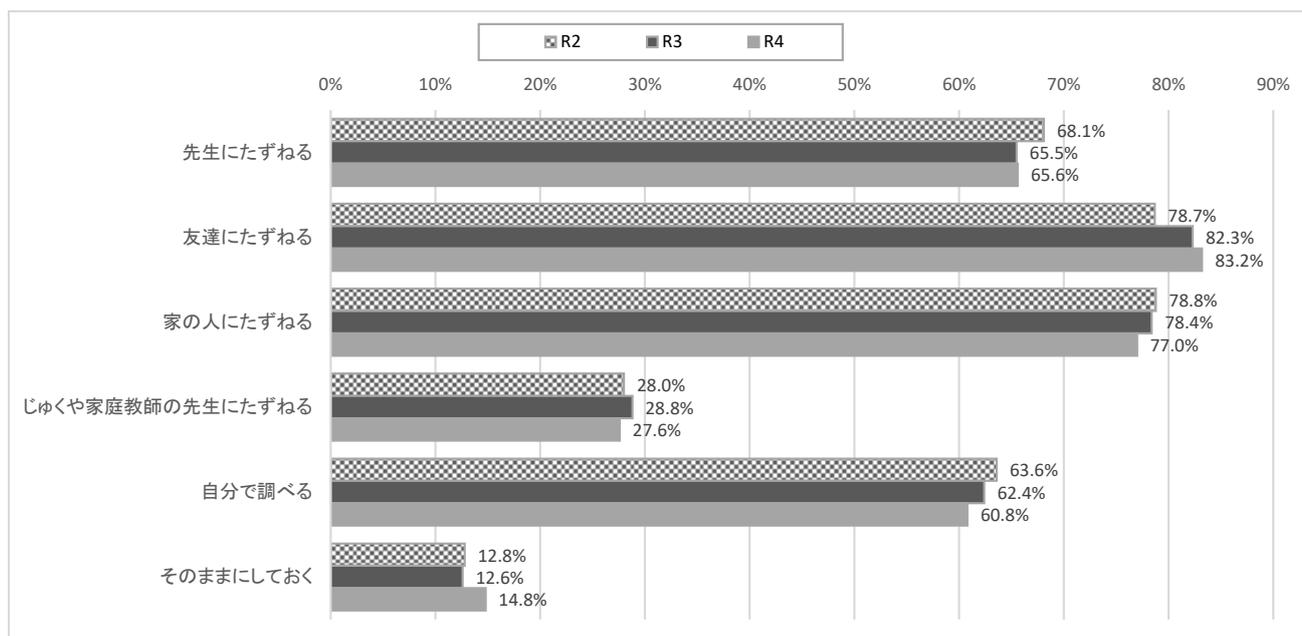
(3) 理由【問4】



○勉強する一番の理由として、「将来の仕事に役に立つから」、「生活するのに役に立つから」を合わせると61.2%である。

Ⅱ 調査結果の概要

(4) 相談相手【問28～33】

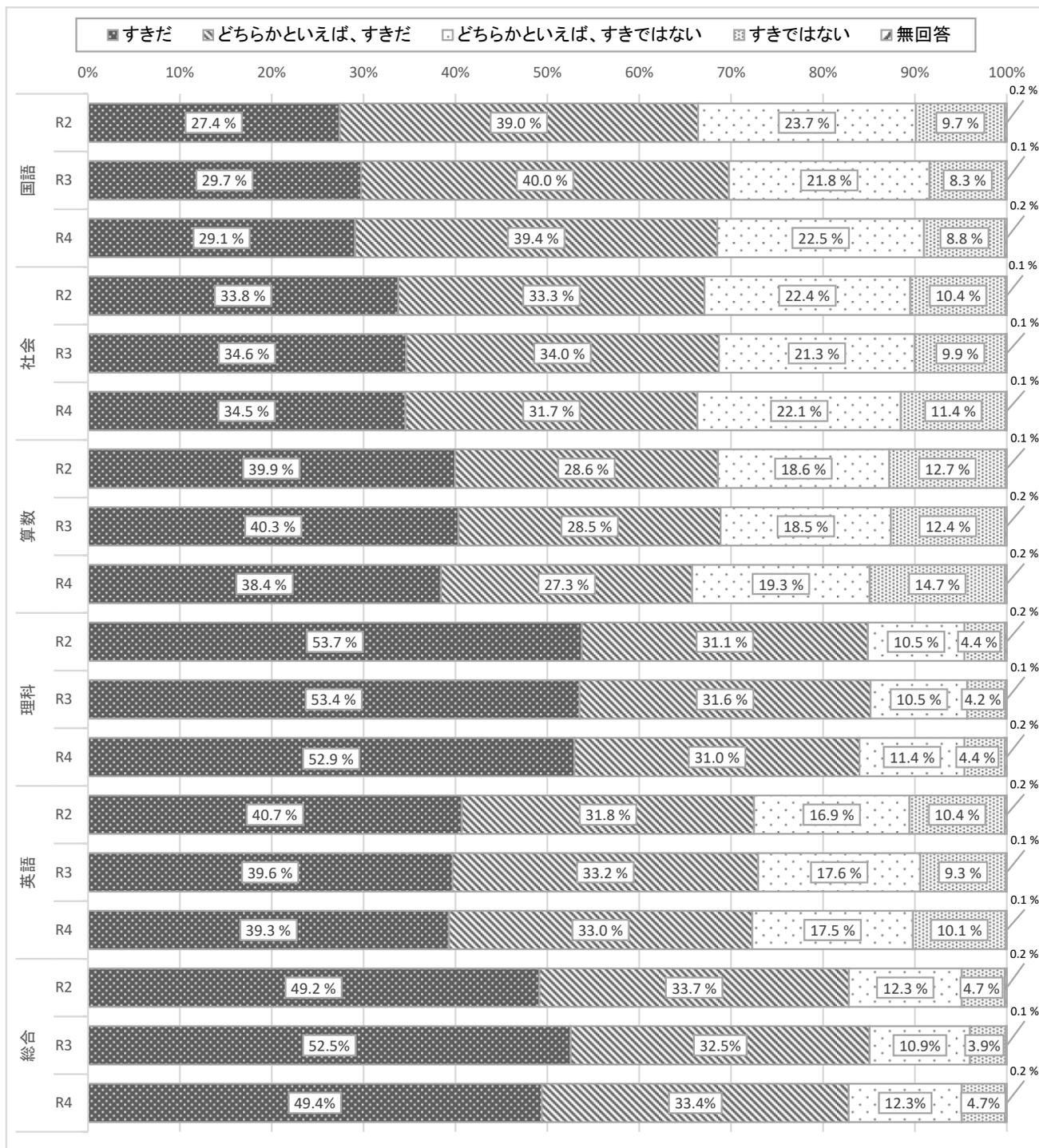


○「授業の中で、わからないことがあったときに相談する相手」として、「友達」を選んでいる児童が83.2%と最も多く、「家の人」の77.0%が続いている。

○「友達にたずねる」はR2・R3年度から微増した。

3 各教科等に対する意識

(1) 好感度【問5～10】

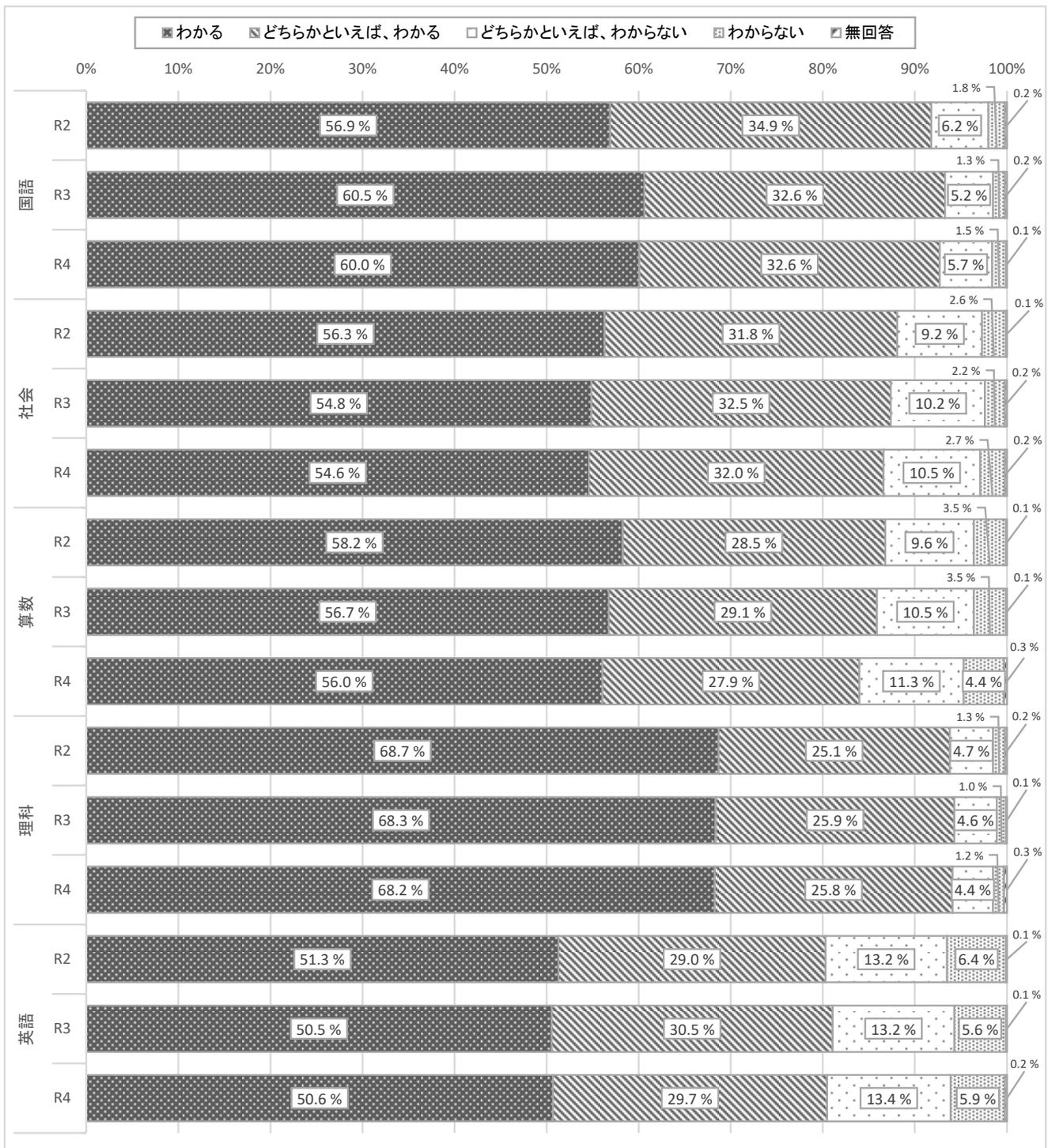


○「好きだ」、「どちらかといえば、好きだ」と回答した児童は、「国語」68.5%、「社会」66.2%、「算数」65.7%、「理科」83.9%、「英語」72.3%、「総合的な学習の時間」82.8%である。

○「好きだ」と回答した児童は、「国語」29.1%、「社会」34.5%、「算数」38.4%、「理科」52.9%、「英語」39.3%、「総合的な学習の時間」49.4%である。

II 調査結果の概要

(2) 理解度【問11～15】

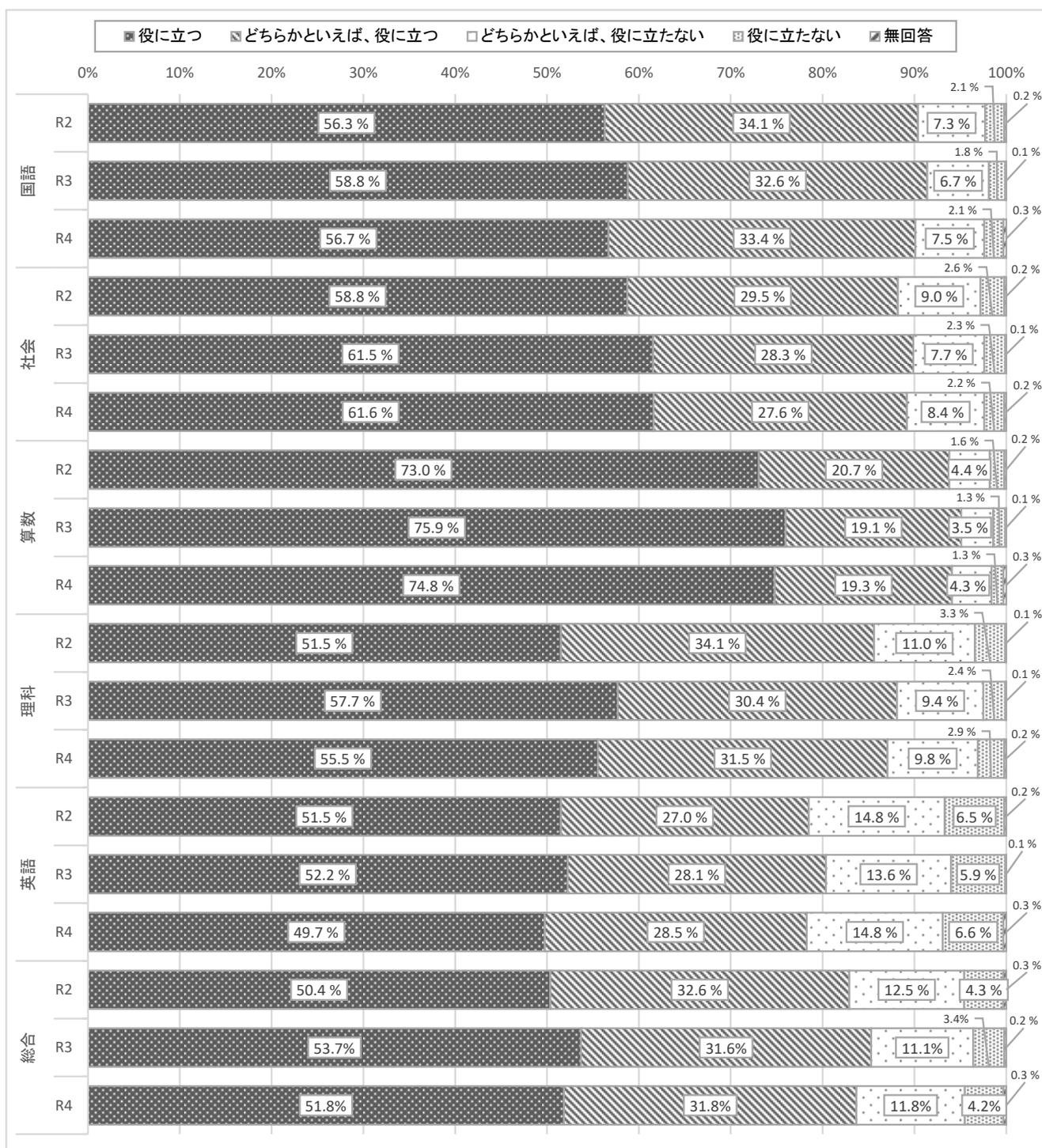


○「わかる」、「どちらかといえば、わかる」と回答した児童は、「国語」92.6%、「社会」86.6%、「算数」83.9%、「理科」94.0%、「英語」80.3%である。

○「わかる」と回答した児童は、「国語」60.0%、「社会」54.6%、「算数」56.0%、「理科」68.2%、「英語」50.6%である。

3. 生活や学習についてのアンケート

(3) 生活の中での有用感【問16～21】

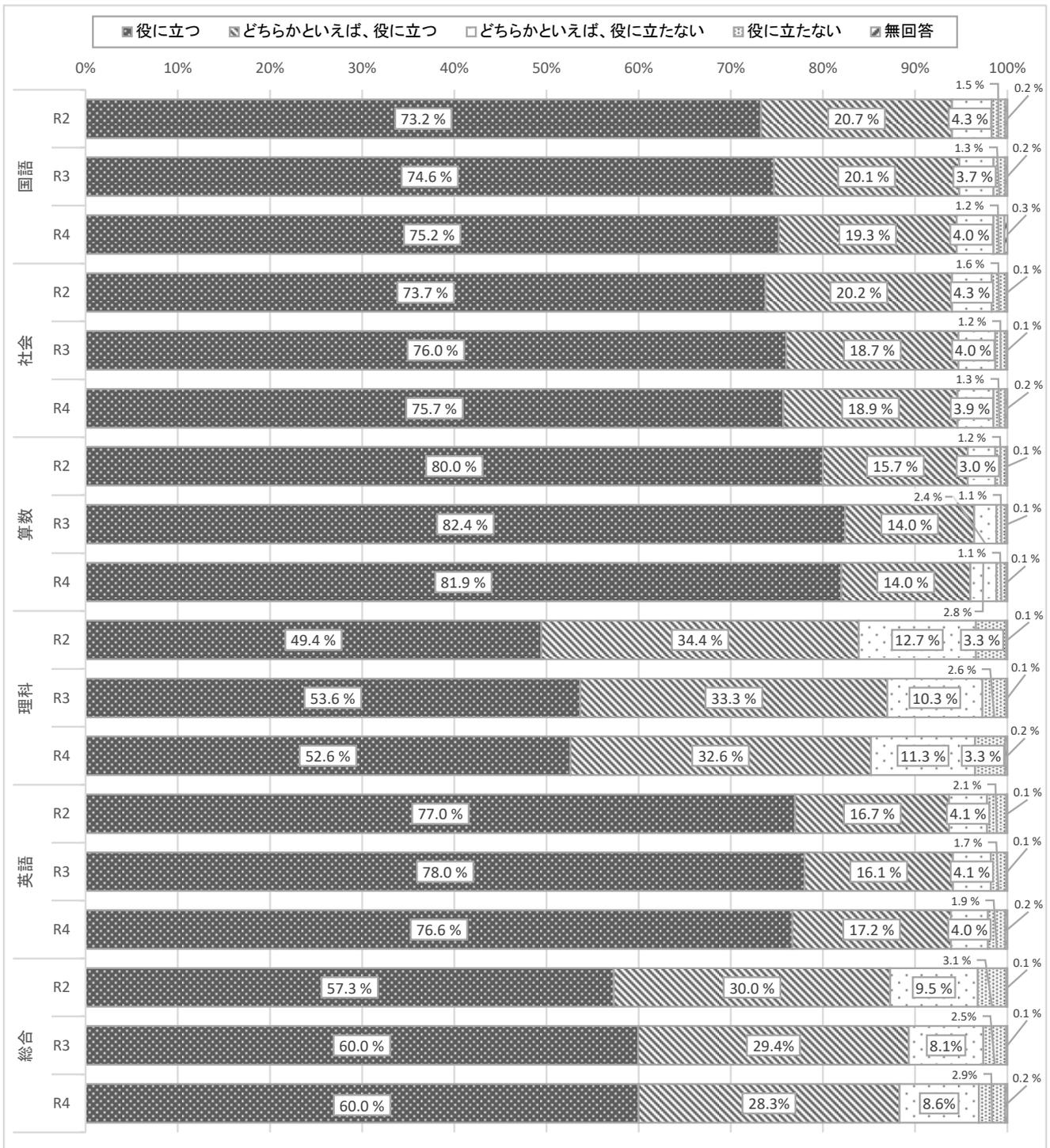


○「役に立つ」、「どちらかといえば、役に立つ」と回答した児童は、「国語」90.1%、「社会」89.2%、「算数」94.1%、「理科」87.0%、「英語」78.2%、「総合的な学習の時間」83.6%である。

○「役に立つ」と回答した児童は、「国語」56.7%、「社会」61.6%、「算数」74.8%、「理科」55.5%、「英語」49.7%、「総合的な学習の時間」51.8%である。

II 調査結果の概要

(4) 将来における有用感【問22～27】

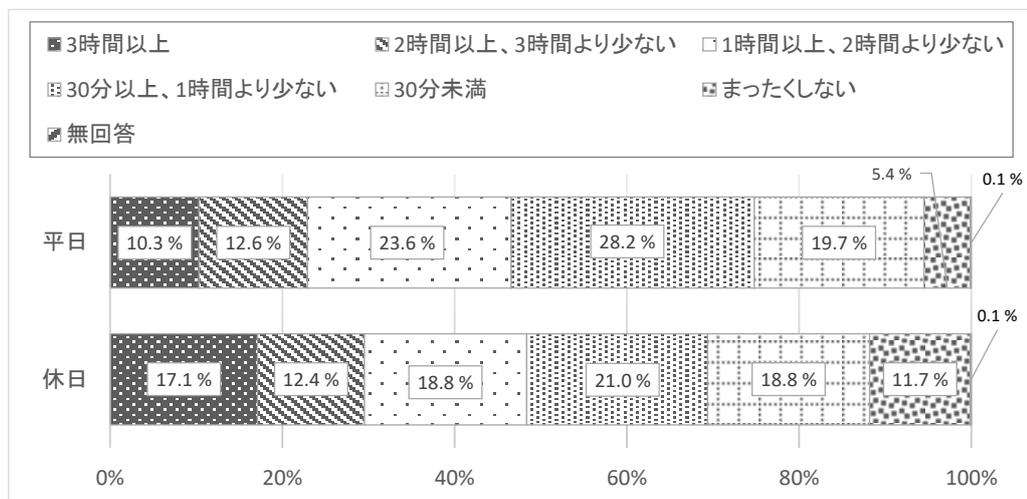


○「役に立つ」、「どちらかといえば、役に立つ」と回答した児童は、「国語」94.5%、「社会」94.6%、「算数」95.9%、「理科」85.2%、「英語」93.8%、「総合的な学習の時間」88.3%である。

○「役に立つ」と回答した児童は、「国語」75.2%、「社会」75.7%、「算数」81.9%、「理科」52.6%、「英語」76.6%、「総合的な学習の時間」60.0%である。

4 家庭学習の実態

(1) 学習時間【問34～35】

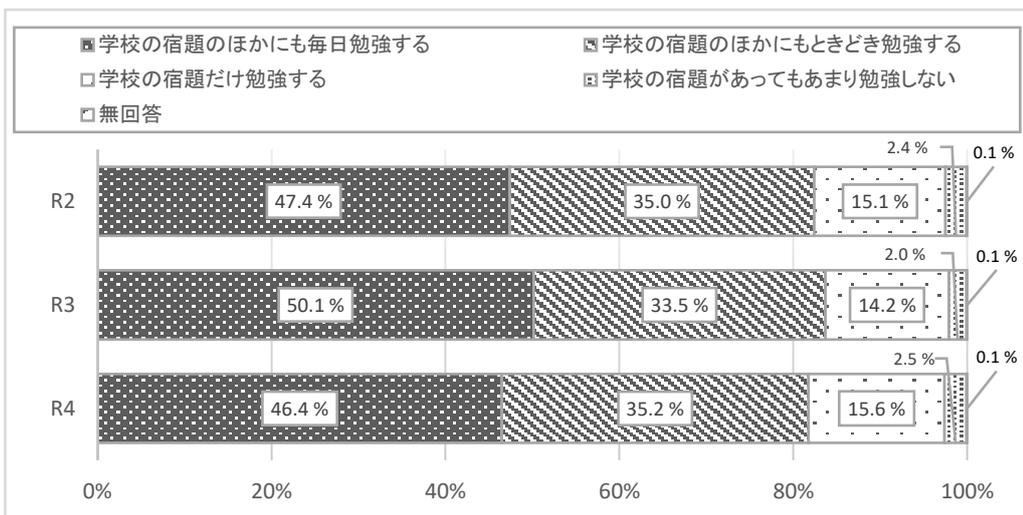


○平日の学習時間は「30分以上、1時間より少ない」が28.2%で最も多く、次いで「1時間以上、2時間より少ない」が23.6%となっている。休日は「30分以上、1時間より少ない」が21.0%でもっとも多く、次いで「1時間以上、2時間より少ない」と「30分未満」が18.8%となっている。

○「3時間以上」は、平日は10.3%だが、休日は17.1%となっている。

○学習時間が1時間以上の層は平日が46.5%、休日が48.3%となっている。

(2) 学習内容【問36】

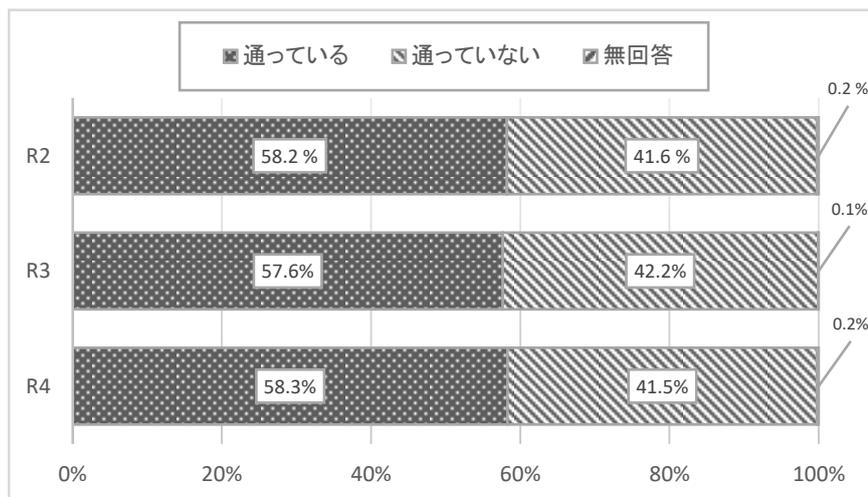


○「学校の宿題のほかに毎日勉強する」が46.4%で最も多く、「学校の宿題のほかにもときどき勉強する」が35.2%で続いている。

○「学校の宿題があってもあまり勉強しない」と回答した児童は2.5%である。

II 調査結果の概要

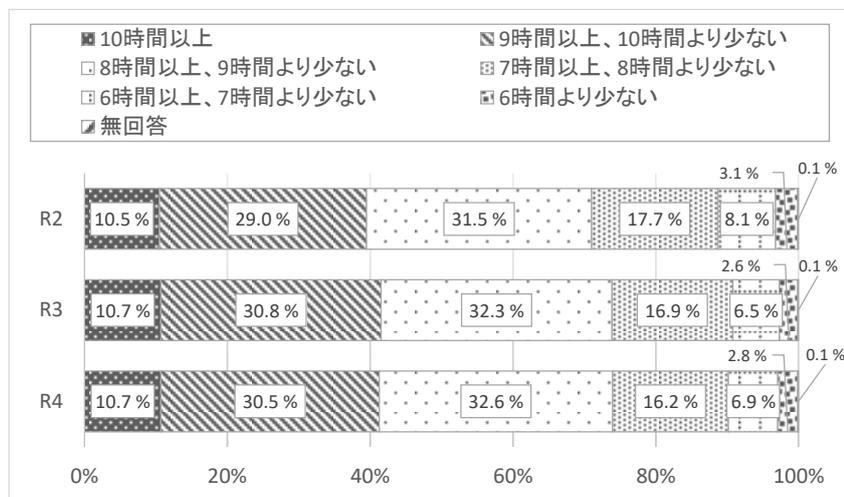
(3) 通塾【問37】



○学習塾に通っている児童は58.3%で、3年度と比較すると、0.7ポイント高くなっている。

5 家庭生活の実態

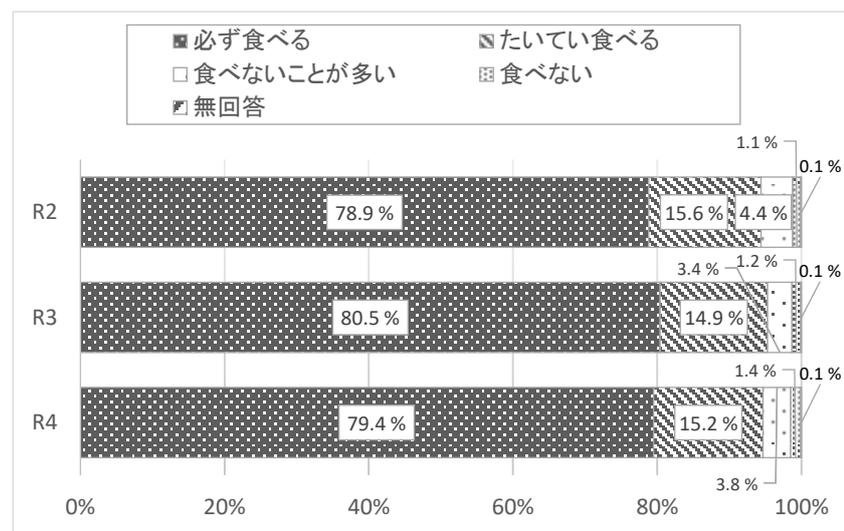
(1) 睡眠時間【問38】



○「8時間以上、9時間より少ない」(32.6%)、「9時間以上、10時間より少ない」(30.5%)という回答が多い。73.8%の児童は、睡眠時間が8時間以上である。

○睡眠時間が7時間未満の児童の割合は9.7%である。

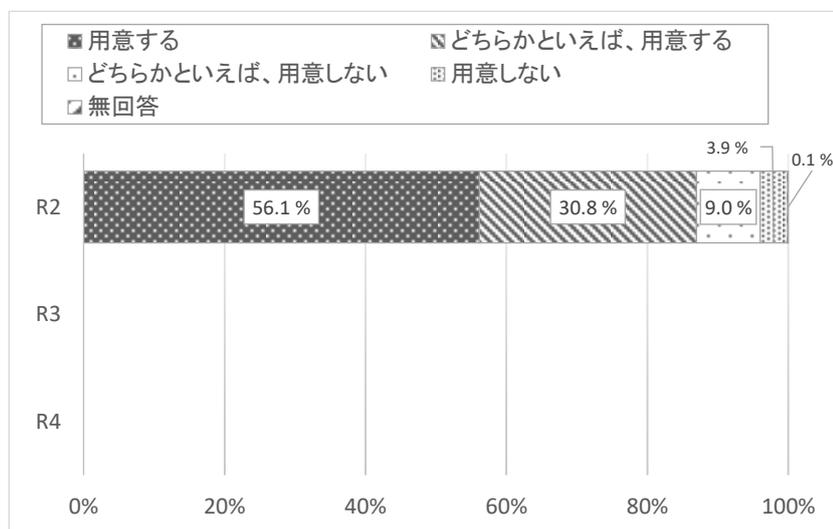
(2) 朝食の摂取【問39】



○朝食を「必ず食べる」と回答している児童の割合は79.4%であり、「たいてい食べる」を合わせると94.6%である。

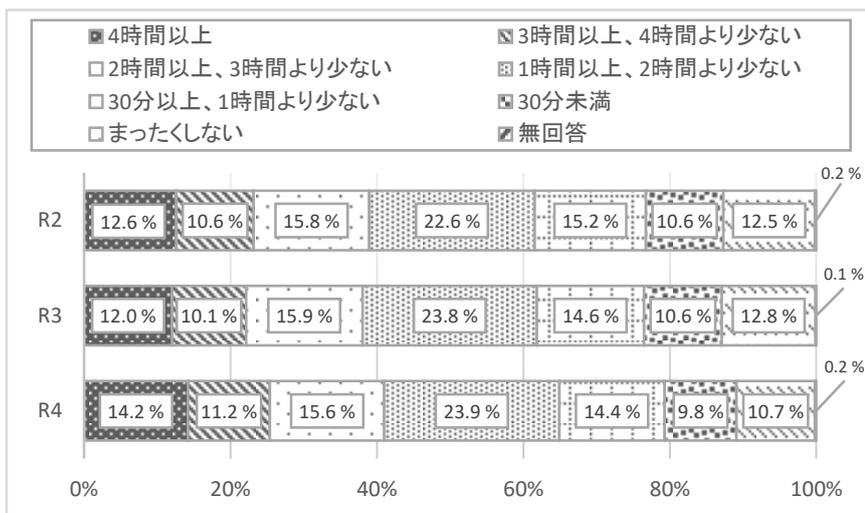
○「食べない」と回答した児童は1.4%である。

※学習の準備 ※R2年度



II 調査結果の概要

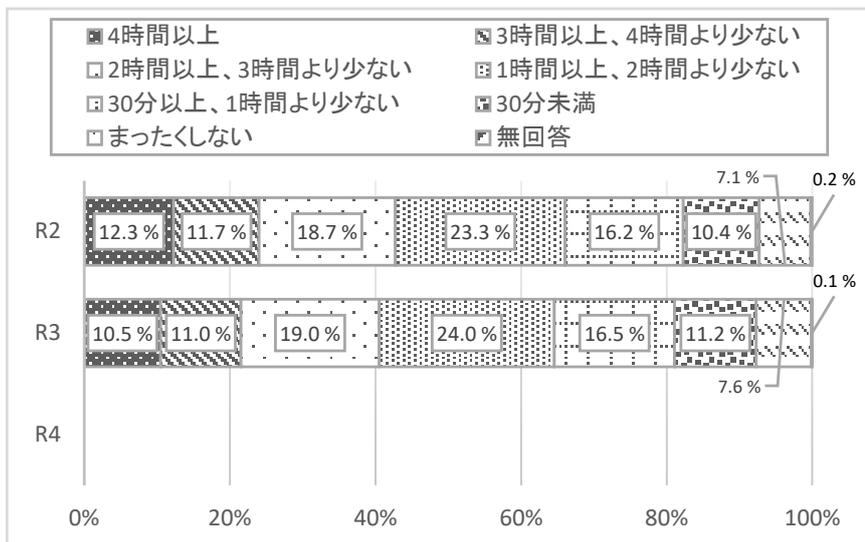
(3) テレビゲームの実施時間【問40】



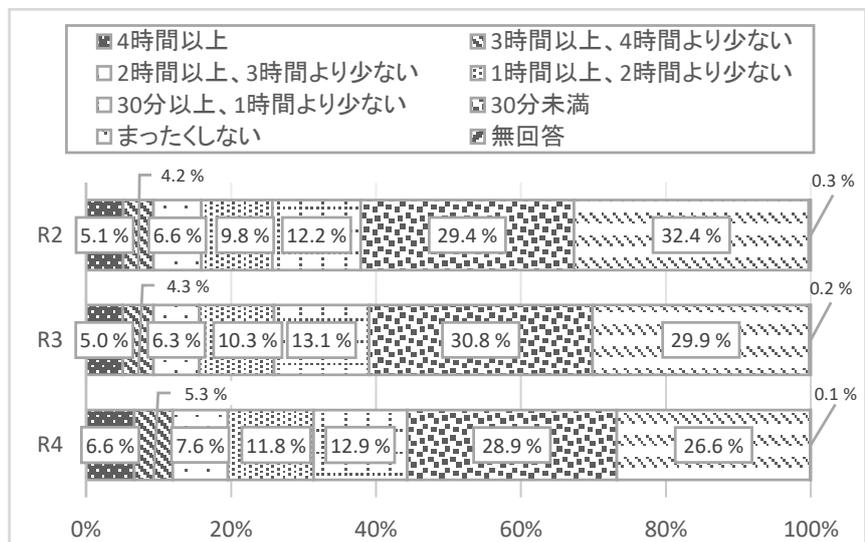
○テレビゲームの実施時間が「1時間以上」の回答の合計は、64.9%である。3年度よりも3.1ポイント増加している。

○「3時間以上」の回答の合計は、25.4%である。

※テレビやビデオ・DVDの視聴時間 ※R2年度、R3年度

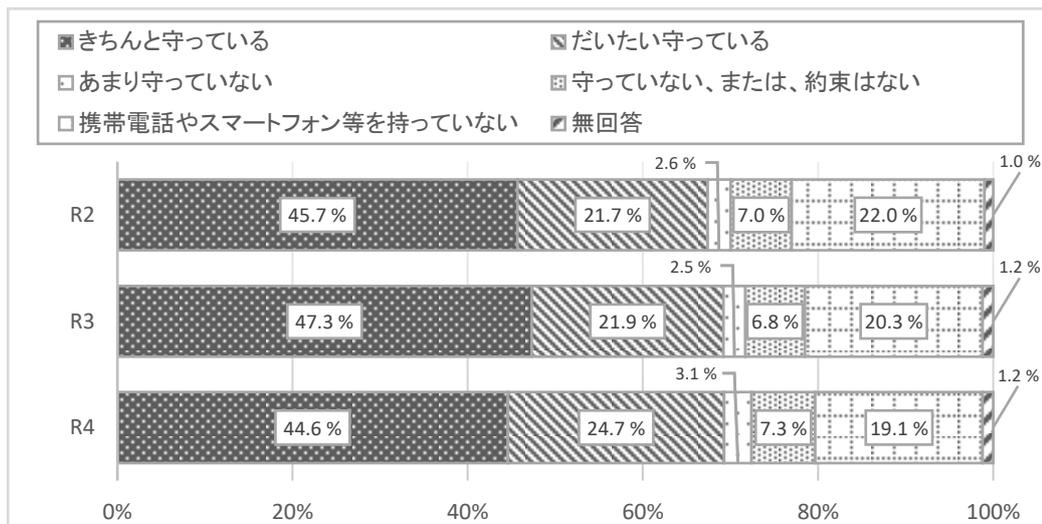


(4) 携帯電話やスマートフォンの使用時間【問41】



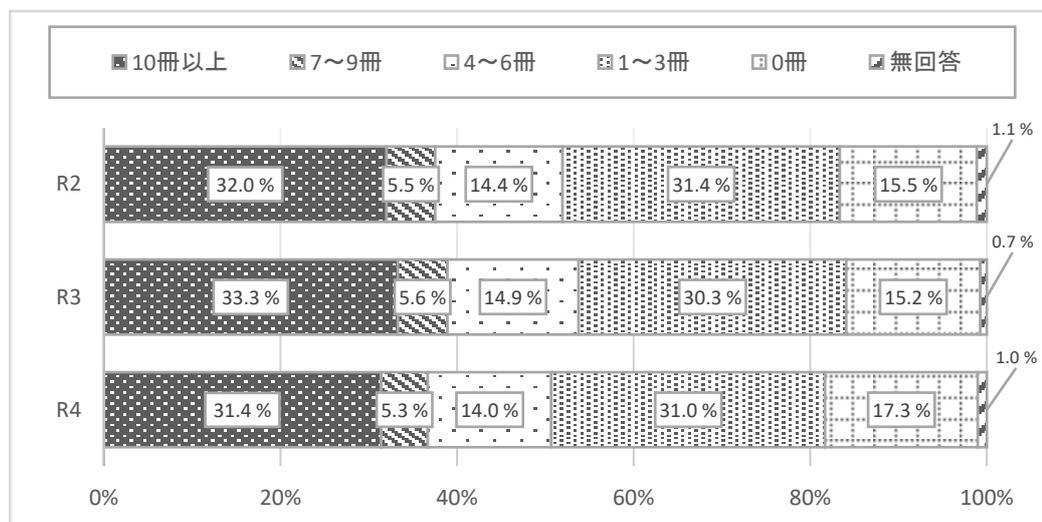
○携帯電話やスマートフォンの使用時間が「1時間以上」の回答の合計は、31.3%である。

(5) 携帯電話の使い方【問42】



○携帯電話やスマートフォンを持っていない児童の割合は、19.1%である。
 ○約束を「きちんと守っている」、「だいたい守っている」と回答した児童の割合は、69.3%で、3年度とほぼ同値である。

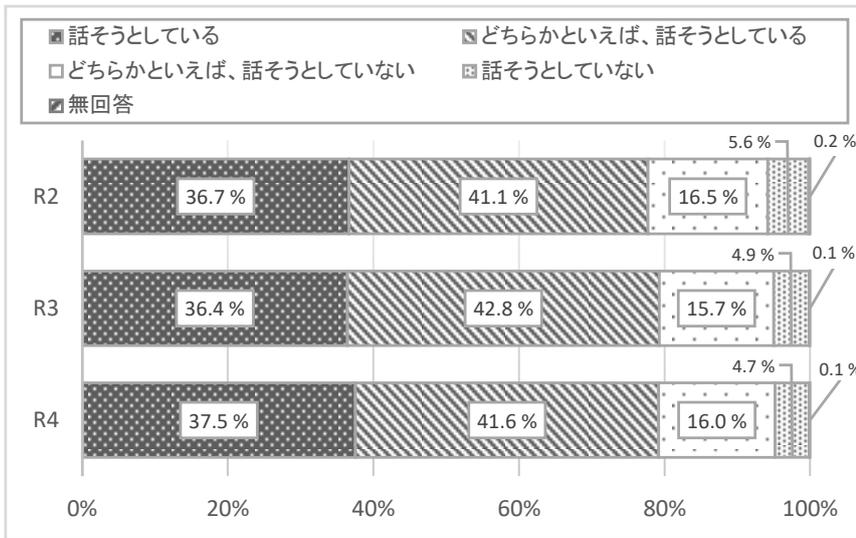
(6) 1ヶ月の読書量【問43】



○「10冊以上」が31.4%で最も多く、「1~3冊」が31.0%、「4~6冊」が14.0%である。1冊も読まない児童の割合は17.3%である。
 ○1ヶ月の平均冊数は、R2が6.4冊、R3が7.4冊、R4が9.9冊で、3年度より2.5冊増加した。

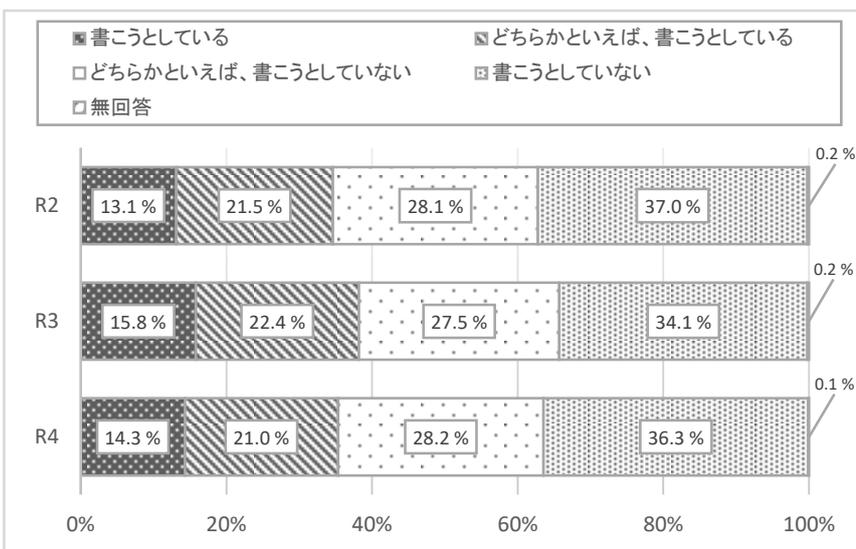
II 調査結果の概要

(7) 思いや考えを積極的に話そうとする【問44】



○思いや考えを積極的に「話そうとしている」、「どちらかといえば、話そうとしている」と回答した児童の割合は、79.1%である。

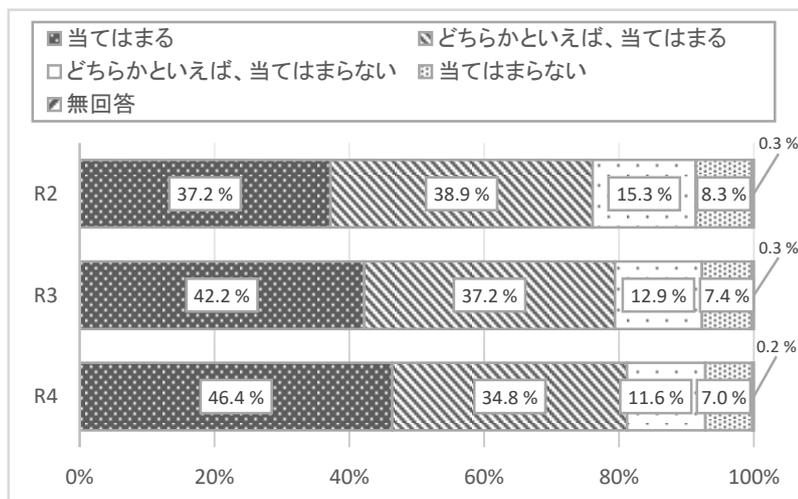
(8) 思いや考えを文章に書こうとする【問45】



○思いや考えを文章に「書こうとしている」、「どちらかといえば、書こうとしている」と回答した児童の割合は、35.3%である。

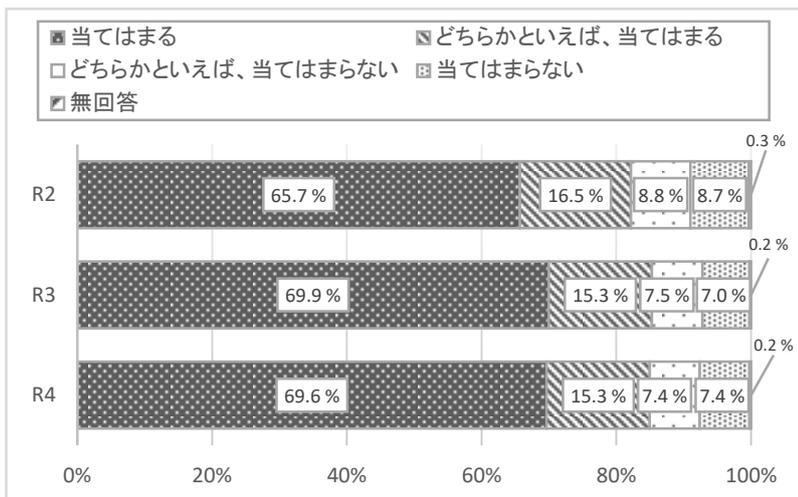
6 自己肯定感・将来に関する意識等

(1) 自分にはよいところがあると思う【問46】



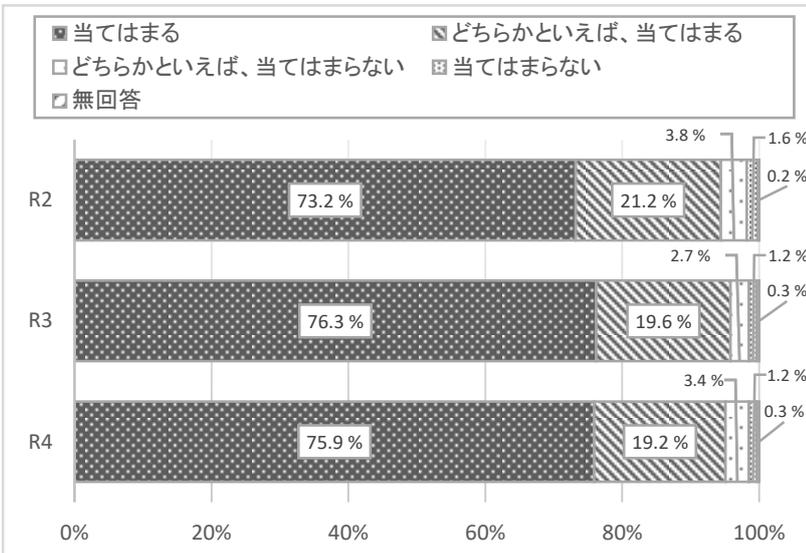
○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は81.2%で、3年度より1.8ポイント増加した。

(2) 将来の夢や目標を持っている【問47】



○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は84.9%で、3年度より0.3ポイント減少した。

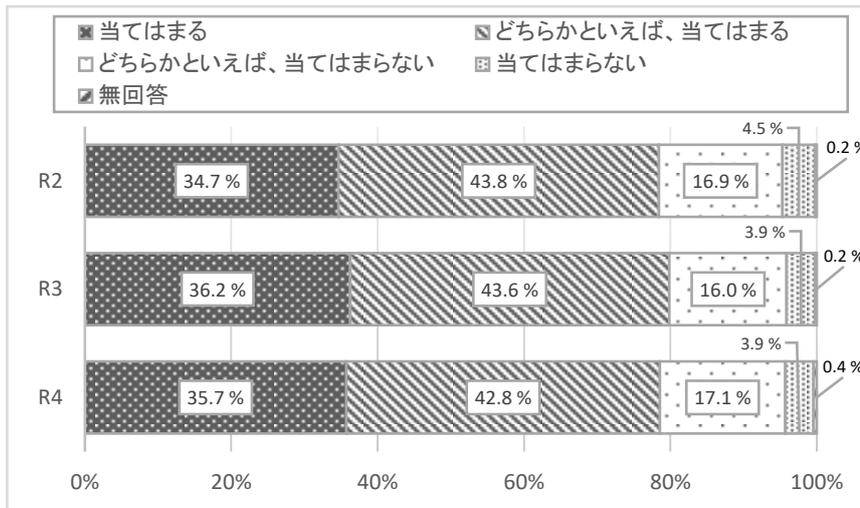
(3) 人の役に立つ人間になりたいと思う【問48】



○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は95.1%で、3年度より0.8ポイント減少した。

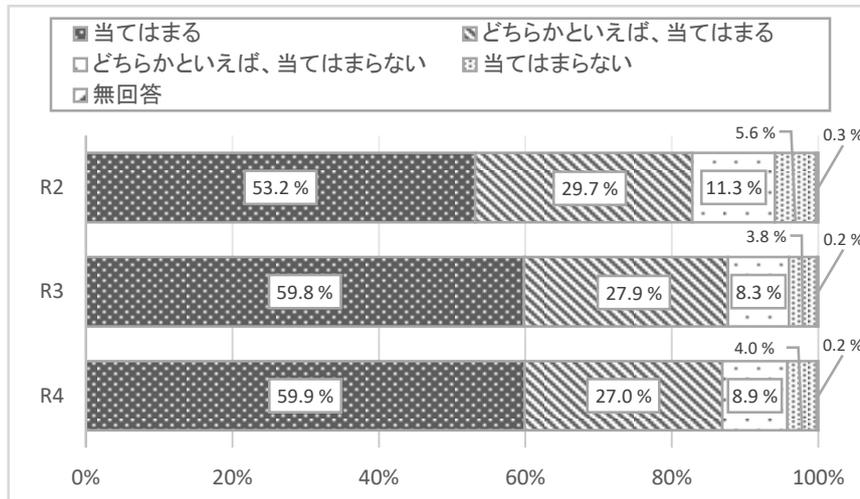
II 調査結果の概要

(4) 失敗を恐れなくて挑戦している【問49】



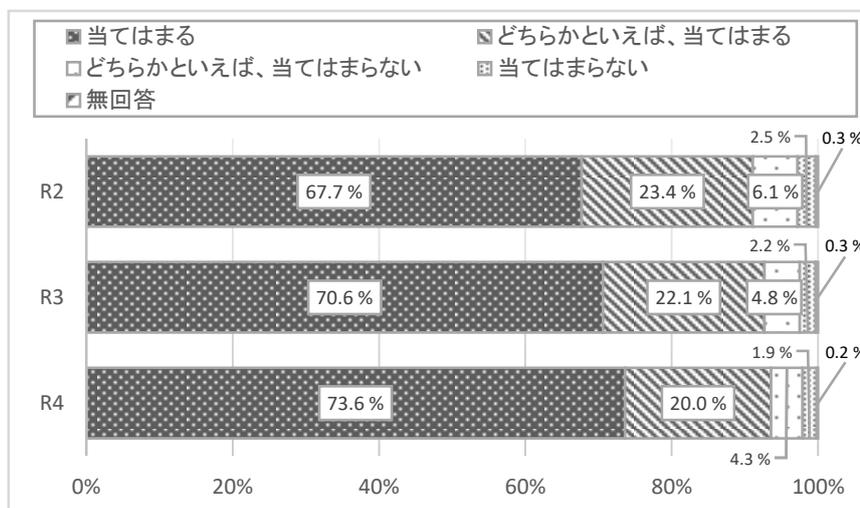
○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は78.5%である。

(5) 協力して何かをやりとげ、うれしかったことがある【問50】



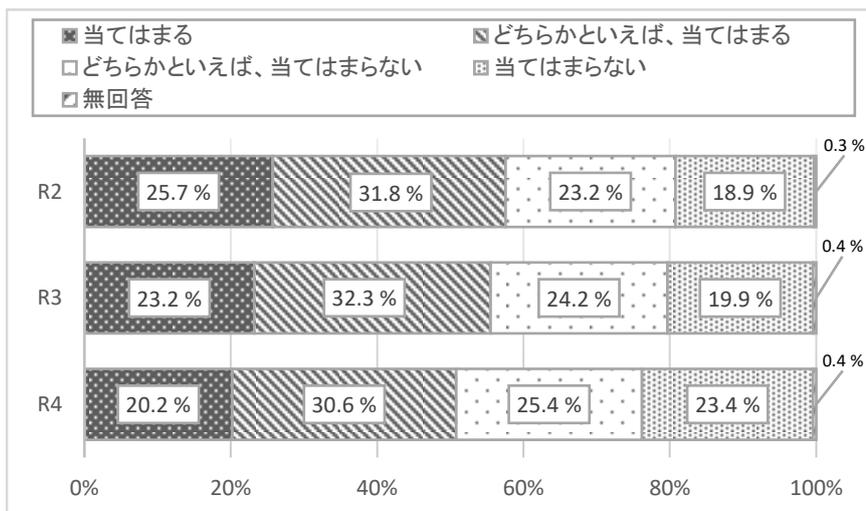
○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は86.9%であり、3年度より0.8ポイント減少した。

(6) 自分の町が好き【問51】



○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は93.6%である。

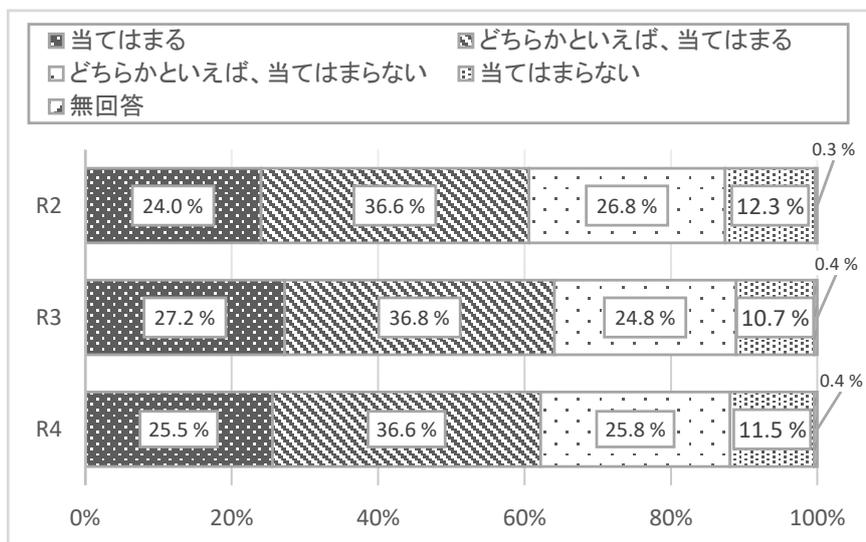
(7) 住んでいる地域の行事に参加している【問52】



○2年度より新たに加えた質問である。

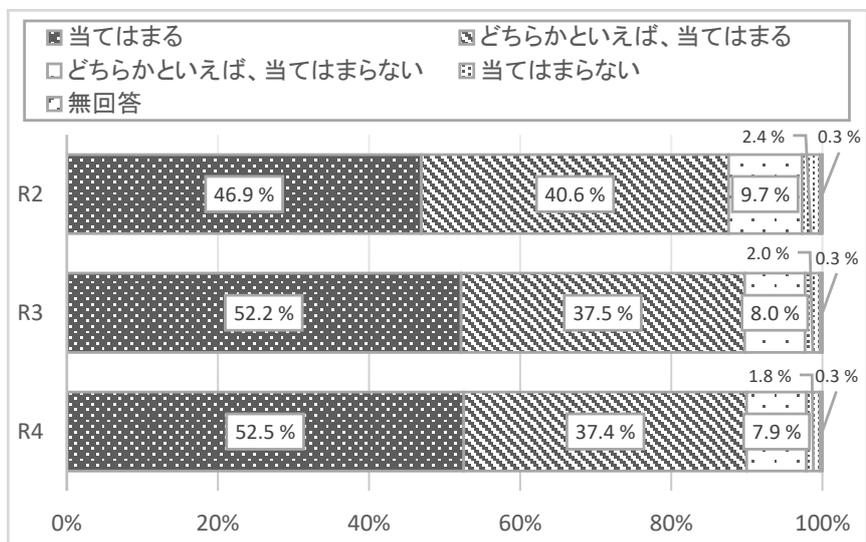
○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は、50.8%である。

(8) 地域への貢献【問53】



○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は62.1%である。

(9) 困っている人がいたら助ける【問54】

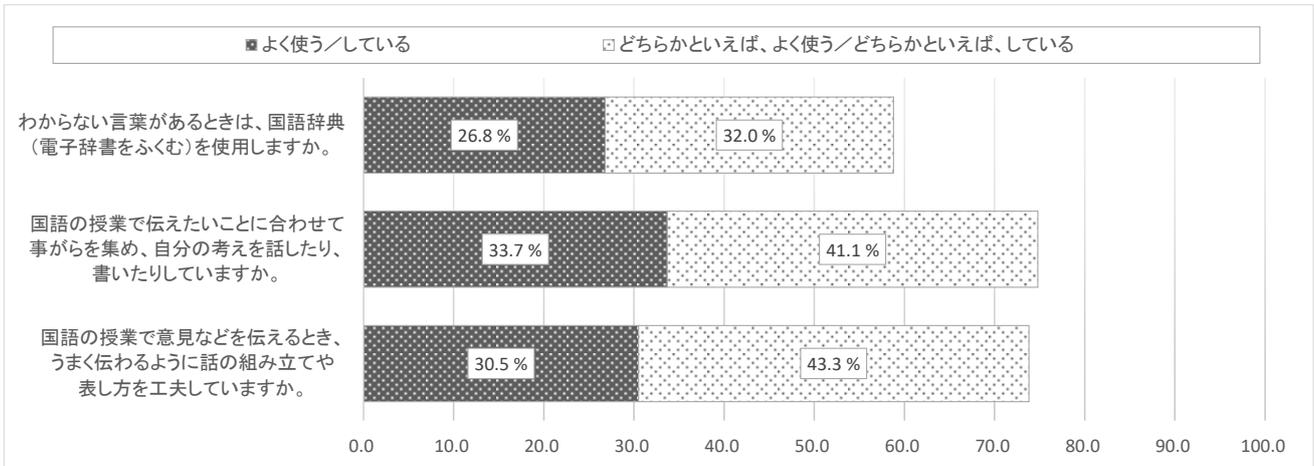


○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は89.9%である。

II 調査結果の概要

7 各教科等に対する意識・実態

(1) 国語【問55～57】

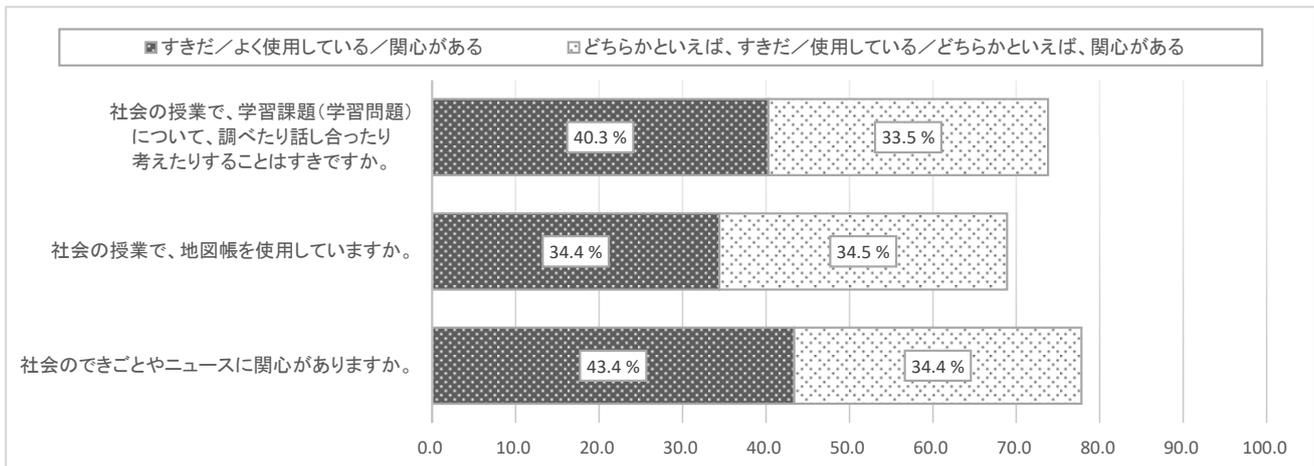


○国語辞典を使う児童は「どちらかといえば」を含めると58.8%である。

○伝えたいことに合わせて事がらを集め、考えを話したり書いたりする児童は、「どちらかといえば」を含めると74.8%である。

○意見などを伝えるとき、うまく伝わるように話の組み立てや表し方を工夫している児童は、「どちらかといえば」を含めると、73.8%である。

(2) 社会【問58～60】

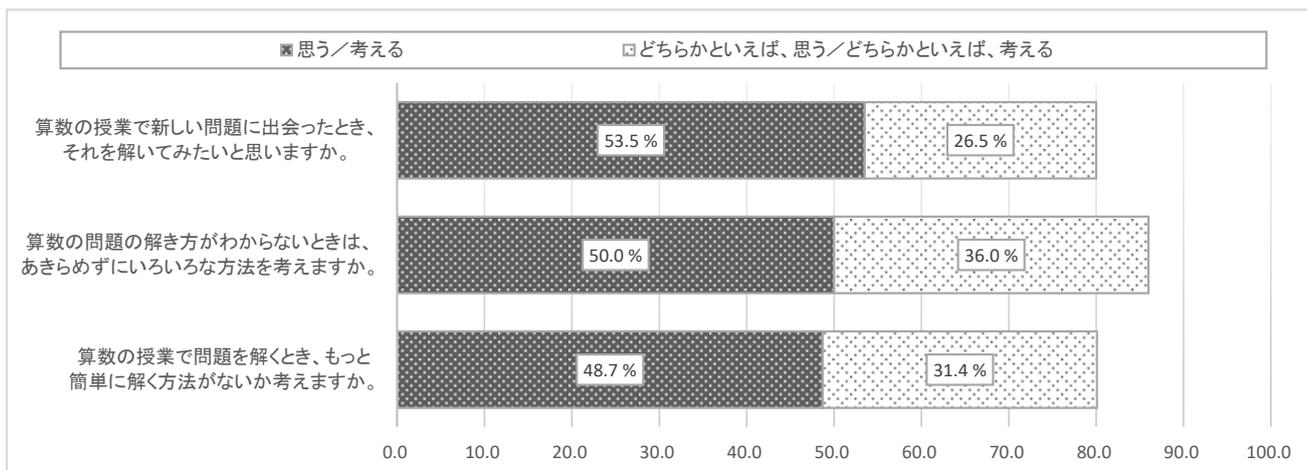


○学習課題(学習問題)について、調べたり話し合ったり考えたりすることが好きな児童は、「どちらかといえば」を含めると73.8%である。

○授業で地図帳を使用している児童は、「どちらかといえば」を含めると68.9%である。

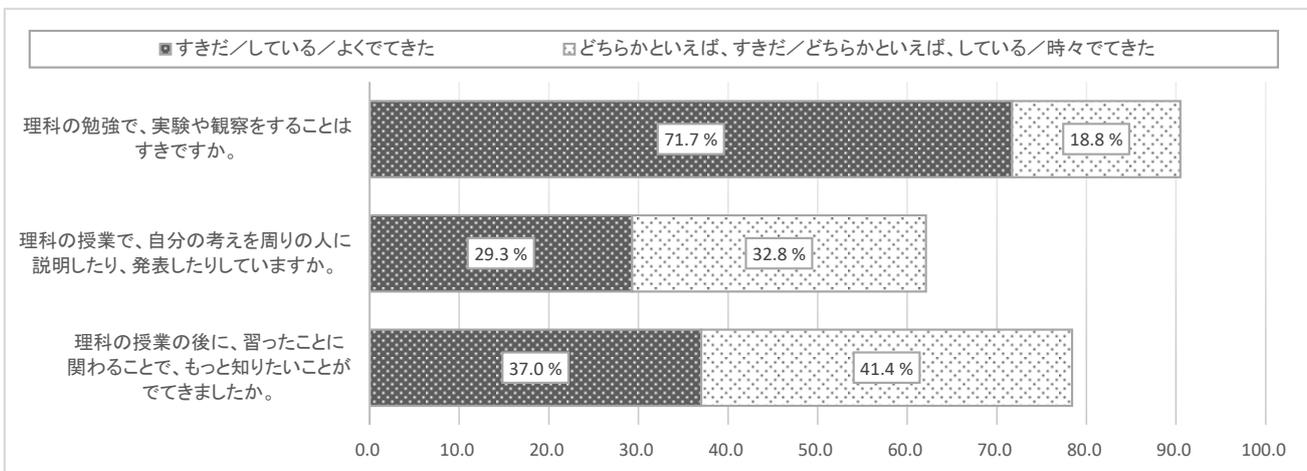
○社会のできごとやニュースに関心がある児童は、「どちらかといえば」を含めると、77.8%である。

(3) 算数【問61～63】



- 新しい問題に出会ったとき、それを解いてみたいと考える児童は、「どちらかといえば」を含めると80.0%である。
- 解き方がわからないとき、あきらめずにいろいろな方法を考える児童は、「どちらかといえば」を含めると86.0%である。
- もっと簡単に解く方法がないかを考える児童は、「どちらかといえば」を含めると、80.1%である。

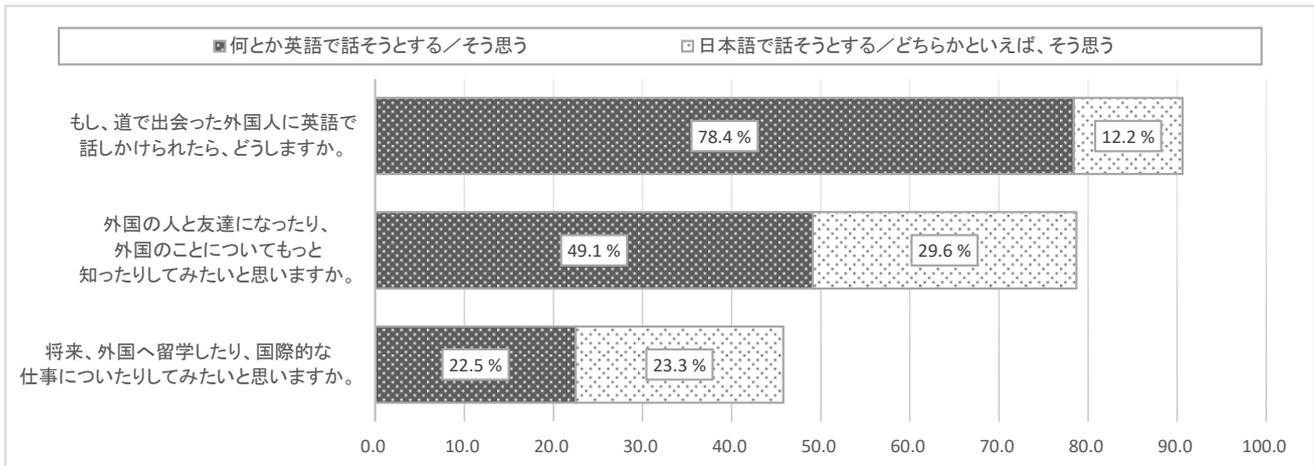
(4) 理科【問64～66】



- 実験や観察をすることが好きな児童は、「どちらかといえば」を含めると90.5%である。
- 授業で自分の考えを周りの人に説明したり、発表したりしている児童は、「どちらかといえば」を含めると62.1%である。
- 授業の後に、習ったことに関わることで、もっと知りたいことができた児童は、「どちらかといえば」を含めると、78.4%である。

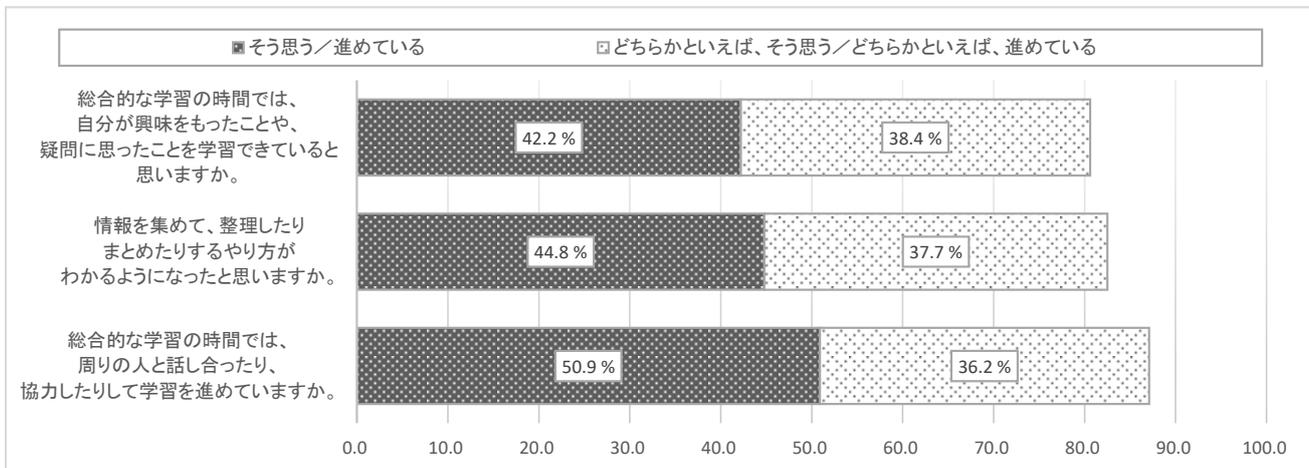
II 調査結果の概要

(5) 外国語活動、外国語【問67～69】



- 外国人に話しかけられたら、「何とか英語で話そうとする」児童は78.4%、「日本語で話そうとする」児童は12.2%で、外国人と話そうとする児童は合わせて90.6%である。
- 外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知りたいしてみたいという児童は、「どちらかといえば」を含めると78.7%である。
- 将来、外国へ留学したり、国際的な仕事についたりしてみたいと思う児童は、「どちらかといえば」を含めると、45.8%である。

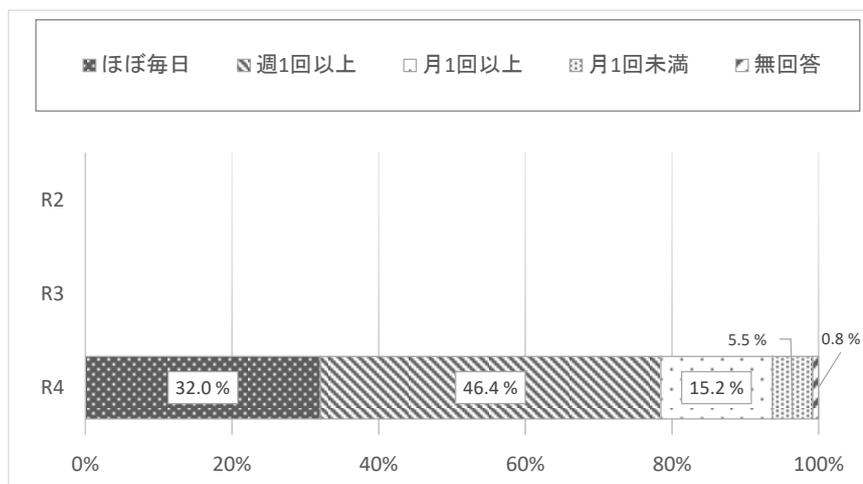
(6) 総合的な学習の時間【問70～72】



- 自分の興味や疑問をもったことを学習できていると思う児童は、「どちらかといえば」を含めると80.6%である。
- 情報の集め方や調べ方がわかるようになったと思う児童は、「どちらかといえば」を含めると82.5%である。
- 周りの人と話し合ったり、協力したりして学習を進めている児童は、「どちらかといえば」を含めると、87.1%である。

8 ICT機器・GIGA端末の使用に関する実態

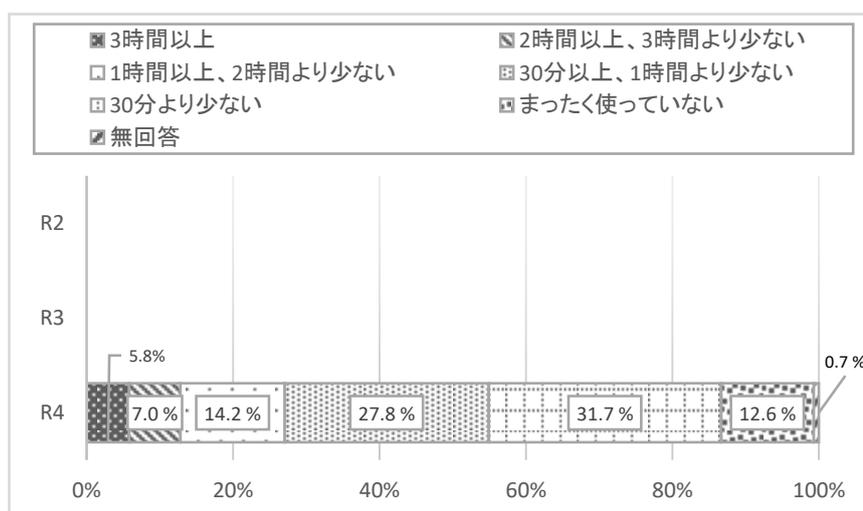
(1) 授業でのICT機器の使用頻度【問73】



○4年度より新たに加えた質問である。

○32.0%の児童が、授業で「ほぼ毎日」ICT機器を使用していると回答しており、「週1回以上」と合わせると78.4%である。

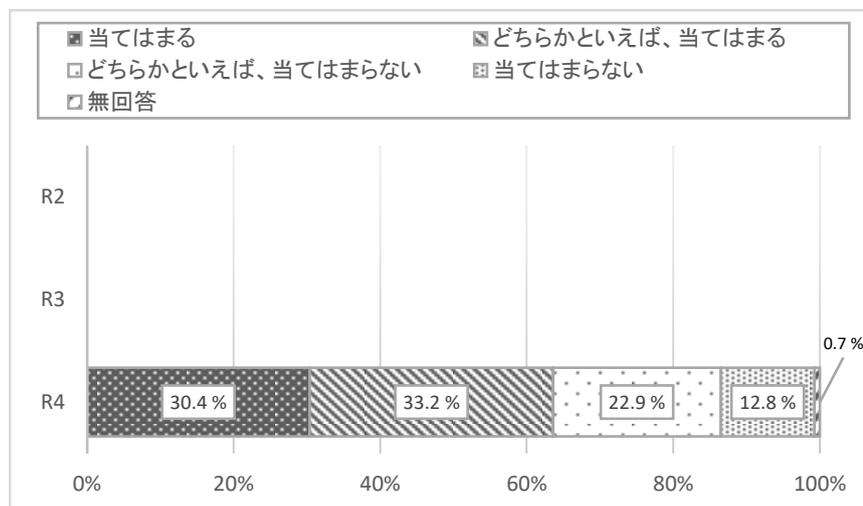
(2) 勉強目的でのICT機器の使用時間(平日)【問74】



○4年度より新たに加えた質問である。

○「30分より少ない」が31.7%で最も多く、「30分以上、1時間より少ない」が27.8%、「1時間以上、2時間より少ない」が14.2%である。

(3) 自分から進んでGIGA端末を活用している【問75】

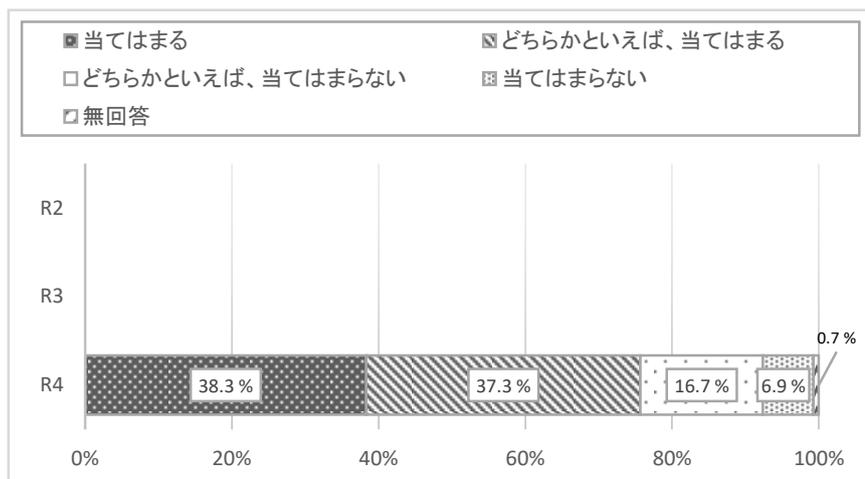


○4年度より新たに加えた質問である。

○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は63.6%である。

II 調査結果の概要

(4) GIGA端末を学習に活用できている【問76】

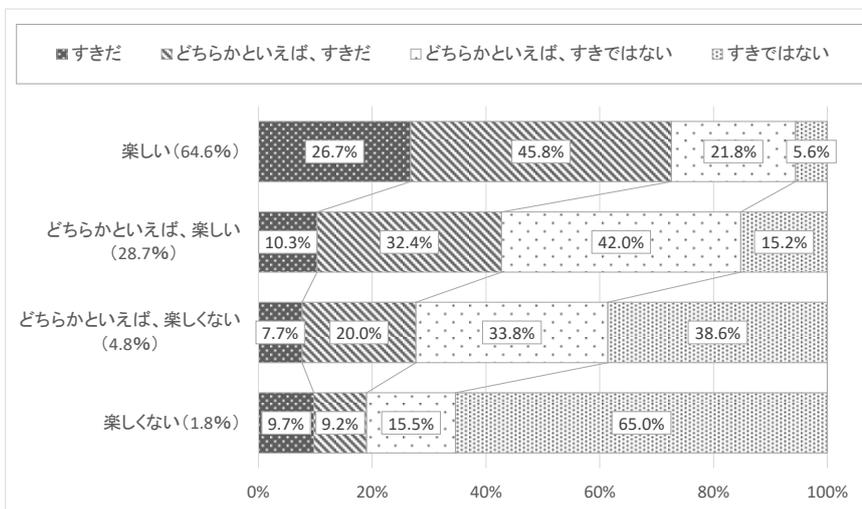


○4年度より新たに加えた質問である。

○「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は75.6%である。

クロス集計

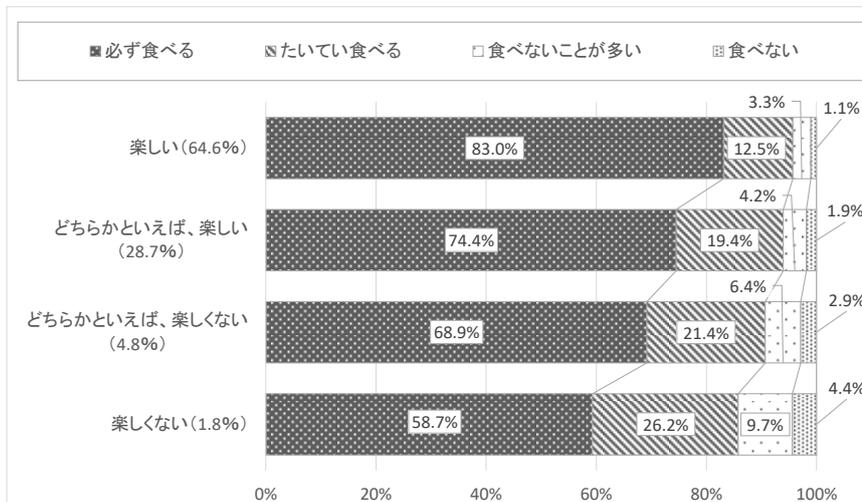
1 学校生活の楽しさ【問1】×学習に対する好感度【問2】



○学校生活が楽しい児童ほど、学習に対する好感度が高い傾向がある。

○学校生活は「楽しくない」と回答した児童の80.5%、「どちらかといえば、楽しくない」と回答した児童の72.4%が勉強は「すきではない」、「どちらかといえば、すきではない」と答えている。

2 学校生活の楽しさ【問1】×朝食の摂取【問39】

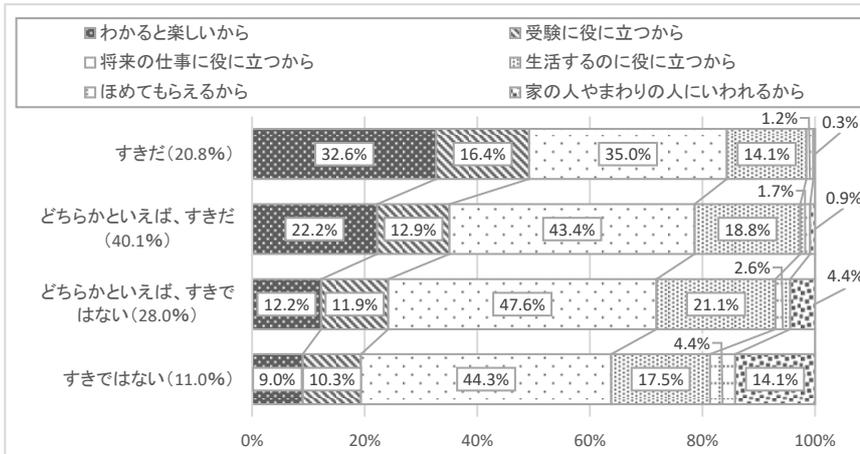


○学校生活が楽しい児童は、朝食の摂取状況が良好な状況にある。

○学校生活は「楽しくない」と回答した児童の朝食を必ず食べる割合は、「楽しい」と答えた児童の朝食を必ず食べる割合とでは24.3ポイントの差がある。

II 調査結果の概要

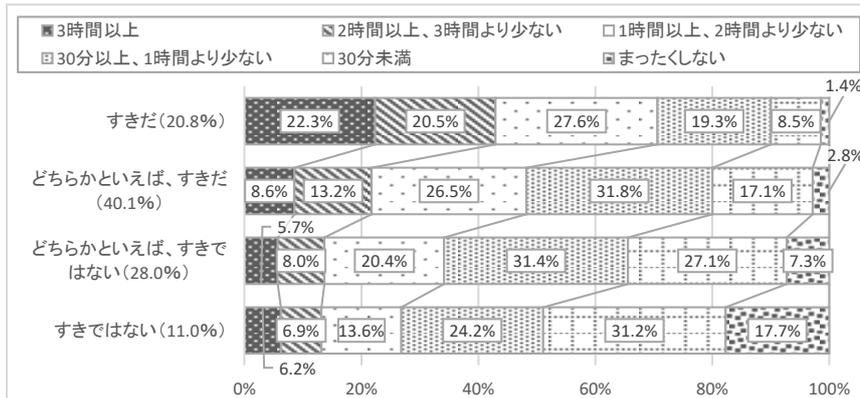
3 学習に対する好感度【問2】×勉強する理由【問4】



○学習に対する好感度が高い児童ほど「わかると楽しいから」と回答する割合が多い。「好きだ」と回答した児童と「好きではない」と回答した児童とでは23.6ポイントの差がある。

○勉強が「好きではない」と回答した児童の14.1%が勉強する理由として「家の人やまわりの人にいわれるから」を選んでおり、他に比べて多い。

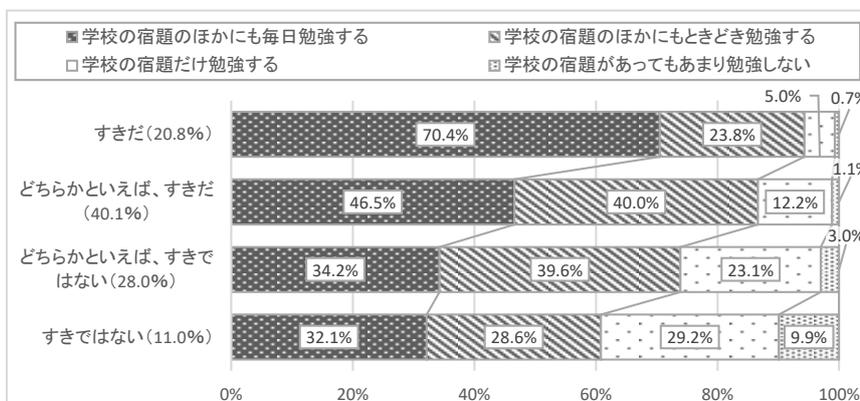
4 学習に対する好感度【問2】×家庭学習時間(平日)【問34】



○学習に対する好感度が高い児童ほど平日の家庭学習時間が長い傾向にある。

○勉強が「好きではない」と回答した児童で30分以上の家庭学習を行っているのは50.9%である。

5 学習に対する好感度【問2】×家庭学習の内容【問36】

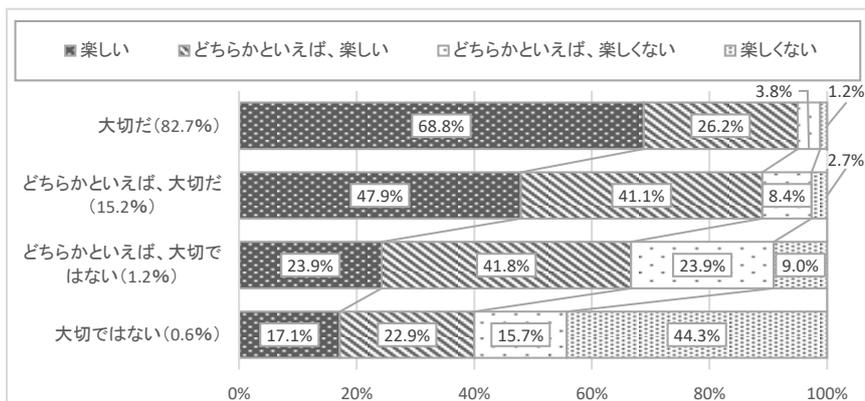


○勉強が「好きだ」と回答した児童の70.4%は「学校の宿題のほかに毎日勉強する」と回答している。

○勉強が「好きではない」と回答した児童の60.7%が学校の宿題のほかに勉強をしている。

3. 生活や学習についてのアンケート

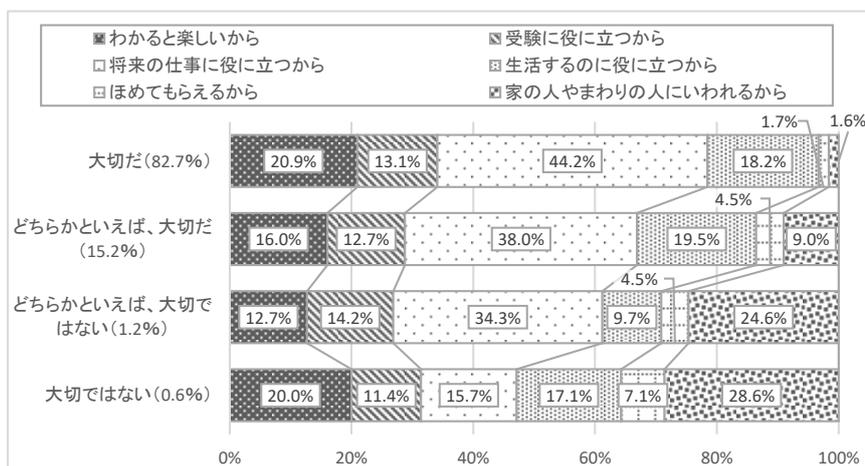
6 学習の必要性【問3】× 学校生活の楽しさ【問1】



○学習に対する必要性を感じている児童ほど、学校生活を楽しいと感じている傾向がある。

○勉強が「大切ではない」と回答した児童のうち、60.0%は学校生活が「楽しくない」、「どちらかといえば、楽しくない」と回答している。

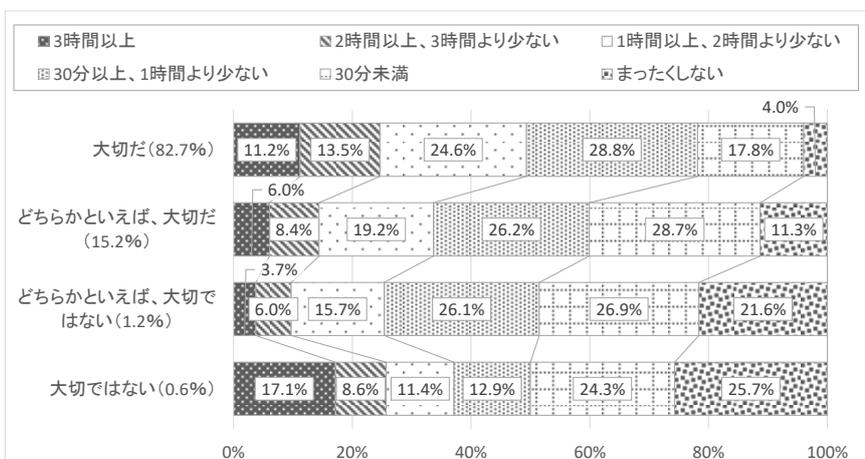
7 学習の必要性【問3】× 勉強する理由【問4】



○学習が「大切だ」と考えている児童のうち、勉強する理由として「家の人やまわりの人にいわれるから」、「ほめてもらえるから」を選んでいるのはわずか3.3%である。

○学習が「大切だ」と感じるにつれ、「将来の仕事に役に立つから」が占める割合が増加している。

8 学習の必要性【問3】× 家庭学習時間(平日)【問34】

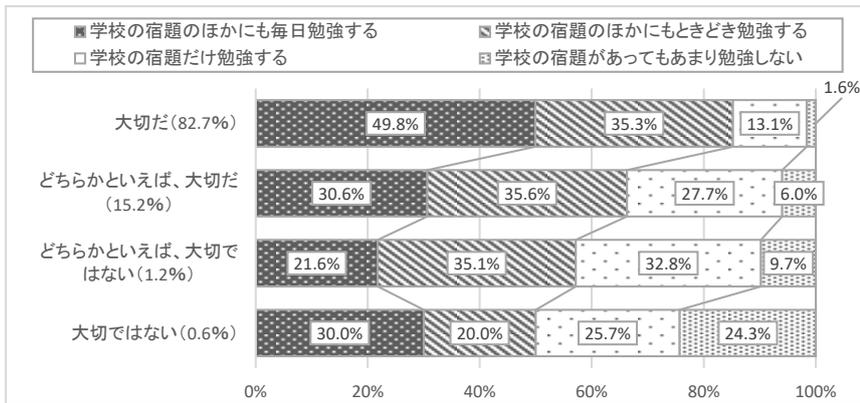


○学習が「大切だ」と回答した児童の家庭学習時間で一番多いのは、「30分以上、1時間より少ない」である。

○「どちらかといえば、大切ではない」、「大切ではない」と回答した児童のうち、2割を超える児童が平日は「まったく勉強しない」と回答している。

II 調査結果の概要

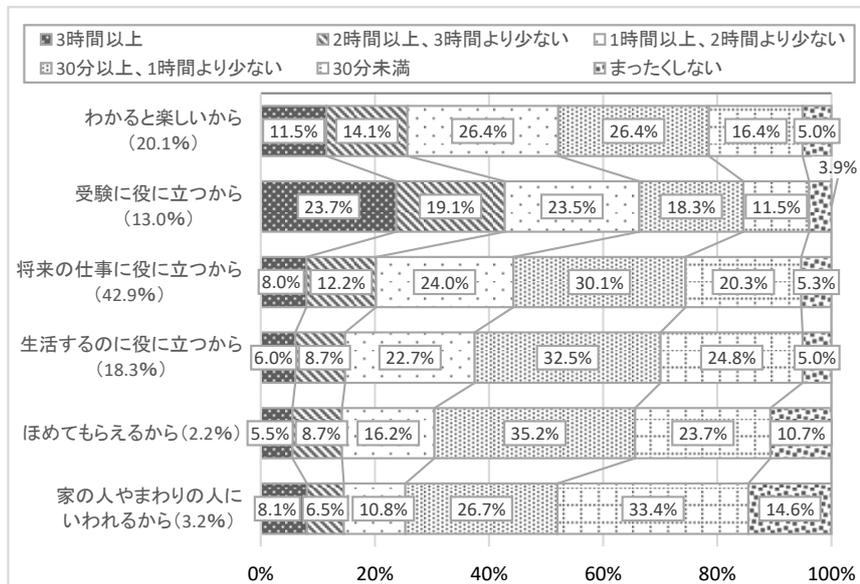
9 学習の必要性【問3】×家庭学習の内容【問36】



○勉強が「大切だ」と回答した児童のうち、85.1%が、「学校の宿題のほかに毎日またはときどき勉強する」と回答している。

○勉強が「大切ではない」と回答した児童のうち、24.3%は「学校の宿題があってもあまり勉強しない」と回答している。

10 勉強する理由【問4】×家庭学習時間(平日)【問34】

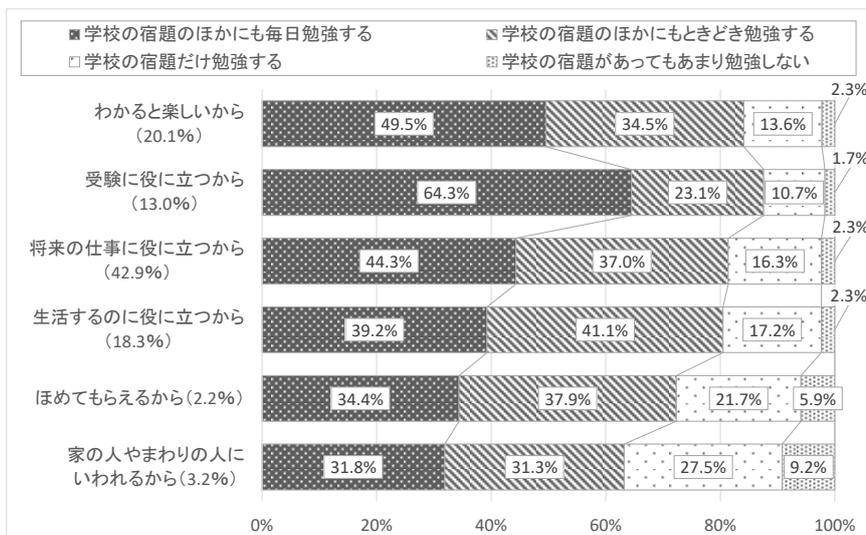


○勉強する理由として「受験に役に立つから」を選んだ児童は勉強時間が長い傾向がある。

○勉強する理由として「家の人やまわりの人にいわれるから」を選んだ児童の48.0%が、勉強をする時間について「30分未満」「まったくしない」と回答している。

3. 生活や学習についてのアンケート

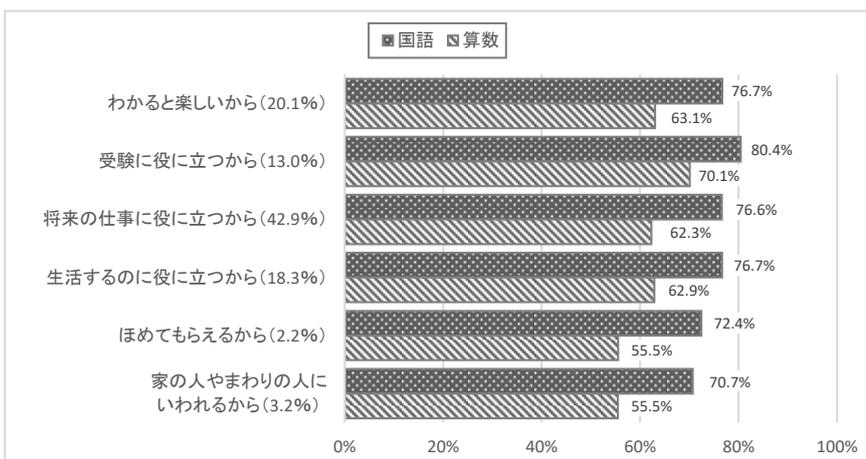
11 勉強する理由【問4】×家庭学習の内容【問36】



○勉強する理由として「将来の仕事に役に立つから」、「生活するのに役に立つから」と回答した児童のうち、「学校の宿題のほかに毎日勉強する」、「学校の宿題のほかにもときどき勉強する」と回答した児童はそれぞれ81.3%、80.3%である。

○「家の人やまわりの人にいわれるから」と回答した児童では、9.2%が「学校の宿題があってもあまり勉強しない」と回答している。

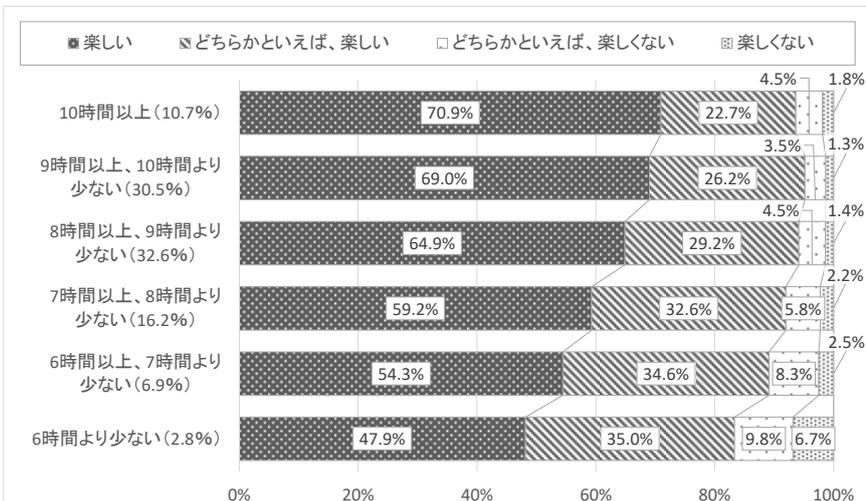
12 勉強する理由【問4】×国語・算数の正答率



○勉強する理由として「わかると楽しいから」「～の役に立つから」と回答した児童の正答率は、国語は76.0%を超え、算数は62.0%を超えている。

○勉強する理由として「ほめてもらえるから」「家の人やまわりの人にいわれるから」と回答した児童の国語と算数のそれぞれの正答率は、その他の項目に比べ、低い状況にある。

13 睡眠時間【問38】×学校生活の楽しさ【問1】

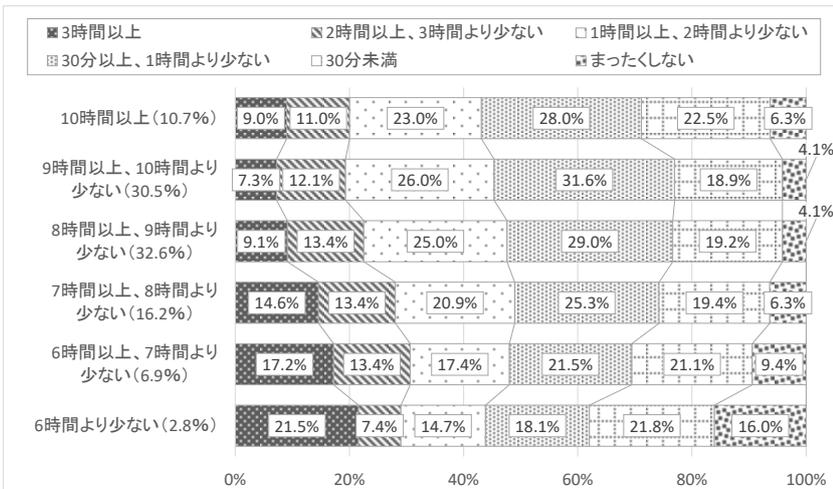


○睡眠時間が長い児童ほど、学校生活が「楽しい」と回答している。

○睡眠時間が「6時間より少ない」と回答した児童の16.5%が、学校生活は「楽しくない」、「どちらかといえば、楽しくない」と回答している。

II 調査結果の概要

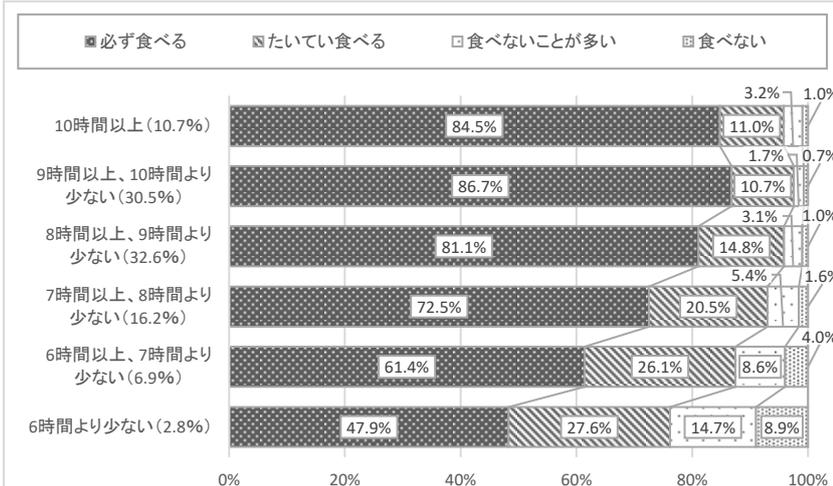
14 睡眠時間【問38】×家庭学習時間(平日)【問34】



○睡眠時間が「7時間より少ない」と回答した児童の約2割が家庭での学習を「3時間以上」していると回答している。

○一方、睡眠時間が「6時間より少ない」と回答した児童の37.8%が家庭での学習を「30分未満」「まったくしない」と回答している。

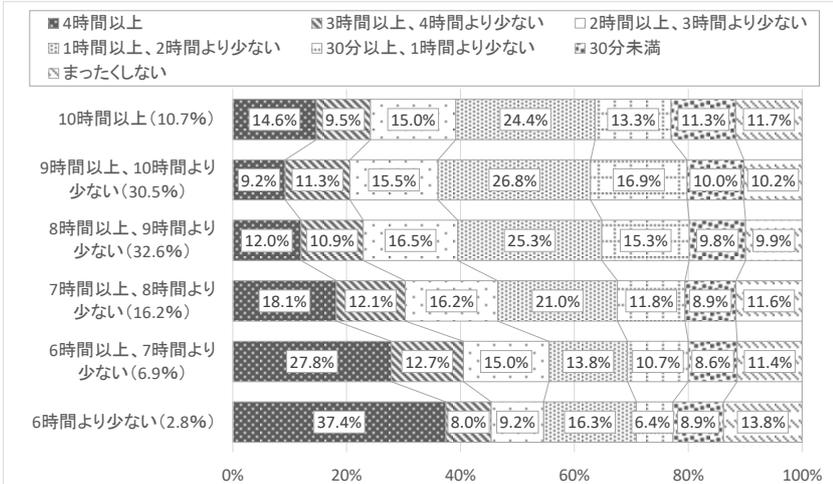
15 睡眠時間【問38】×朝食の摂取【問39】



○睡眠時間が8時間以上で、朝食を「必ず食べる」と回答した児童の割合は80.0%を超えており、朝食の摂取の状況が良好な傾向にある。

○睡眠時間が「6時間より少ない」と回答した児童のうち、朝食を「必ず食べる」と回答した児童は47.9%である。

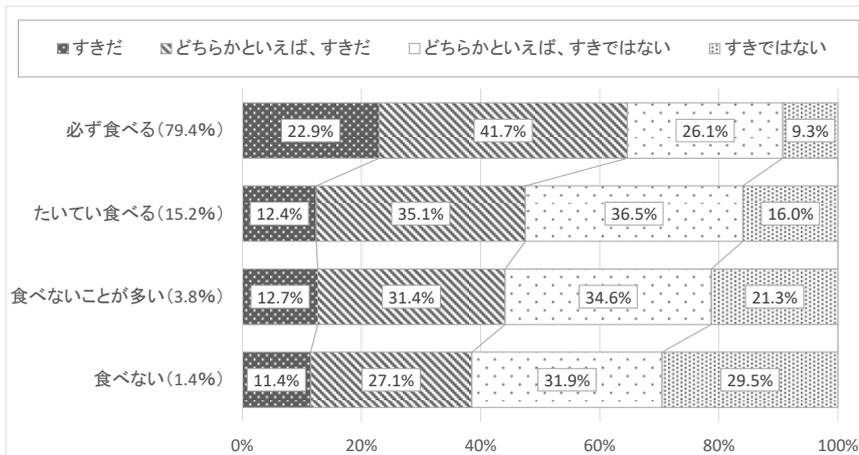
16 睡眠時間【問38】×テレビゲームの実施時間【問40】



○睡眠時間が短いほど、テレビゲームの実施時間が「4時間以上」、「3時間以上、4時間より少ない」と回答した児童の割合が増え、「30分以上、1時間より少ない」、「30分未満」と回答した児童の割合は減る傾向にある。

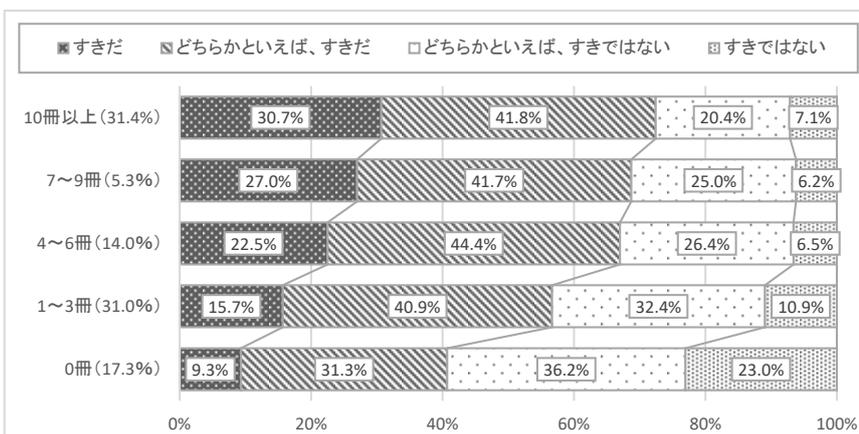
3. 生活や学習についてのアンケート

17 朝食の摂取【問39】×学習に対する好感度【問2】



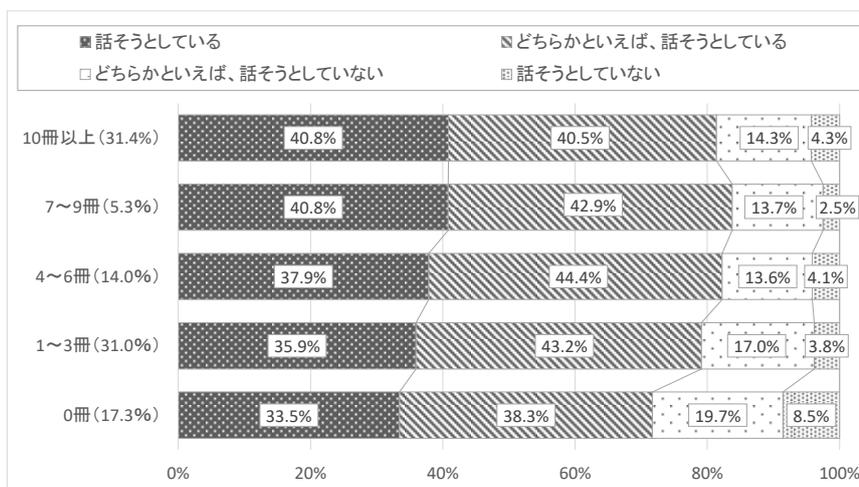
○朝食を「必ず食べる」と回答した児童のうち、勉強が「すきだ」、「どちらかといえば、すきだ」と回答した児童の割合は64.6%であるのに対して、朝食を「食べない」と回答した児童のうち、勉強が「すきだ」、「どちらかといえば、すきだ」と回答した児童の割合は38.5%である。

18 1ヶ月の読書量【問43】×学習に対する好感度【問2】



○1ヶ月の読書量が多いほど、勉強が「すきだ」と回答した児童の割合が増える。

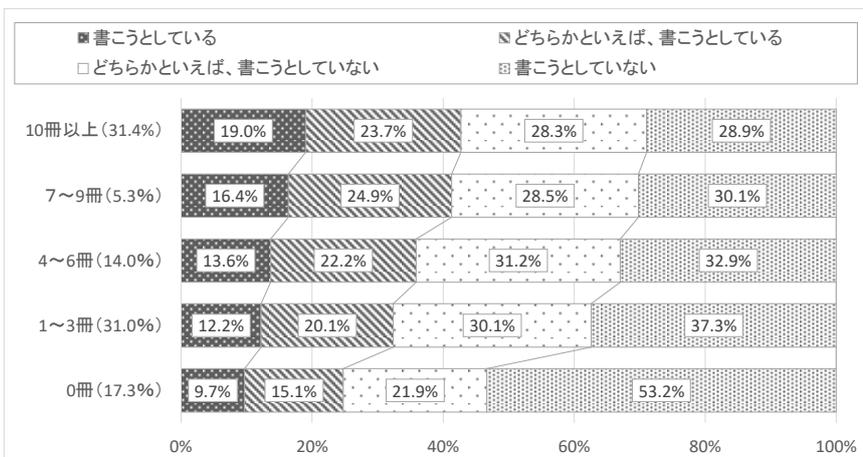
19 1ヶ月の読書量【問43】×思いや考えを積極的に話そうとする【問44】



○1ヶ月に1冊も本を読まない児童のうち、28.2%が、自分の思いや考えを「話そうとしていない」、「どちらかといえば、話そうとしていない」と回答している。

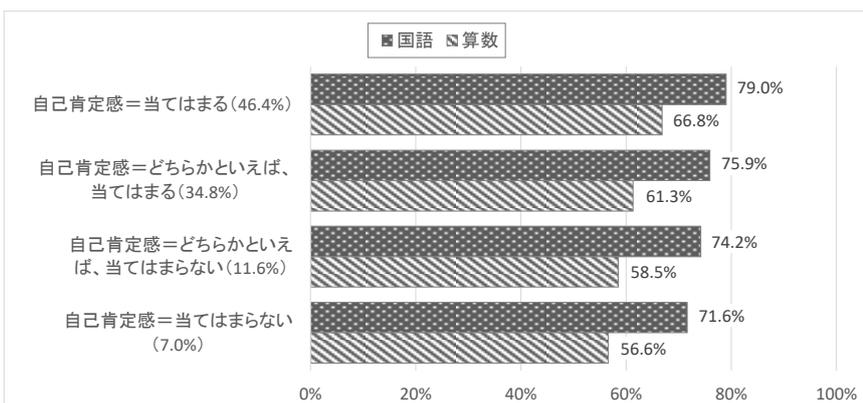
II 調査結果の概要

20 1ヶ月の読書量【問43】× 思いや考えを文章に書こうとする【問45】



○1ヶ月に1冊も本を読まない児童のうち、75.1%が自分の思いや考えを「書こうとしない」、「どちらかといえば、書こうとしない」と回答している。

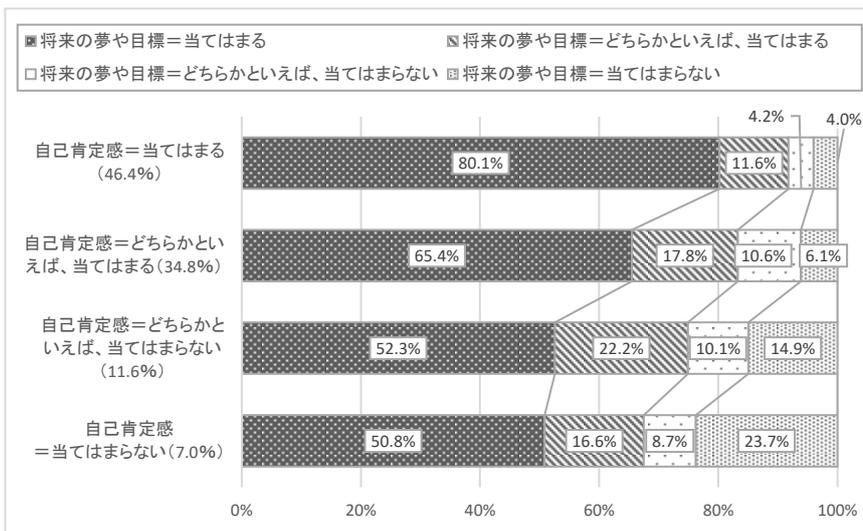
21 自己肯定感【問46】× 国語・算数の正答率



○「自分にはよいところがあると思う」と回答する児童の割合が高いほど、国語と算数の正答率が高くなっている。

○「当てはまらない」と回答した児童の国語と算数の正答率は、それぞれ71.6%、56.6%で、「当てはまる」と回答した児童とは、7~10ポイントほどの開きがある。

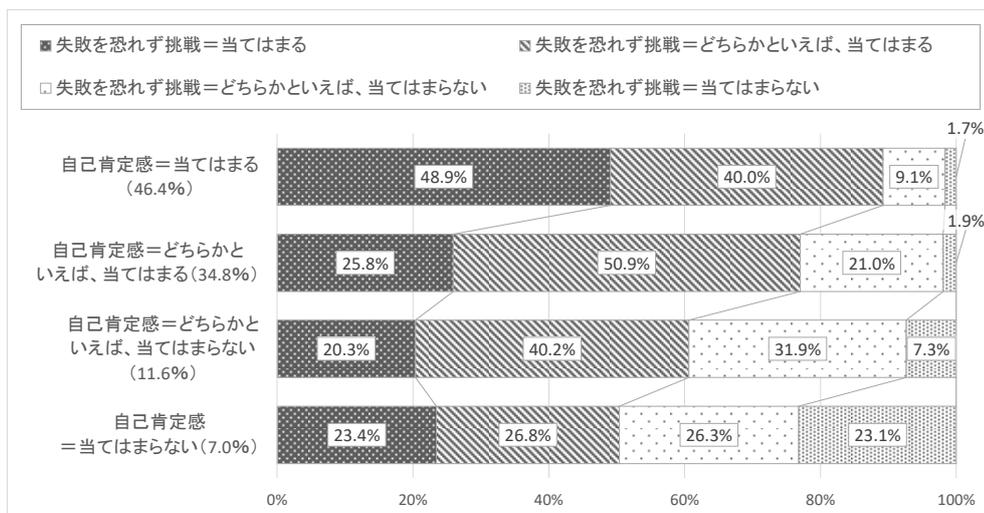
22 自己肯定感【問46】× 将来の夢や目標【問47】



○自己肯定感が比較的高い児童ほど、将来の夢や目標を持っていると回答している割合が高い。

○「自分には、よいところがない(当てはまらない)」と回答した児童のうち、32.4%の児童は、将来の夢や目標を「持っていない(当てはまらない)」「どちらかといえば、持っていない(どちらかといえば、当てはまらない)」と回答している。

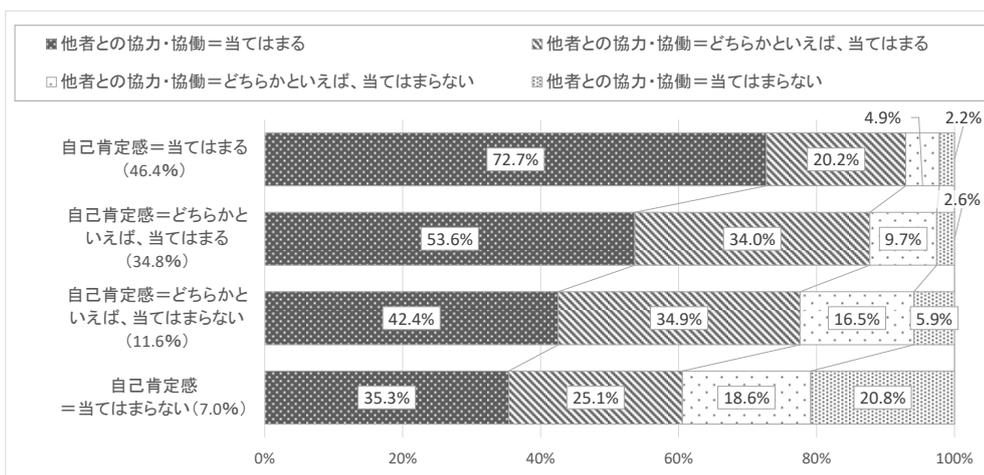
23 自己肯定感【問46】×失敗を恐れず挑戦【問49】



○「自分には、よいところがあると思う(当てはまる)」と回答した児童のうち、難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますかという問いに「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合は88.9%である。

○「自分には、よいところがあると思わない(当てはまらない)」と回答した児童のうち、「難しいことに挑戦する(当てはまる)」、「どちらかといえば、挑戦する(どちらかといえば、当てはまる)」と回答した児童の割合は50.2%である。

24 自己肯定感【問46】×他者との協力・協働【問50】

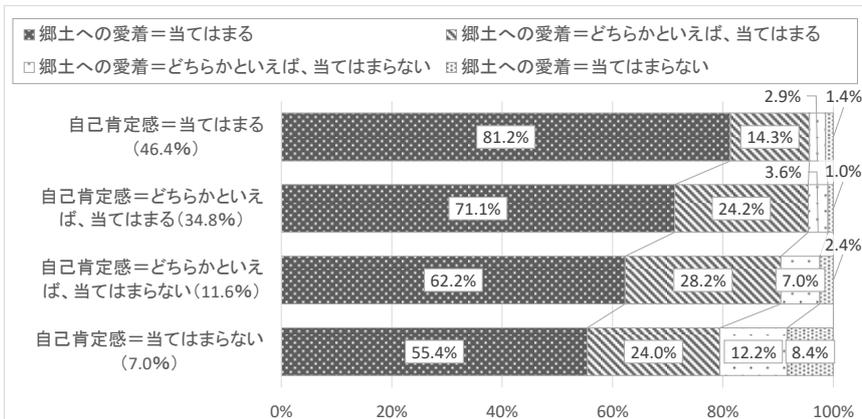


○自己肯定感が比較的高い児童ほど、学級みんなで協力して何かをやりとげ、うれしかったことがある(当てはまる)」と回答している割合が高い。

○「自分には、よいところがあると思うか」という質問に「当てはまらない」と回答した児童のうち、39.4%が、「学級みんなで協力して何かをやりとげ、うれしかったことがあるか」という質問に「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」と回答している。

II 調査結果の概要

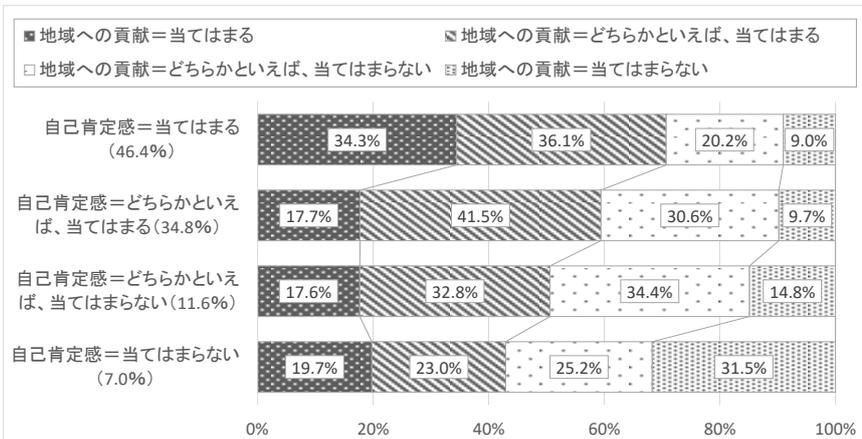
25 自己肯定感【問46】×郷土への愛着【問51】



○自己肯定感が比較的高い児童ほど、自分の住んでいる町がすきであると回答している割合が高い。

○「自分には、よいところがあると思わない(当てはまらない)」と回答した児童のうち、「自分の住んでいる町が好きですか」に当てはまらなると回答している児童の割合は8.4%である。

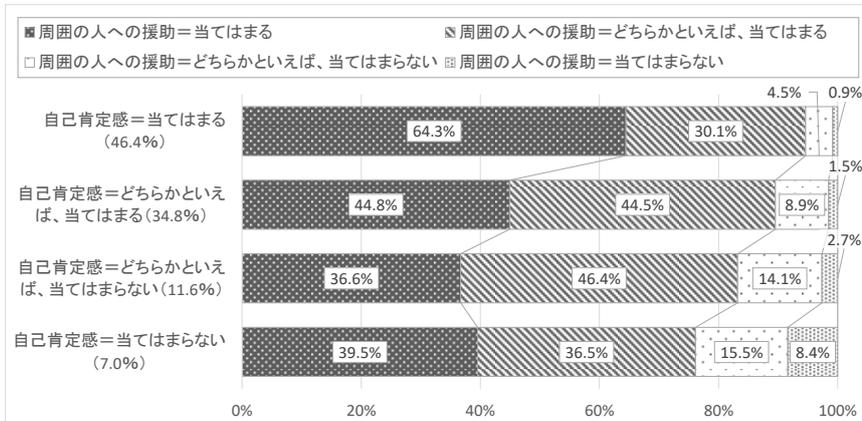
26 自己肯定感【問46】×地域への貢献【問53】



○自己肯定感が比較的高い児童ほど、地域や社会に対して貢献するために、何をすべきか考えることがあると回答している割合が高い。

○「自分には、よいところがあると思わない(当てはまらない)」と回答した児童のうち、「地域や社会に対して貢献するために、何をすべきか考えることがあるか」に「当てはまらない」と回答している児童の割合は31.5%である。

27 自己肯定感【問46】×周囲の人への援助【問54】



○自己肯定感が比較的高い児童ほど、人が困っているときに助けようとしている割合が高い。

○「自分には、よいところがあると思わない(当てはまらない)」と回答した児童のうち、「人が困っているときは、進んで助けている」に当てはまらなると回答している児童の割合は8.4%である。

資料 調査結果集計表

【共通】

問1 学校生活は、楽しいですか。

	楽しい	どちらかといえば、 楽しい	どちらかといえば、 楽しくない	楽しくない	無回答
R2	63.3%	29.7%	5.1%	1.9%	0.0%
R3	65.1%	28.7%	4.5%	1.7%	0.0%
R4	64.6%	28.7%	4.8%	1.8%	0.1%

問2 勉強は、好きですか。

	好きだ	どちらかといえば、 好きだ	どちらかといえば、 好きではない	好きではない	無回答
R2	20.7%	41.0%	28.1%	10.1%	0.1%
R3	22.5%	42.4%	25.8%	9.2%	0.0%
R4	20.8%	40.1%	28.0%	11.0%	0.1%

問3 勉強をすることは、大切なことだと思いますか。

	大切だ	どちらかといえば、 大切だ	どちらかといえば、 大切ではない	大切ではない	無回答
R2	80.3%	17.3%	1.5%	0.7%	0.2%
R3	84.6%	13.7%	1.0%	0.4%	0.2%
R4	82.7%	15.2%	1.2%	0.6%	0.3%

問4 勉強をする一番の理由は何ですか。

	わかると 楽しいから	受験に 役に立つから	将来の仕事に 役に立つから	生活するのに 役に立つから	ほめて もらえるから	家の人や まわりの人に いわれるから	無回答
R2	17.9%	13.7%	44.7%	18.7%	1.8%	3.1%	0.1%
R3	18.8%	13.5%	42.9%	20.3%	2.0%	2.3%	0.1%
R4	20.1%	13.0%	42.9%	18.3%	2.2%	3.2%	0.2%

II 調査結果の概要

問5～10 次の学習は好きですか。

		すきだ	どちらかといえば、 すきだ	どちらかといえば、 すきではない	すきではない	無回答
国語	R2	27.4%	39.0%	23.7%	9.7%	0.2%
	R3	29.7%	40.0%	21.8%	8.3%	0.1%
	R4	29.1%	39.4%	22.5%	8.8%	0.2%
社会	R2	33.8%	33.3%	22.4%	10.4%	0.1%
	R3	34.6%	34.0%	21.3%	9.9%	0.1%
	R4	34.5%	31.7%	22.1%	11.4%	0.1%
算数	R2	39.9%	28.6%	18.6%	12.7%	0.1%
	R3	40.3%	28.5%	18.5%	12.4%	0.2%
	R4	38.4%	27.3%	19.3%	14.7%	0.2%
理科	R2	53.7%	31.1%	10.5%	4.4%	0.2%
	R3	53.4%	31.6%	10.5%	4.2%	0.1%
	R4	52.9%	31.0%	11.4%	4.4%	0.2%
英語	R2	40.7%	31.8%	16.9%	10.4%	0.2%
	R3	39.6%	33.2%	17.6%	9.3%	0.1%
	R4	39.3%	33.0%	17.5%	10.1%	0.1%
総合	R2	49.2%	33.7%	12.3%	4.7%	0.2%
	R3	52.5%	32.5%	10.9%	3.9%	0.1%
	R4	49.4%	33.4%	12.3%	4.7%	0.2%

問11～15 次の授業は、よくわかりますか。

		わかる	どちらかといえば、 わかる	どちらかといえば、 わからない	わからない	無回答
国語	R2	56.9%	34.9%	6.2%	1.8%	0.2%
	R3	60.5%	32.6%	5.2%	1.3%	0.2%
	R4	60.0%	32.6%	5.7%	1.5%	0.1%
社会	R2	56.3%	31.8%	9.2%	2.6%	0.1%
	R3	54.8%	32.5%	10.2%	2.2%	0.2%
	R4	54.6%	32.0%	10.5%	2.7%	0.2%
算数	R2	58.2%	28.5%	9.6%	3.5%	0.1%
	R3	56.7%	29.1%	10.5%	3.5%	0.1%
	R4	56.0%	27.9%	11.3%	4.4%	0.3%
理科	R2	68.7%	25.1%	4.7%	1.3%	0.2%
	R3	68.3%	25.9%	4.6%	1.0%	0.1%
	R4	68.2%	25.8%	4.4%	1.2%	0.3%
英語	R2	51.3%	29.0%	13.2%	6.4%	0.1%
	R3	50.5%	30.5%	13.2%	5.6%	0.1%
	R4	50.6%	29.7%	13.4%	5.9%	0.2%

3. 生活や学習についてのアンケート

問16～21 授業で学んだことは、生活の中で役に立っていると思いますか。

		役に立つ	どちらかといえば、役に立つ	どちらかといえば、役に立たない	役に立たない	無回答
国語	R2	56.3%	34.1%	7.3%	2.1%	0.2%
	R3	58.8%	32.6%	6.7%	1.8%	0.1%
	R4	56.7%	33.4%	7.5%	2.1%	0.3%
社会	R2	58.8%	29.5%	9.0%	2.6%	0.2%
	R3	61.5%	28.3%	7.7%	2.3%	0.1%
	R4	61.6%	27.6%	8.4%	2.2%	0.2%
算数	R2	73.0%	20.7%	4.4%	1.6%	0.2%
	R3	75.9%	19.1%	3.5%	1.3%	0.1%
	R4	74.8%	19.3%	4.3%	1.3%	0.3%
理科	R2	51.5%	34.1%	11.0%	3.3%	0.1%
	R3	57.7%	30.4%	9.4%	2.4%	0.1%
	R4	55.5%	31.5%	9.8%	2.9%	0.2%
英語	R2	51.5%	27.0%	14.8%	6.5%	0.2%
	R3	52.2%	28.1%	13.6%	5.9%	0.1%
	R4	49.7%	28.5%	14.8%	6.6%	0.3%
総合	R2	50.4%	32.6%	12.5%	4.3%	0.3%
	R3	53.7%	31.6%	11.1%	3.4%	0.2%
	R4	51.8%	31.8%	11.8%	4.2%	0.3%

問22～27 授業で学んだことは、将来、社会に出たときに、役に立つと思いますか。

		役に立つ	どちらかといえば、役に立つ	どちらかといえば、役に立たない	役に立たない	無回答
国語	R2	73.2%	20.7%	4.3%	1.5%	0.2%
	R3	74.6%	20.1%	3.7%	1.3%	0.2%
	R4	75.2%	19.3%	4.0%	1.2%	0.3%
社会	R2	73.7%	20.2%	4.3%	1.6%	0.1%
	R3	76.0%	18.7%	4.0%	1.2%	0.1%
	R4	75.7%	18.9%	3.9%	1.3%	0.2%
算数	R2	80.0%	15.7%	3.0%	1.2%	0.1%
	R3	82.4%	14.0%	2.4%	1.1%	0.1%
	R4	81.9%	14.0%	2.8%	1.1%	0.1%
理科	R2	49.4%	34.4%	12.7%	3.3%	0.1%
	R3	53.6%	33.3%	10.3%	2.6%	0.1%
	R4	52.6%	32.6%	11.3%	3.3%	0.2%
英語	R2	77.0%	16.7%	4.1%	2.1%	0.1%
	R3	78.0%	16.1%	4.1%	1.7%	0.1%
	R4	76.6%	17.2%	4.0%	1.9%	0.2%
総合	R2	57.3%	30.0%	9.5%	3.1%	0.1%
	R3	60.0%	29.4%	8.1%	2.5%	0.1%
	R4	60.0%	28.3%	8.6%	2.9%	0.2%

II 調査結果の概要

問28～33 授業の中で、わからないことがあったら、どうすることが多いですか。

	先生にたずねる	友達にたずねる	家の人にたずねる	じゅくや家庭教師の先生にたずねる	自分で調べる	そのままにしておく
R2	68.1%	78.7%	78.8%	28.0%	63.6%	12.8%
R3	65.5%	82.3%	78.4%	28.8%	62.4%	12.6%
R4	65.6%	83.2%	77.0%	27.6%	60.8%	14.8%

問34 学校のある日、家で1日どのくらい勉強しますか。

	3時間以上	2時間以上、3時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	30分以上、1時間より少ない	30分未満	まったくしない	無回答
R2	13.0%	13.4%	24.4%	28.0%	17.1%	3.9%	0.1%
R3	11.4%	13.6%	24.7%	28.7%	17.1%	4.4%	0.1%
R4	10.3%	12.6%	23.6%	28.2%	19.7%	5.4%	0.1%

問35 学校が休みの日、家で1日どのくらい勉強しますか。

	3時間以上	2時間以上、3時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	30分以上、1時間より少ない	30分未満	まったくしない	無回答
R2	19.2%	15.2%	20.6%	20.2%	15.8%	8.9%	0.1%
R3	18.8%	14.3%	20.6%	20.4%	16.6%	9.1%	0.0%
R4	17.1%	12.4%	18.8%	21.0%	18.8%	11.7%	0.1%

問36 ふだん、家でしている勉強は、どれに近いですか。

	学校の宿題のほかにも毎日勉強する	学校の宿題のほかにもときどき勉強する	学校の宿題だけ勉強する	学校の宿題があってもあまり勉強しない	無回答
R2	47.4%	35.0%	15.1%	2.4%	0.1%
R3	50.1%	33.5%	14.2%	2.0%	0.1%
R4	46.4%	35.2%	15.6%	2.5%	0.1%

問37 学習じゅくに、通っていますか。

	通っている	通っていない	無回答
R2	58.2%	41.6%	0.2%
R3	57.6%	42.2%	0.1%
R4	58.3%	41.5%	0.2%

問38 学校がある日の睡眠時間はどのくらいですか。

	10時間以上	9時間以上、10時間より少ない	8時間以上、9時間より少ない	7時間以上、8時間より少ない	6時間以上、7時間より少ない	6時間より少ない	無回答
R2	10.5%	29.0%	31.5%	17.7%	8.1%	3.1%	0.1%
R3	10.7%	30.8%	32.3%	16.9%	6.5%	2.6%	0.1%
R4	10.7%	30.5%	32.6%	16.2%	6.9%	2.8%	0.1%

問39 毎日、朝食を食べますか。

	必ず食べる	たいてい食べる	食べないことが多い	食べない	無回答
R2	78.9%	15.6%	4.4%	1.1%	0.1%
R3	80.5%	14.9%	3.4%	1.2%	0.1%
R4	79.4%	15.2%	3.8%	1.4%	0.1%

3. 生活や学習についてのアンケート

※ 学校に持っていくものは、前日にきちんと用意しますか。

	用意する	どちらかといえば、 用意する	どちらかといえば、 用意しない	用意しない	無回答
R2	56.1%	30.8%	9.0%	3.9%	0.1%
R3
R4

問40 学校がある日、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか。

	4時間以上	3時間以上、 4時間より 少ない	2時間以上、 3時間より 少ない	1時間以上、 2時間より 少ない	30分以上、 1時間より 少ない	30分未満	まったく しない	無回答
R2	12.6%	10.6%	15.8%	22.6%	15.2%	10.6%	12.5%	0.2%
R3	12.0%	10.1%	15.9%	23.8%	14.6%	10.6%	12.8%	0.1%
R4	14.2%	11.2%	15.6%	23.9%	14.4%	9.8%	10.7%	0.2%

※ 学校がある日、1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり聞いたりしますか。

	4時間以上	3時間以上、 4時間より 少ない	2時間以上、 3時間より 少ない	1時間以上、 2時間より 少ない	30分以上、 1時間より 少ない	30分未満	まったく しない	無回答
R2	12.3%	11.7%	18.7%	23.3%	16.2%	10.4%	7.1%	0.2%
R3	10.5%	11.0%	19.0%	24.0%	16.5%	11.2%	7.6%	0.1%
R4

問41 学校がある日、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォン等で通話やメール、インターネットをしますか。

	4時間以上	3時間以上、 4時間より 少ない	2時間以上、 3時間より 少ない	1時間以上、 2時間より 少ない	30分以上、 1時間より 少ない	30分未満	まったく しない	無回答
R2	5.1%	4.2%	6.6%	9.8%	12.2%	29.4%	32.4%	0.3%
R3	5.0%	4.3%	6.3%	10.3%	13.1%	30.8%	29.9%	0.2%
R4	6.6%	5.3%	7.6%	11.8%	12.9%	28.9%	26.6%	0.1%

問42 携帯電話やスマートフォン等の使い方について、家の人と約束したことを守っていますか。

	きちんと 守っている	だいたい 守っている	あまり 守っていない	守っていない、 または、約束はない	携帯電話や スマートフォン等を 持っていない	無回答
R2	45.7%	21.7%	2.6%	7.0%	22.0%	1.0%
R3	47.3%	21.9%	2.5%	6.8%	20.3%	1.2%
R4	44.6%	24.7%	3.1%	7.3%	19.1%	1.2%

問43 月に何さつぐらい本(マンガ・雑誌をのぞく)を読みますか。

	10冊以上	7~9冊	4~6冊	1~3冊	0冊	無回答	平均冊数
R2	32.0%	5.5%	14.4%	31.4%	15.5%	1.1%	6.4冊
R3	33.3%	5.6%	14.9%	30.3%	15.2%	0.7%	7.4冊
R4	31.4%	5.3%	14.0%	31.0%	17.3%	1.0%	9.9冊

II 調査結果の概要

問44 日常生活(学校生活もふくめて)の中で、自分の思いや考えを積極的に話そうとしていますか。

	話そうとしている	どちらかといえば、話そうとしている	どちらかといえば、話そうしていない	話そうしていない	無回答
R2	36.7%	41.1%	16.5%	5.6%	0.2%
R3	36.4%	42.8%	15.7%	4.9%	0.1%
R4	37.5%	41.6%	16.0%	4.7%	0.1%

問45 日常生活(学校生活もふくめて)の中で、日記を書くなど、自分の思いや考えを文章に書こうとしていますか。

	書こうとしている	どちらかといえば、書こうとしている	どちらかといえば、書こうしていない	書こうしていない	無回答
R2	13.1%	21.5%	28.1%	37.0%	0.2%
R3	15.8%	22.4%	27.5%	34.1%	0.2%
R4	14.3%	21.0%	28.2%	36.3%	0.1%

問46 自分には、よいところがあると思いますか。

	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	37.2%	38.9%	15.3%	8.3%	0.3%
R3	42.2%	37.2%	12.9%	7.4%	0.3%
R4	46.4%	34.8%	11.6%	7.0%	0.2%

問47 将来の夢や目標を持っていますか。

	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	65.7%	16.5%	8.8%	8.7%	0.3%
R3	69.9%	15.3%	7.5%	7.0%	0.2%
R4	69.6%	15.3%	7.4%	7.4%	0.2%

問48 人の役に立つ人間になりたいと思いますか。

	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	73.2%	21.2%	3.8%	1.6%	0.2%
R3	76.3%	19.6%	2.7%	1.2%	0.3%
R4	75.9%	19.2%	3.4%	1.2%	0.3%

問49 難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか。

	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	34.7%	43.8%	16.9%	4.5%	0.2%
R3	36.2%	43.6%	16.0%	3.9%	0.2%
R4	35.7%	42.8%	17.1%	3.9%	0.4%

3. 生活や学習についてのアンケート

問50 学級みんなで協力して何かをやりとげ、うれしかったことがありますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	53.2%	29.7%	11.3%	5.6%	0.3%
R3	59.8%	27.9%	8.3%	3.8%	0.2%
R4	59.9%	27.0%	8.9%	4.0%	0.2%

問51 あなたは、自分の住んでいる町がすきですか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	67.7%	23.4%	6.1%	2.5%	0.3%
R3	70.6%	22.1%	4.8%	2.2%	0.3%
R4	73.6%	20.0%	4.3%	1.9%	0.2%

問52 今、住んでいる地域の行事に参加していますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	25.7%	31.8%	23.2%	18.9%	0.3%
R3	23.2%	32.3%	24.2%	19.9%	0.4%
R4	20.2%	30.6%	25.4%	23.4%	0.4%

問53 地域や社会をよりよくするために、何をすべきか考えることがありますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	24.0%	36.6%	26.8%	12.3%	0.3%
R3	27.2%	36.8%	24.8%	10.7%	0.4%
R4	25.5%	36.6%	25.8%	11.5%	0.4%

問54 人が困っているときは、進んで助けていますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2	46.9%	40.6%	9.7%	2.4%	0.3%
R3	52.2%	37.5%	8.0%	2.0%	0.3%
R4	52.5%	37.4%	7.9%	1.8%	0.3%

【国語】

問55 わからない言葉があるときは、国語辞典(電子辞書をふくむ)を使用しますか。

	よく使う	どちらかといえば、 よく使う	どちらかといえば、 あまり使わない	あまり使わない	無回答
R2	33.6%	31.6%	20.6%	13.9%	0.3%
R3	30.1%	31.1%	23.0%	15.4%	0.3%
R4	26.8%	32.0%	24.2%	16.6%	0.2%

II 調査結果の概要

問56 国語の授業で伝えたいことに合わせて事がらを集め、自分の考えを話したり、書いたりしていますか。

	している	どちらかといえば、 している	どちらかといえば、 していない	していない	無回答
R2	29.5%	41.0%	22.3%	6.8%	0.4%
R3	31.6%	42.0%	20.5%	5.5%	0.3%
R4	33.7%	41.1%	19.8%	5.0%	0.3%

問57 国語の授業で意見などを伝えるとき、うまく伝わるように話の組み立てや表し方を工夫していますか。

	している	どちらかといえば、 している	どちらかといえば、 していない	していない	無回答
R2	26.9%	44.0%	21.4%	7.3%	0.4%
R3	30.4%	43.6%	19.7%	5.8%	0.4%
R4	30.5%	43.3%	20.0%	5.7%	0.4%

【社会】

問58 社会の授業で、学習課題(学習問題)について、調べたり話し合ったり考えたりすることは好きですか。

	好きだ	どちらかといえば、 好きだ	どちらかといえば、 好きではない	好きではない	無回答
R2	37.0%	33.7%	20.3%	8.6%	0.4%
R3	38.9%	35.2%	18.1%	7.4%	0.4%
R4	40.3%	33.5%	17.7%	8.2%	0.3%

問59 社会の授業で、地図帳を使用していますか。

	よく使用している	使用している	どちらかといえば、 使用している	あまり 使用していない	無回答
R2	35.9%	34.2%	18.2%	11.3%	0.4%
R3	37.8%	34.5%	16.8%	10.4%	0.4%
R4	34.4%	34.5%	18.9%	11.7%	0.5%

問60 社会のできごとやニュースに関心がありますか。

	関心がある	どちらかといえば、 関心がある	どちらかといえば、 関心がない	関心がない	無回答
R2	41.2%	36.8%	14.7%	6.8%	0.5%
R3	39.2%	38.9%	14.8%	6.6%	0.4%
R4	43.4%	34.4%	15.2%	6.5%	0.4%

3. 生活や学習についてのアンケート

【算数】

問61 算数の授業で新しい問題に出会ったとき、それを解いてみたいと思いますか。

	思う	どちらかといえば、 思う	どちらかといえば、 思わない	思わない	無回答
R2	53.0%	27.6%	12.3%	6.6%	0.5%
R3	56.0%	26.6%	11.2%	5.7%	0.4%
R4	53.5%	26.5%	12.4%	7.1%	0.4%

問62 算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずに色々な方法を考えますか。

	考える	どちらかといえば、 考える	どちらかといえば、 考えない	考えない	無回答
R2	50.0%	35.3%	10.5%	3.7%	0.5%
R3	52.1%	34.9%	9.6%	2.9%	0.4%
R4	50.0%	36.0%	10.4%	3.1%	0.4%

問63 算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考えますか。

	考える	どちらかといえば、 考える	どちらかといえば、 考えない	考えない	無回答
R2	49.5%	31.2%	13.4%	0.6%	0.5%
R3	49.8%	31.5%	13.2%	5.0%	0.4%
R4	48.7%	31.4%	13.7%	5.6%	0.4%

【理科】

問64 理科の勉強で、実験や観察をすることは好きですか。

	好きだ	どちらかといえば、 好きだ	どちらかといえば、 好きではない	好きではない	無回答
R2	70.1%	19.7%	6.5%	3.2%	0.5%
R3	70.5%	20.1%	5.9%	3.1%	0.5%
R4	71.7%	18.8%	5.6%	3.4%	0.5%

問65 理科の授業で、自分の考えを周りの人に説明したり、発表したりしていますか。

	している	どちらかといえば、 している	どちらかといえば、 していない	していない	無回答
R2	26.6%	31.6%	28.3%	13.0%	0.5%
R3	27.9%	33.1%	27.8%	10.5%	0.5%
R4	29.3%	32.8%	26.3%	11.1%	0.5%

問66 理科の授業の後に、習ったことに関わることで、もっと知りたいことができましたか。

	よくできた	時々できた	あまり でてこなかった	まったく でてこなかった	無回答
R2	35.0%	43.3%	16.1%	5.1%	0.5%
R3	37.6%	43.1%	14.2%	4.5%	0.5%
R4	37.0%	41.4%	15.7%	5.5%	0.5%

II 調査結果の概要

【外国語活動、外国語】

問67 もし、道で出会った外国人に英語で話しかけられたら、どうしますか。

	何とか英語で話そうとする	日本語で話そうとする	だまっている	その場からにげる	無回答
R2	75.7%	13.2%	4.8%	5.7%	0.6%
R3	78.4%	11.9%	4.4%	4.7%	0.5%
R4	78.4%	12.2%	3.8%	5.1%	0.5%

問68 外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知りたいと思いませんか。

	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	無回答
R2	46.2%	30.1%	13.8%	9.2%	0.6%
R3	48.6%	30.0%	13.4%	7.5%	0.5%
R4	49.1%	29.6%	12.9%	7.7%	0.5%

問69 将来、外国へ留学したり、国際的な仕事についたりしてみたいと思いませんか。

	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	無回答
R2	21.5%	22.3%	28.4%	27.1%	0.6%
R3	22.3%	22.9%	29.1%	25.0%	0.6%
R4	22.5%	23.3%	28.7%	24.7%	0.6%

【総合的な学習の時間】

問70 総合的な学習の時間では、自分が興味をもったことや、疑問に思ったことを学習できていると思いませんか。

	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	無回答
R2	38.3%	40.6%	15.0%	5.5%	0.6%
R3	43.0%	39.4%	12.6%	4.3%	0.6%
R4	42.2%	38.4%	13.4%	5.3%	0.7%

問71 情報を集めて、整理したりまとめたりするやり方がわかるようになったと思いませんか。

	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	無回答
R2	40.6%	39.8%	13.9%	5.0%	0.6%
R3	44.6%	39.7%	11.3%	3.8%	0.6%
R4	44.8%	37.7%	12.5%	4.3%	0.6%

3. 生活や学習についてのアンケート

問72 総合的な学習の時間では、周りの人と話し合ったり、協力したりして学習を進めていますか。

	進めている	どちらかといえば、 進めている	どちらかといえば、 進めていない	進めていない	無回答
R2	48.4%	37.0%	10.2%	3.7%	0.6%
R3	55.1%	33.7%	8.1%	2.4%	0.6%
R4	50.9%	36.2%	9.4%	2.8%	0.7%

【ICT機器の使用】

問73 4年生までに受けた授業で、GIGA端末などのICT機器をどの程度使用しましたか。

	ほぼ毎日	週1回以上	月1回以上	月1回未満	無回答
R2
R3
R4	32.0%	46.4%	15.2%	5.5%	0.8%

問74 学校がある日(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、スマートフォンやコンピュータ・GIGA端末などのICT機器を、勉強のために使っていますか。

	3時間以上	2時間以上、 3時間より少ない	1時間以上、 2時間より少ない	30分以上、 1時間より少ない	30分より少ない	まったく 使っていない	無回答
R2
R3
R4	5.8%	7.0%	14.2%	27.8%	31.7%	12.6%	0.7%

問75 先生に指示されたときだけでなく、自分から進んでGIGA端末を活用していますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2
R3
R4	30.4%	33.2%	22.9%	12.8%	0.7%

問76 GIGA端末を活用することで、学習を見通したり振り返ったり、話し合い、自分の考えを深めることができていますか。

	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない	無回答
R2
R3
R4	38.3%	37.3%	16.7%	6.9%	0.7%

